

には屹度どこかに拭つても拭ひ落せない舊文物の香ひが残つてゐるやうに思ふ。どうかしてそれを捜して歩きたいと云ふのが予の宿望であつたけれども、到頭それをも實行する事が出来なかつた。予の大阪に滞留したのは前後二回の旅行を推算して一週間よりは長くない。今その當時漫ろに記録した感想の類を再讀すると無知なる少人の空しき感激に過ぎないのを氣付く。それを再録するさへも氣恥しい氣がするのである。

四十二年四月一日といふ日附の予の一友に發したる私信に曰く「千日前の雑沓のうちを今は予獨りで彷徨して居る。丁度燈が點いた頃である。行人はややけしき立つて居た。知らない所でかう群集と雜じつて歩くと却つて何時の間にか自分が旅人だといふ事さへ忘れて、恰も生得この市の人でかるかの如き親しみを感じて實に愉快である。種々の猥雜なる興行物も、その繪看板も、みな或必要を持つて居ると云ふ事

が分つた。予は今播重と云ふ女義太夫の寄席から笑ひながら出て來たところだ。そこで無知なる女が苦面で古への淨瑠璃を歌ふと云ふ事も、また皆意味のある事である。一體どうしてこの都會から義太夫といふ藝術が発生したと云ふ事も、埃臭さい考證からでなくとも、今生々と把持する事が出来るやうに思はれる。昔から例令ば盆踊の歌謠でも、關東のものは短くして言ひ廻はしの機智を崇び、關西のものは長く且事を叙するに傾いたと云ふ事である。元祿以前に江戸で支離滅裂な歌詞に合はせて舞踊してゐた時上方では既に人情の藝術が行はれて居たと云ふではないか。京阪に來て親しく其都會其近國の地理人情を見るとさう云ふ事が實際尤もだと考へられて來るさう考へると亦義太夫といふ、あの南國的な官能的な、そして亦複雑な心理を文にした藝術の意義もしむみりと解する事が出来るのである。明日は文樂に行かうと思ふ。それからあらゆる芝居を見て廻らうと思ふ。繪看板の前面を見

た丈でさへもうぐつと有り難さがこみ上げて来る。——だけでも今日は気が急いで居る之からもつと歩かなくてはならぬ。今郵便局の窓の柳でこの手紙を書いて居ると灯ともし頃の街のごよもしがひしびしと官能を襲つてくる。そして落付いては居られない。——總じて大阪の人は今でもみんな人間らしい。寛濶と云ふ昔の語が當はまるのかしらん。社會制度の機關といふより寧ろ、欲情ある人間といふやうに見える。彼等は忙がしさうに見えて、其實のんきである。金は吝むけれども、時を浪費する事を厭はない。電車にのつても、帯前垂でなければ背廣である。カアキイ色や八字髭が目立たないのが何より愉快である。自由な平民の都府と云つて可いだらう。予は今この自由寛濶なる氣分を吹き込まれて護謄紙のやうにはづんだ心をもち、ここの雑沓の中を歩いてゐるのだ。云々。

然しさうその時は書いたけれども今は大阪にも三人の華族が出来る。

予の感激を誘うた千日前はもう焼けてゐる。

同じ日に或る他の友人に書き送つた書翰にも、大阪にはうち見る所一種類の階級しかない」と書いてある。と云ふと餘り誇張に流れるが兎に角ここが町人の町であるとは普通の意味で云ふ事が出来る。だからして此町の店頭に浮世繪が似付かはしく、義太夫節が今も尙この町の情緒生活に親しい所以だと思ふ。電車などに乗つても乗合は角帯の商人で無ければ背廣の會社員である。人の話に官吏なども大阪へ來ると往々商賣人に化つてしまふと云ふ事である。

「京都を歩いて居ると無用のものが多く、ただ廣くて直き厭になるが、大阪に至つては街區のどの一角を仕切り取つても活潑な「生活」の斷片を掴む事が出来るやうに感ぜられる。京都は——恰もその妓女舞子の如くに——偏へに他郷人の爲めに市の計をなしてゐるやうに見えるが、大阪はまたその一見不愛相な商人の如く、他には構はないでひた

すら自家の爲めに働いて居るのである。だから千日前でも道頓堀でも、東京の淺草、京都の京極などに見られない一種の面白味がある。生活が手輕で實用的なのだ。たとへば其街區の數多き飲食店の如きも、大阪見物の他郷人よりもむしろ同じ町の人の氣散じに便利に出來て居るやうに見える。且東京とは違つて遊樂の街區が略一箇所に集中して居るからして、この市の鳥瞰は東京のやうに散漫でなくつて一つの有機體としての大阪市の形態及び生理の觀相を味ははしめる。云々。

繪畫的形象に向つて深き興味を有する予が如きに向つては、大阪の都會その街道その橋梁また行人の風姿、商店の飾り方などは尤も愉快なる觀相の對象となつた。四月二日に手記に曰く、「昨日は大阪へ來て一日暮らした。……その日の午前中はそのあらゆる賑かな通り、河岸、橋梁等を見て歩いた。予は都會の形態的の象徴は橋梁に存すると思ふ。京町から平野橋それから今迄の道に直角に歩いて思案橋、博物館、農人町

住吉町の通りから道頓堀に出て、それから中の島まで引返した。大阪の河岸の印象は東京とは大部違ふ。大阪の河岸は夏は黄ろい羽目板と簾とで持ち切つて居るのであるが、それでもたとへば尼ヶ崎橋から上下を見通した所のやうに白壁土藏も少くはない。東京のやうに煉瓦は多くない。白壁には小さい窓が二つ乃至四つ五つ附いて居て、これが多少暗示的な何かそのうちに昔の傳奇でも潜んで居るやうな何物かを持つて居る。白壁にはよく酒の銘が塗り上げられてある。屢見るのは福翁、白鶴、金霞、また各種の正宗とそれから波に日の出の朝日ビール。——「尼ヶ崎橋に立つて不圖東京の今川橋に居るやうな氣になつた。——ここは兩側の家、今の倉庫を除けば河に面した兩側には主に玻璃障子を立てた家が並んで居る。それに小さい欄干の附いた出窓が張り出て、松や萬年青や檜などの盆栽が置かれてある。赤と黒との昔風の印度更紗の風呂敷、こんなものはもう東京では見られない。それから襦袢とい

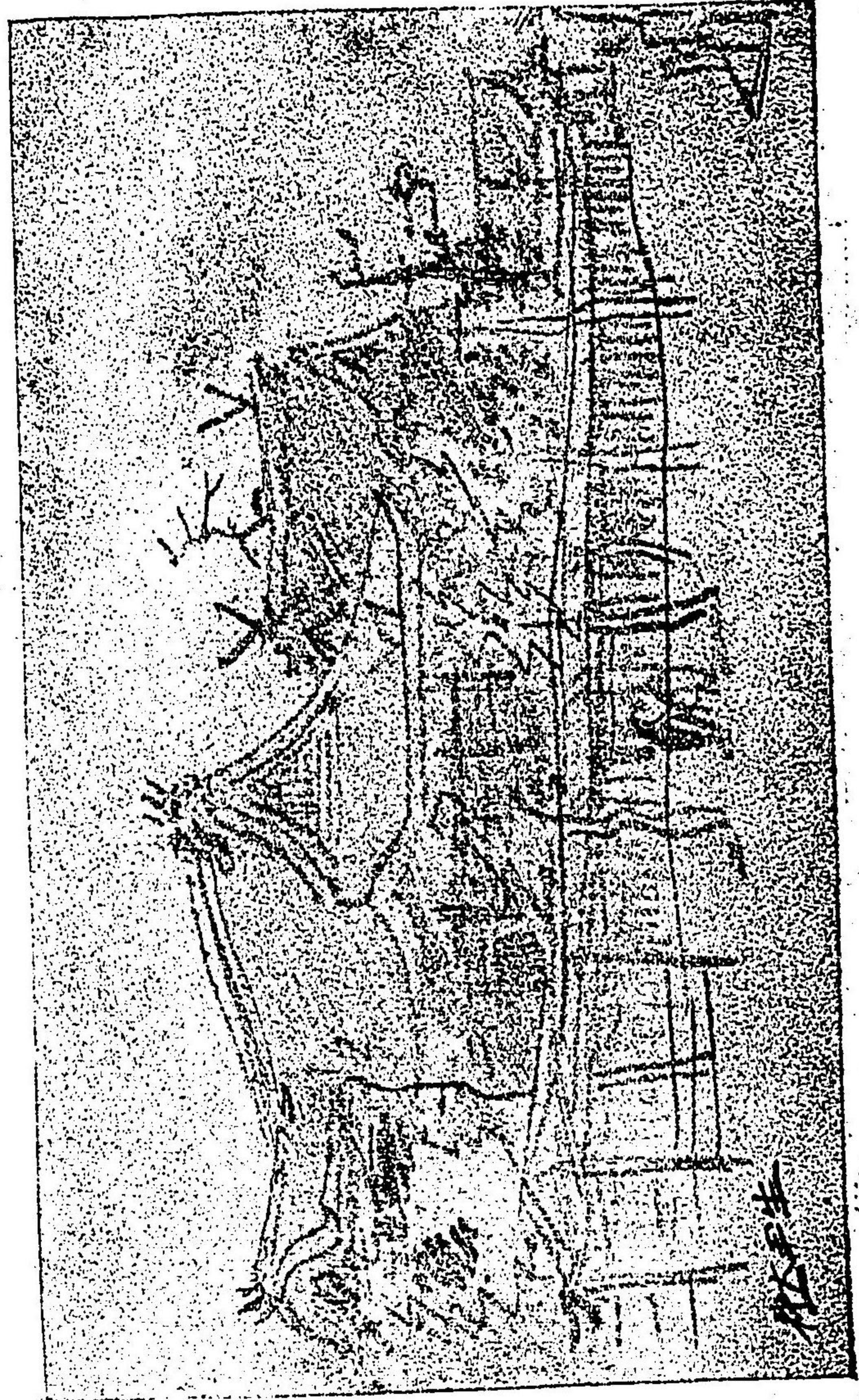
ふやうなものが軒下に干されてある……と云ふやうな錯雑した景色の後ろに——大阪風に棟数の多いごたごたした屋根の群の上に遙かに聳き立つ物干が見える。物干には幾聯となき手拭がひらしやらと風に揺れてゐる。今川橋でも同じやうなものが見られた。而かも二代か三代かの廣重の繪にも取られてある所を見ると昔の鳴海の宿の鳴海絞を懸け巾す店と同じく少し繪心のある人の心を惹くものと見える。それからある古本屋で春信の浴湯圖の板書の柔いモルビデッスを見たことを叙し、江戸の浮世繪は現に大阪に於ては東京に於けるよりも似つかはしい」と書いてある。それから又大阪を漫歩するのは京都を歩くより愉快だ。京都は常に多くの漫遊者を扱ひ慣れて居るから旅人として向ふに氣が付かせずにその横顔を覗込むと云ふ事は出来ない。そして畫家の目を引く光景に舞子と異人といふやうな粗い對照も少くは無い。夫れに反して大阪はいかにも古風の老舗の如く古いままで

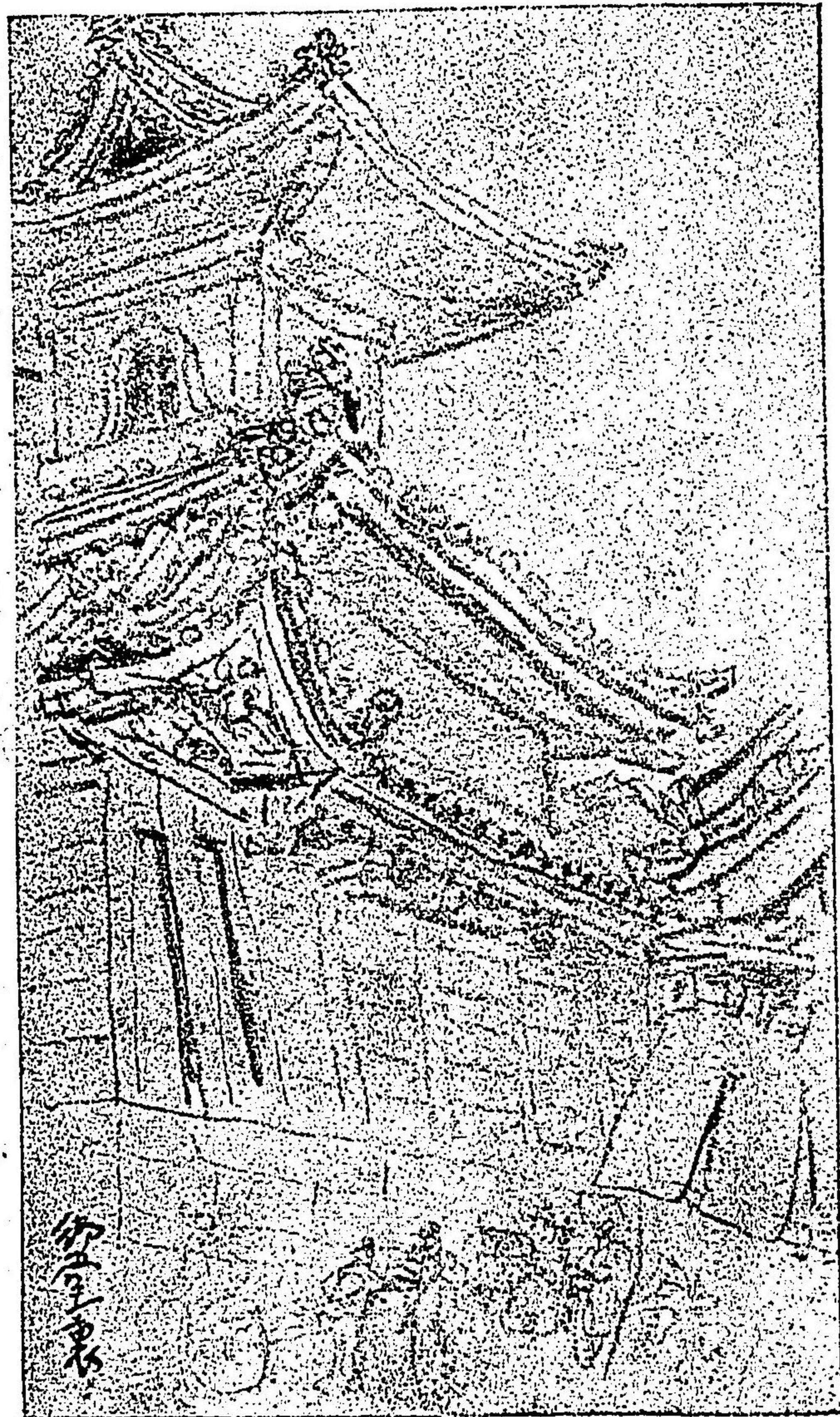
固まつてゐる。

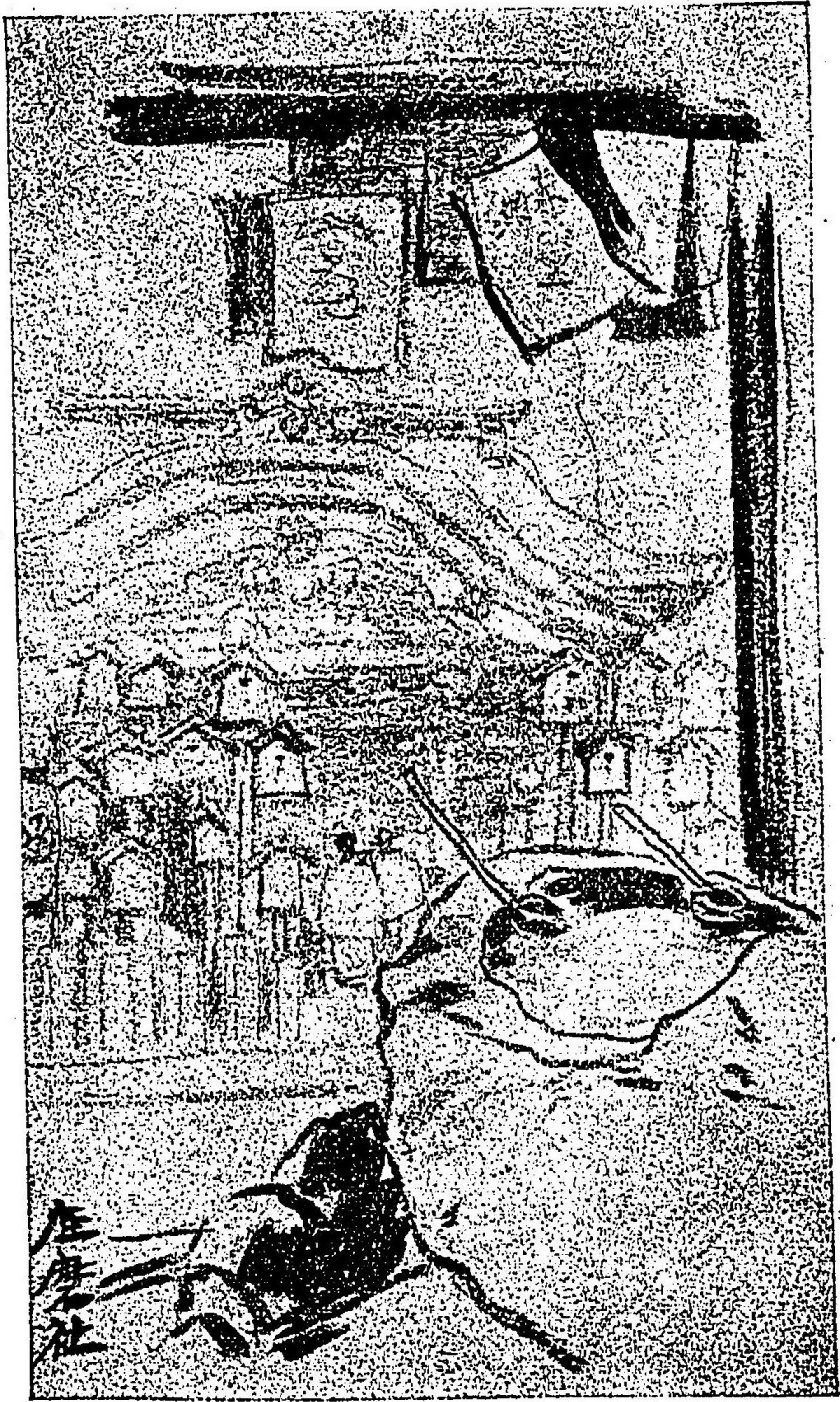
「道は氣にかかるほど狭く、それに應じて屋根も低い。蒲鉾屋は例によつて紅緑の色蒲鉾を並べ、壽司屋の鮓の配列、烏屋の招牌の添標、芝居屋の行燈、饅頭屋の提灯まで、みな草雙紙の見返しのやうな一様の趣味から出来てゐるのである。」

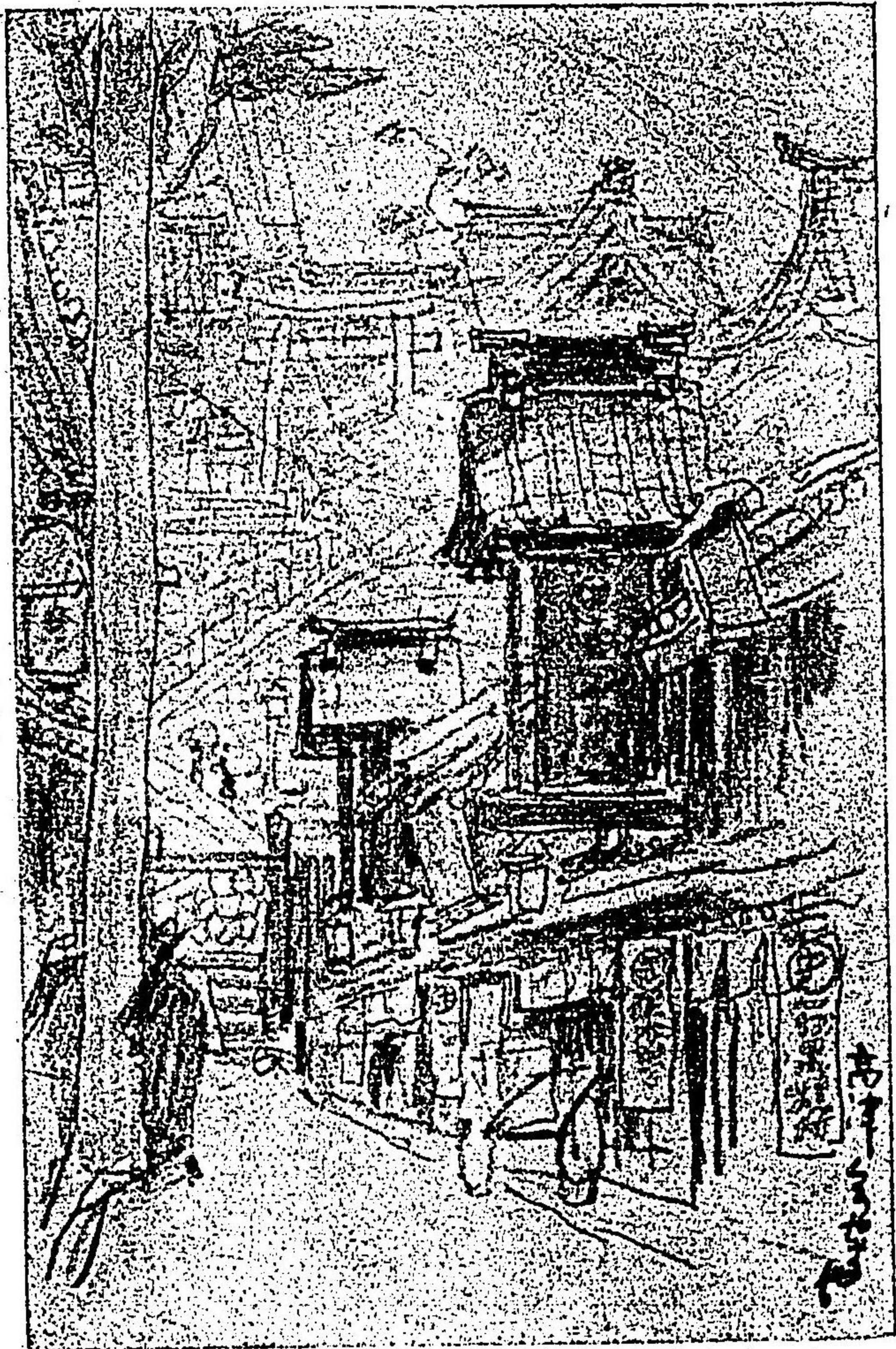
「南區のある通りには紅で塗つた質屋の格子戸の外に、心學講話、藤澤老先生經卷御講義」などといふ札さへ見られた。」

そろそろ予の材料も盡きて来る。石井柏亭君の話に大阪の商家などで、まだうら若い細君などが腰の邊に重さうな鍵の束をさげてゐるのを屢見るが、非常にシャルマンなものである。相だ東京では四日市町の酒屋の通りなどで、大きな木札に付いた鍵をさげながら前掛の太い眞田を腰に結んだ男の揚荷の監督をしてゐる所などを見ることがあるが、それがエラスケスなら、大阪のは英山、英泉等の趣である。(完)











大阪の市街

薄田泣菫

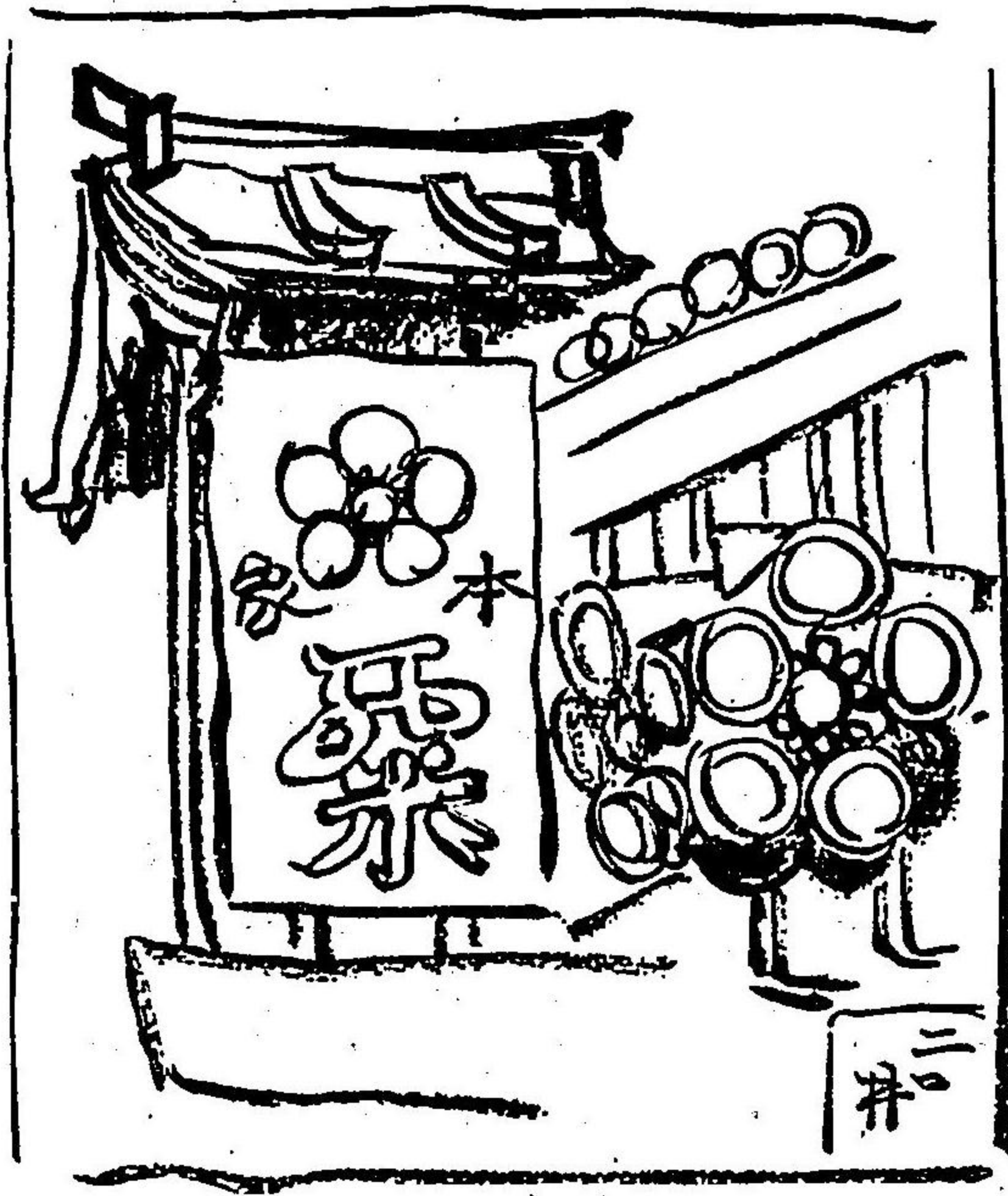
いつだつたか青柳有美君が大阪に遊びに来たので顔馴染のもの
十人ばかり寄つて築地の何とか言つた樓で酒を掬み交はしたことが
あつたその時何かの談話の尋でに内藤湖南君が大阪といふところは
ある町から他の町へ往くのに大抵の人が通らねばならないまたは通
る事になつてゐる極つた路筋といふものが無いらしい自分は嶋町の
家から中の嶋の新聞社へ出掛けてゆくのに路筋を俵夫の勝手にまか
せて黙つて見てゐるとそれが毎日のやうに異つた路を曳いてゐるご
うも俵夫がその日その日の出来心で路を撰つてゐるとしか思はれな
いと言つた事があるこれは湖南君ばかりでなく誰でも少し氣をつけ
て俵に乗つてゐるものは皆氣のつく事で一つには船場嶋の内それか

(124)

ら東横堀から上本町の高臺へかけては市街の區劃が碁盤の目のやう
にきちんとしてゐるので撰好みをする近道といふものが無いのにも
よるのだらうがまた一つには大阪の人が道を歩くのにも俵一つ曳く
のにもその時々々の氣分で歩いたり曳いたりしてゐるのだと見る事が出
来るだから大阪の俵に乗つて見るとかかりつけの同じ帳場の曳子で
あつてその日その日の出来で乗心地が非常に違ふ事があるこれは他
でもない町そのものになつぷりと出てゐるその日の氣分が俵夫の身
體を支配するので唯り俵には限らないてくてく歩いてゐてもよく氣
をつけて見ると午前と午後とでがらりと町の氣分が違ふのに出會す
事が度々ある云ふまでもなくこれは何處にでもあることなのだらう
がわけて大阪の市街にはそれが甚いやうに思はれる静かな墓地のや
うなまたは大寺の庫裡のやうな京都の市街に比べるとそれがはつき
りと見分けられるといふのは大阪はどこまでも活動の都でここに動

(125)

いてゐる都人の気分が何の遠慮もなく露出しに出て来て、そこを通り合はせた凡てのものを、その間にひきすり込まねば止むまいとするのだ。

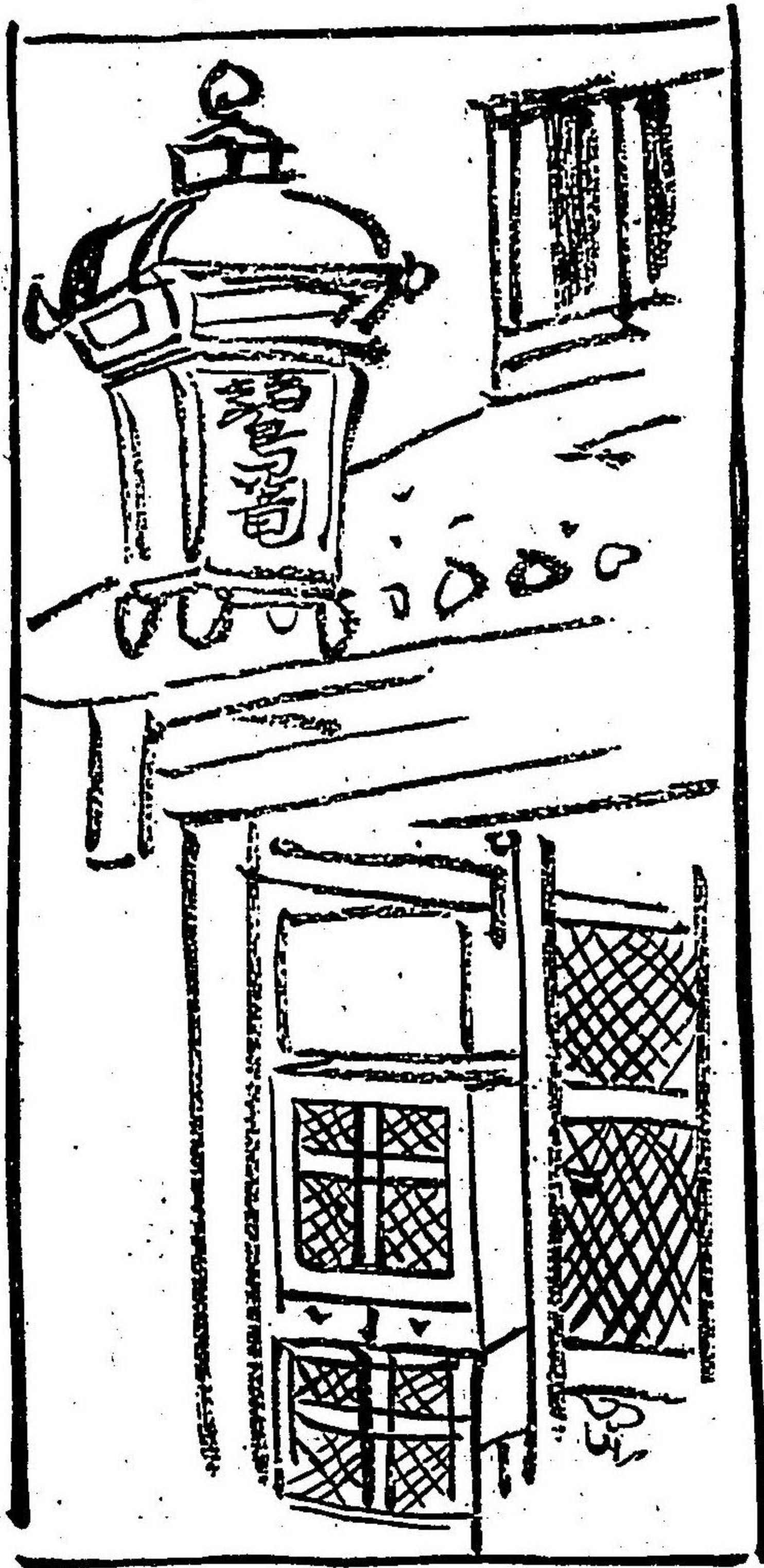


心齋橋筋

市街を都市の血管だといふが、何處の都へ往つたところで、大阪の市街はご血管らしい市街はまあ一寸見つかるまいと思はれる。大阪の町といふ町は何處から切り離してみても、そこには押へることの出来ない、血の出るやうな生命の踴躍があり、取り替へることの出来ない、地方的色彩がある。その町町がそれぞれ異つた職分の下に生きて働きたり、縋まつて一つの有機體的都市を形づくつてゐるところに、大阪の生命もあれば特色もあると思ふ。——晴れた日の午後、鋭く眼を道の兩側に配りながら、悠ういふ活きた町を徜徉するのは、私にとつては面白いといふよりも、眞面目な一つの事業だつた町は何處といふあてもなしに拾ひ歩いた。今も私の癖になつてゐるやうに、途の四辻に杖を立ててみて倒れた方へすたすた歩いて往いた事もあつたが、ごちらかといふ

と心齋橋筋に出る事が多かつた彼處は何といつても大阪の脊髄で唯活動があるといふばかりではなく、神経がある四季の移り變りについで、店飾りの色彩と調子とが種々と更つてゆくのは言ふに及ばず朝のひき明から夜の一時過になるまで、その時々々に絶えず異つた気分が動いてゐる。それを見つめるものには時々仲夫の棍棒に胸元をつつかれたり、自転車の前輪に夏羽織の襟を引つ掛けたり、雨側の家から掃き出す埃を買ひ立の麥稈帽に浴びる位の覺悟がなくて、叶はない何故といふに心齋橋筋の気分はさういふ混雜した間に陽炎のやうに動いてゐて、油断をするとつい知らぬ間に見ようとする一刹那の感じを取り逃してまふ事になるのだから、それを思ふと、那の路筋が那の通に身動も出来ない程狭苦しいのは何よりも嬉しかった私達を傍觀者の位置におかないで、どこまでも那の気分のなかに動き、那の零團氣のなかに吸呼せしめるには、那の路筋が現に有つてゐるだけに餘裕を縮める

必要があつたに相違ない。——とにかく私は心齋橋筋が好きだつた。そして今もまだ好きだ。道頓堀へ往くのに、あの路を真直に夷橋へ出ないと何となく大阪にゐるやうな気分になつて來ない。



焼栗賣

「ええ、丹波の栗ちやんで丹くり。ええ、びつくり、栗やええ、栗丹波あ栗やええ、栗……」

透き徹るやうないい聲が横町から聞え出したと思ふと、やがて焦げつくやうな蔭色の匂ひが、岩丈な門をならした入口の、大戸の透間から、ごことなく洩れて来る。私は建て詰つた船場の家の一室で、その匂ひを嗅ぐといつても極つたやうに、田舎の雑木林を思ひ出したものだ。大阪を去つて暫く、田舎に引籠つてゐた頃は、秋になつて栗を食べやうとするといつても、船場の夜の焼栗賣が思ひ出された。

しがらき

焼栗賣の聲を思ひ出すと、夫に織り込まれたやうに「しがらき」賣の聲を思ひ出さぬわけにゆかない寂しい鼻の詰つたやうな調子で、

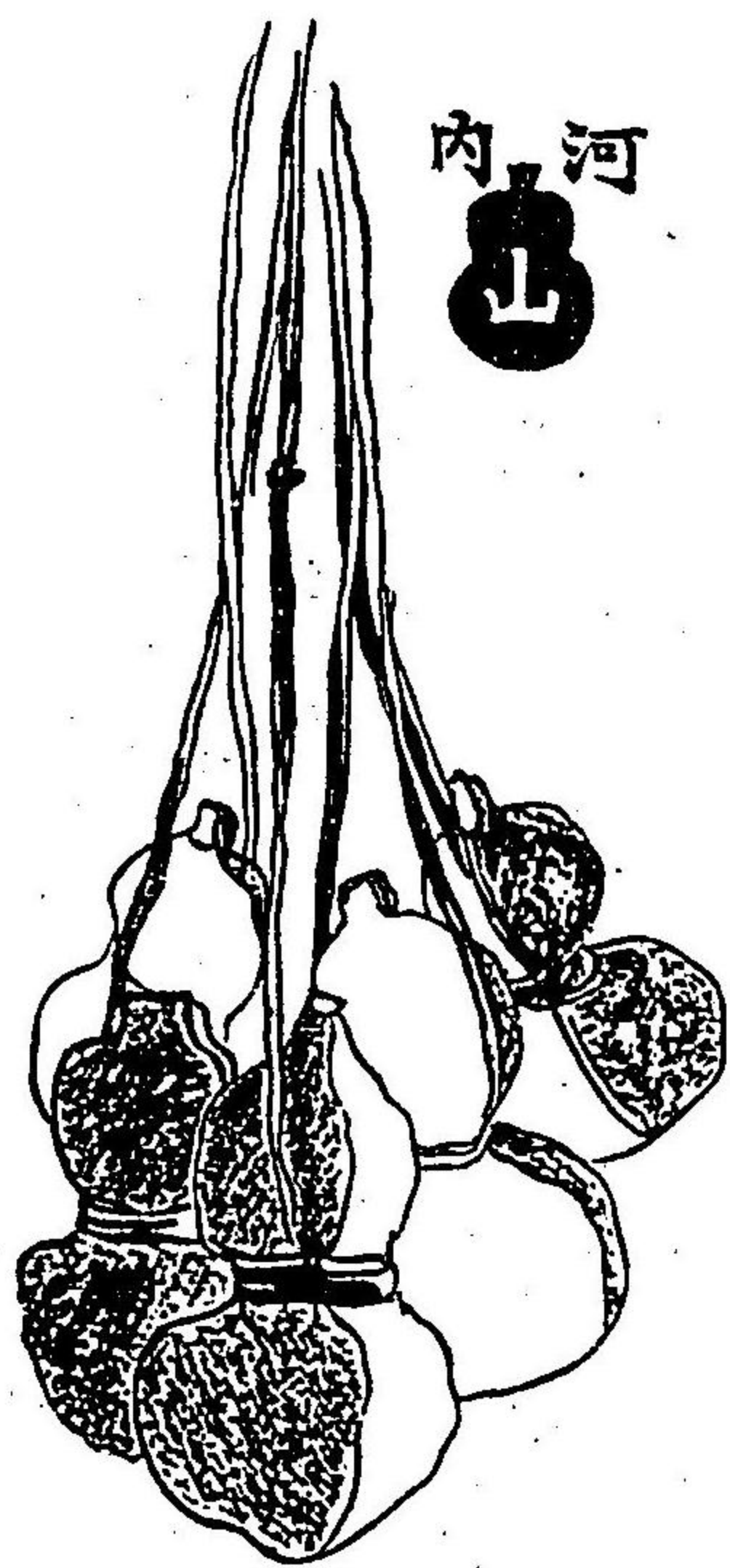
「しがらき……しがらき……」

と早口に呼び歩いてゐた私の友達に、これが大好物なのがあつて、毎夜それが表を通るのを待ちかねるやうにしてゐた。秋雨がしよぼしよぼ降る夜などは、一時が打つ頃までそれを待つてゐる事さへあつた。道明寺を煉り固めたやうなもので、見た目が私には一寸無氣味だつた。あの時、試しに一つ舌の上のせてみると、甘つ垂くて、蛸輪のやうに冷つこい氣持がしたので、そのまゝ吐き出してしまつた。

大融寺

北野の大融寺は弘法大師の開基といふので、大阪では名高い寺の一つになつてゐる。門の直ぐ左には藤棚があつた。藤棚の下に詫びた豆腐料理があつて、藤の花が咲く頃になると、主人の老爺が鉋くちやな臍を出して料理を運んでくれたものだ。私はそこで後藤宙外、平尾不孤、金尾春草の三君と一緒に午餐をしたためた事があつた。土地つ子といふのは春草君一人であとの三人は皆大阪は初めてのものばかりだつた。若葉の色が滴るやうな藤棚の蔭で、古毛氈の上に胡坐を組みながら、玩具のやうな小皿に盛られた田樂を見て、三人が三様の眼つきをして顔を見合せたのは可笑しかつた。もし誰かが一人笑ひ出さうものなら、跡の二人も聲を合せて溜らす笑ひ倒れたかも知れない。何故といつて夫には別に理由はなかつた。若葉の頃に旅をした事のあるものは、誰でもこ

んな記憶があるに相違ない。その後いつだつたか唯一人で遊びに往つたことがあつたが、その折には何を見ても詫しい氣持がした。老爺は間もなく死んださうだ。



河内山

本長寺

谷町八丁目にある本長寺は私が「小天地」を編輯してゐた頃に暫く間借をしてゐたお寺だ酒飲みに住職が高利貸と怒鳴り合つたり飯綱使をしたりする騒々しい間で私は行者のやうな寂しい生活をしたものだ私はここで詩も作れば書物も讀んだ泥棒に羽織を盗まれたり住職に頼まれて禁厭の家鶏の書を描いたりした。——家鶏の書といふのは住職が大事がつてゐた白毛の矮鶏がどうかすると狸に盗まれるので禁厭除けにそれを庫裡の水口に貼つておかうといふのだ狸といへばあの邊は一體に寺町なので樹は繁つてゐるし境内はただつ廣い上に晝も森閑としてゐるし住心地も悪くなかつたと見えて狸は多かつた。夜が更けて書物など讀んでゐると離室續きの廊下を小走りに小さな脚音がよく聞えた初めは何だらうかと一寸氣持が悪かつたが小僧に

聞くと思もない顔で従弟の噂でもするやうに狸だと教へてくれたのでそれから後は態と夜更しをして其の脚音を嫉むやうになつた小僧は恵得といふ名で齡は確か十一であつた窓の外で落葉の音がする頃私が焼栗を噛りながら狸の脚音を待つてゐると住職の居室で噓が三つ四つ續け様に聞えてやがて押し潰したやうな聲で「恵得恵得……」と呼ぶのが聞えるすると庫裡の方で欠伸でもするらしく「はあ——い」と氣が抜けたやうな返事をして小僧がちよくちよくと廊下傳ひに出て來るのをよく聞いたものだその後二三年経つて住職が急病でころりと死んでしまつたので寺の維持やら後住の詮議で檀徒の間に大分紛議があつたらしく聞いたが今はどうなつたか知らぬ。

梅屋敷の記憶 その一

三十四五年頃の春だつたと思ふ。上本町のお寺に間借をしてゐた下村爲山君と連れ立つて梅屋敷に梅を見に往つた事があつた。梅はまだ早かつたが掛茶屋の溢暖簾は新しく掛け替へられて樹蔭の道は箒目が見える程小綺麗に掃除が行き届いてゐた。爲山君が寫生帖を出して掛茶屋の小娘を寫生し出したので私は所在なさに其邊をぶらぶらしてゐると威勢のいい肴屋の小僧が目筈を抱へ込んで小走りにそこを通りかかつた。見るともなしに笊のなかを覗くと活のいい鮎子が白く光つてゐた。ああもう鮎子のあがる時節だと思ふと私は急に海邊の故郷が懐しくなつた事があつた。それからこのかた梅屋敷の名前を聞くといつても鮎子の事がすぐ想ひ出される。

梅屋敷の記憶 その二

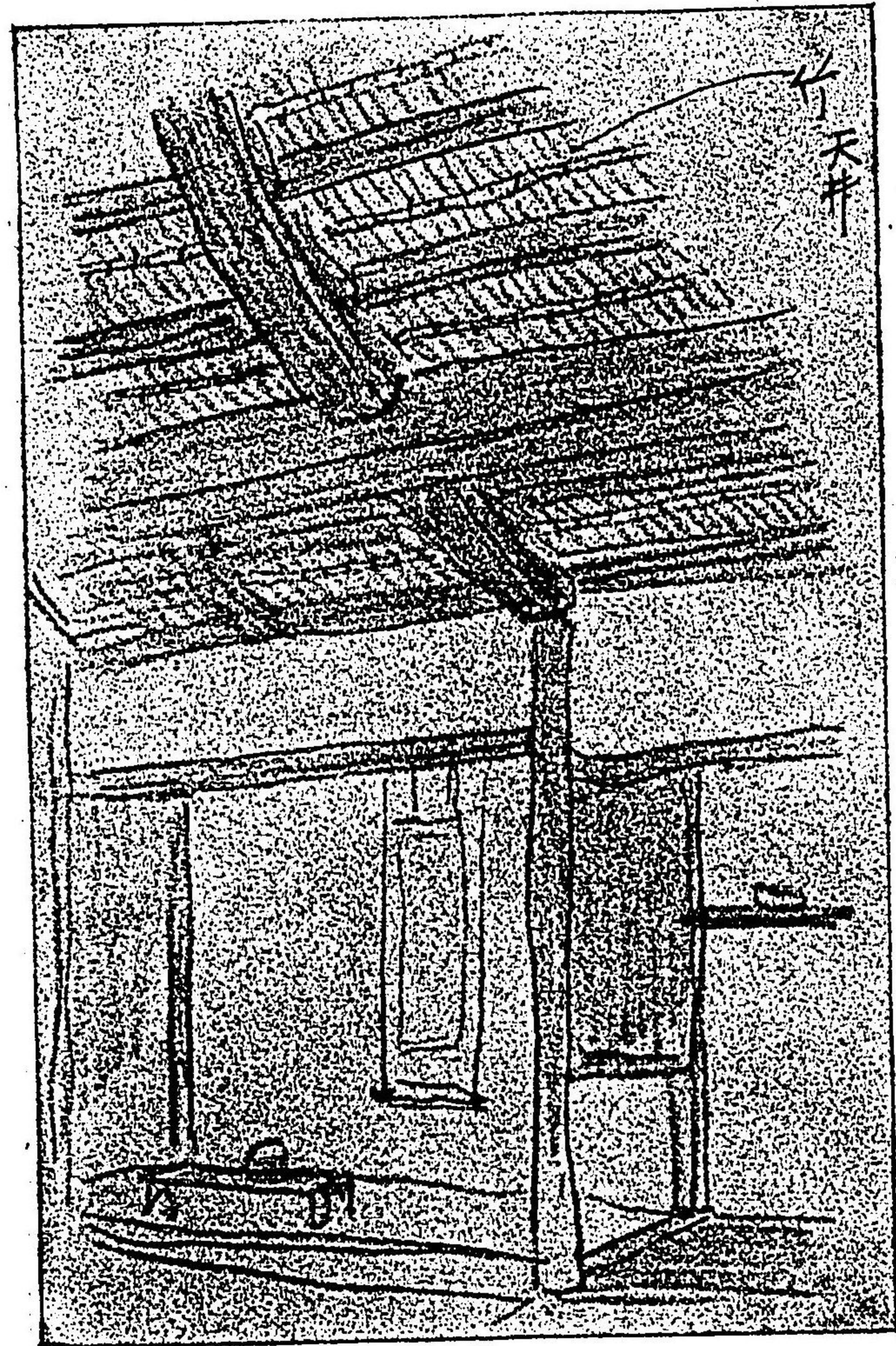
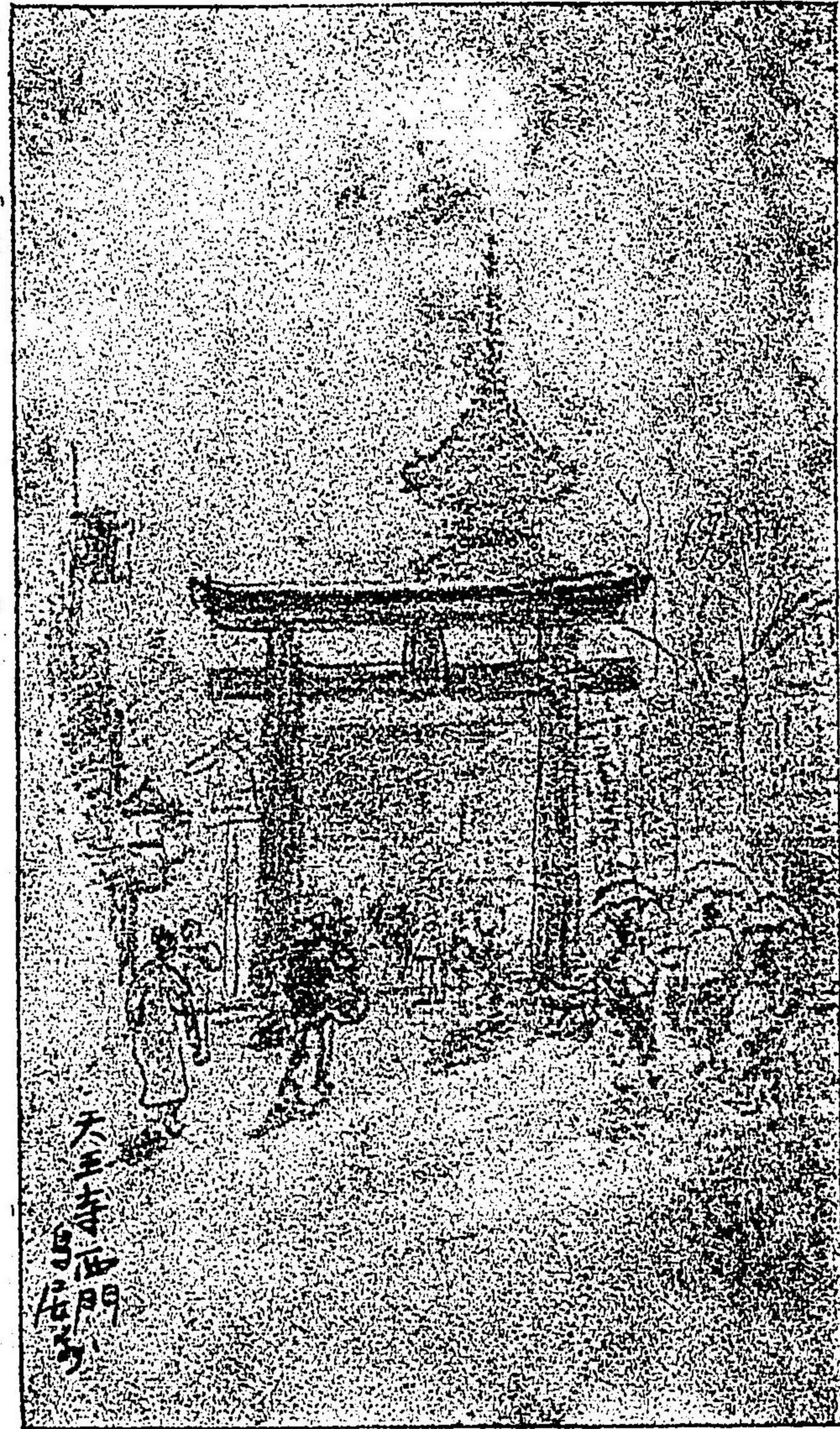
その頃梅屋敷に下宿住居をしてゐた若い畫家があつた。文淵堂の主人が東京から引張つて来て、ここで大阪名所か何かの繪を描かす筈になつてゐる色の白い髪を綺麗に分けた娘のやうに繊細な指をした男だつた。私もまんざら知らぬ顔でもないで、ここを通りがかりに一瞥寄つてみる事があつたが何時上つても畫家は極つたやうに其邊に取散かしたものを一纏めに机の下に藏ひ込むばかりで出来上つた繪といつては一枚も見せなかつた。私は草稿のまゝを他に見られるのが厭なのだらうと思つて別に見ようともしなかつた。その後何時だつたか突然に案内なしに上つてゆくと畫家は吃驚したやうな顔をして慌てて其邊に散かつたものを掻き集めて例のやうに机の下に投り込まうとしたが、どうした機みにかその中の一枚が落ちてころころ

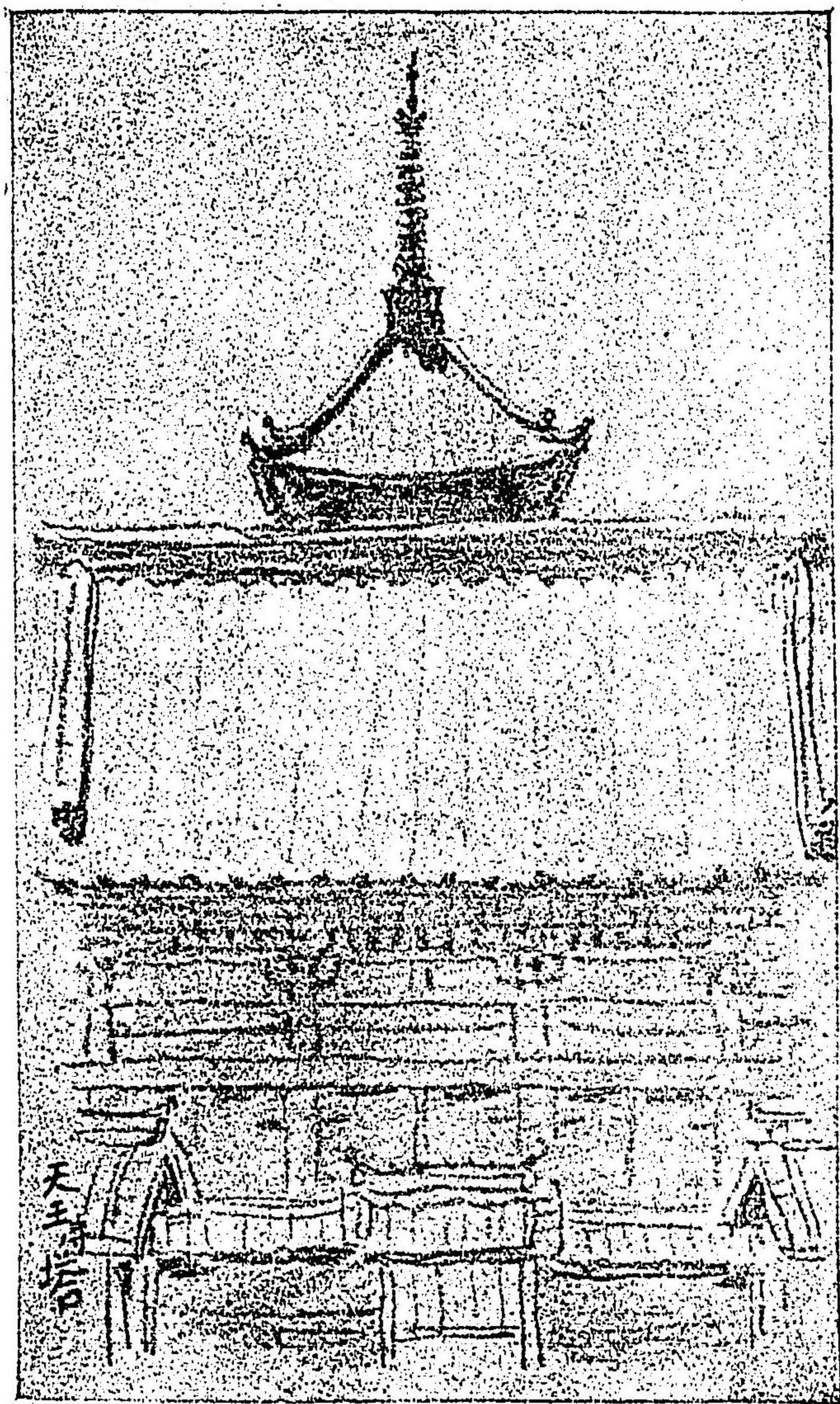
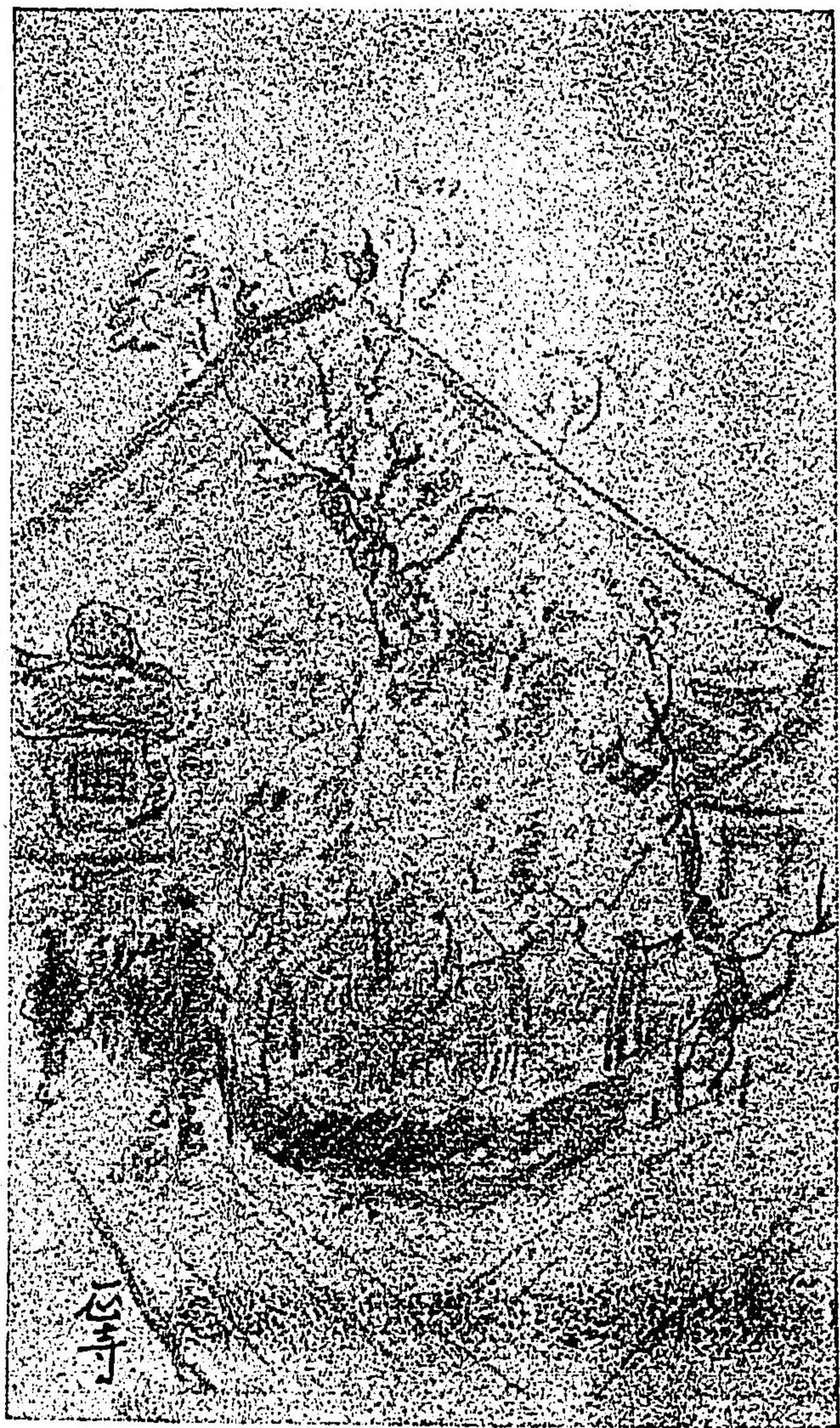
と私の手元に轉がつて来た何の氣もなく取りあげて見ると裸身の若い男と女とが描いてあつた畫家は汗ばんだ顔をして何だか苦しい言譯をしてゐた私は石器時代の人間が性慾の刺激として異性の像を彫つた事などを話しある人の説によると藝術の慾は性慾の變態に他ならないさうだと言ふと畫家は自分の隠した仕事は是認でもせられたやうに思つたものが机の下から色々な繪を取り出して見せてくれた。畫家はその後俳優になつた畫は拙かつたから俳優になるのも悪くはなかつた。——まかし舞臺は畫よりもつと拙かつた。——私に今も時々この男の事を思ひ出す。

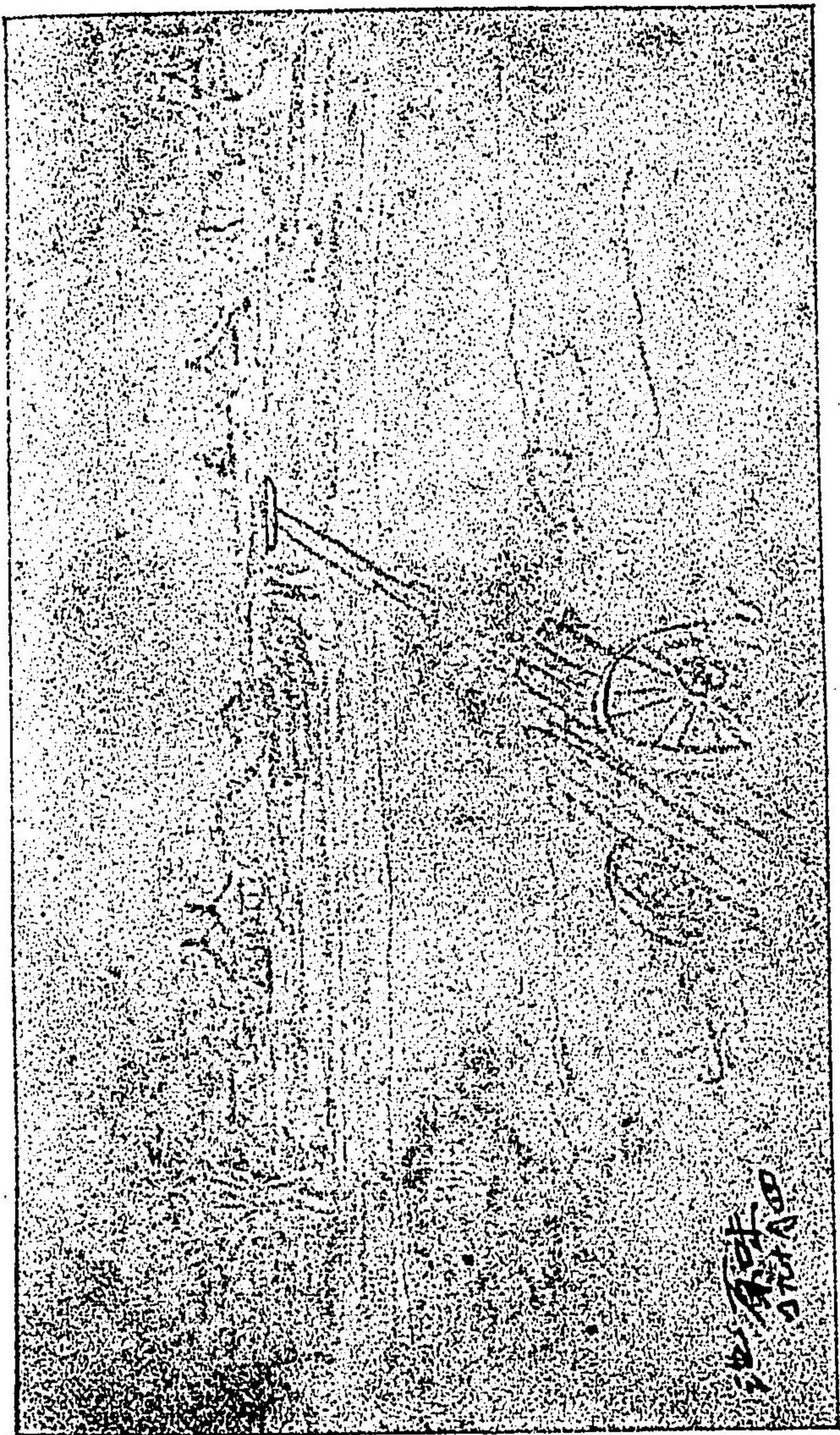
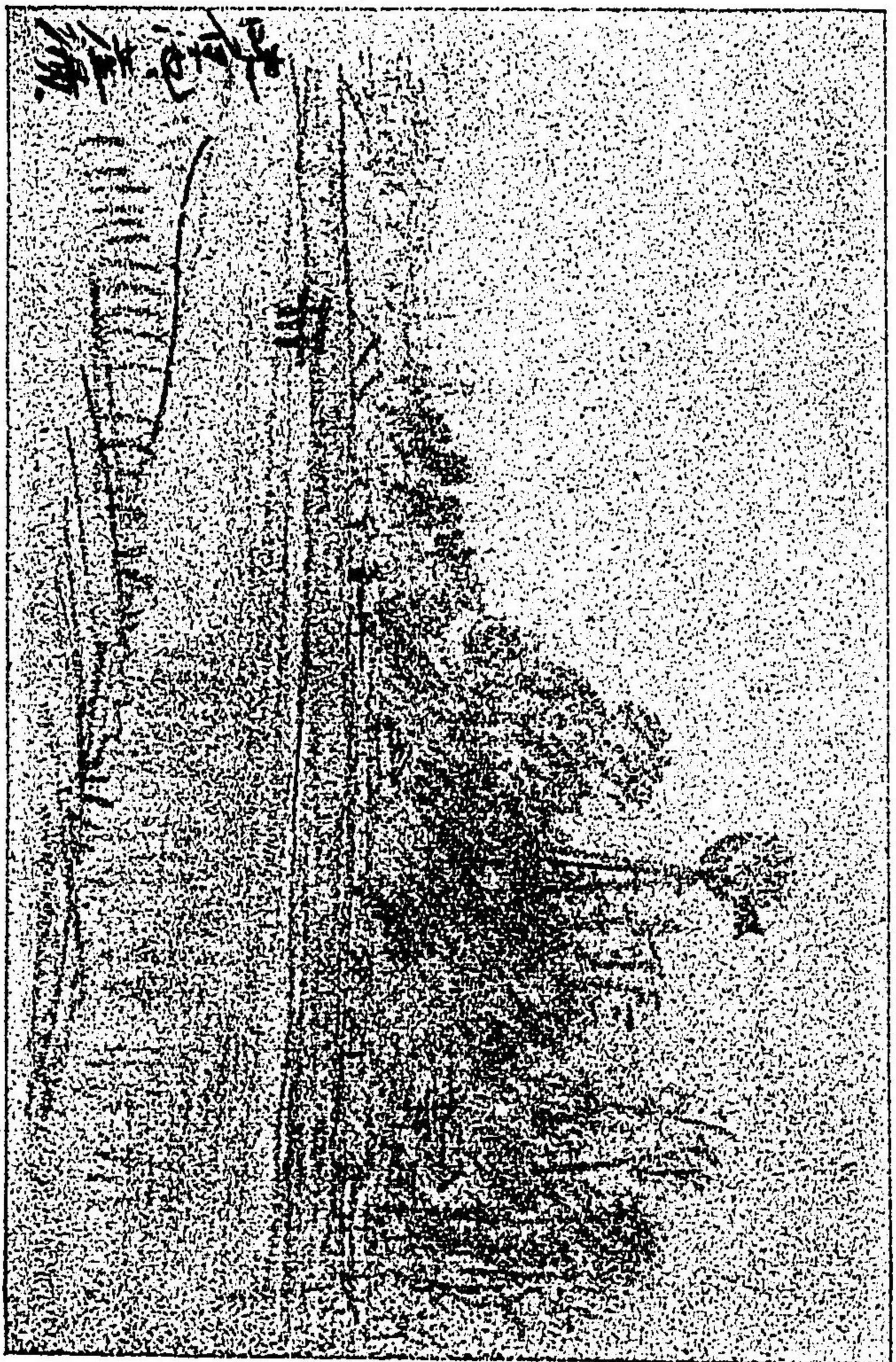
井原西鶴の墓

上本町の誓願寺に初めて西鶴の墓をたづねて往つたのは確か三十四年の秋だつたと思ふ。そこらに名も知らぬ蔓草が這ひ繁つて墓の上には鴉の食べ残した澁柿の熟えたのが一つへばりついてゐた私は草をぬきながら「五人女」に描かれた火のやうな五人の女を思ひ出してみたりした。今年また久しぶりに訪ねて往つてみると寺の門には「文學士井原西鶴の墓」といふ新しい碑が立つてゐた墓は小綺麗に掃除が行き届いて血のやうに紅い天竺牡丹の花がさしてあつた。









大阪見物

浩々歌客

(一) 第一印象

予が始めて大阪を経たるは、明治三十一年九月十五日なり、始めて大阪の地を踏みたるは同年十二月二十七日なり、當時東京を發するに臨み、予が先輩は注意して曰く、「大阪に往かば大阪を善く觀るべし」。殆ど大阪に何等の知識を有せざりし予は、先輩の言の當然なるを領じて大阪に着し、郷里の代議士たりし先輩が大阪の宿屋は花屋がよろしといへるを記憶のまゝ、梅田驛の車夫に花屋に行かんことを命じたり、車夫疾驅して十町許と思ふ頃、一旅館に轡を下す、予は問ふ、花屋か、車夫「さうだッ」。

して六疊の一室に入る、東面に腰高の窓あり、街を眺むべし、南面襖あり、之を開かば隣室の客と對面するに足る、北面は壁なり、之に面すれば達磨を模し得ざるに非ず、西面は即ち椽側にして障子なり、障子を開き宿帳を出したる若者に、予は再び「此家は花屋ですか、若者、花屋は隣でございますか、手前方は親族同様にございまして」。

予は花屋に宿らんとして、花屋の隣に案内されたり、車夫は花屋を花屋の隣と解したりしか、難波の蘆は伊勢の濱、萩なり、漢書に所謂「百里にして風を同うせず、千里にして俗を同うせず、故に四方の民言語衣服一ならざるものか、さるにても、花屋を解して直に花屋の隣となせる車夫の穎悟は感すべきかな。

翌朝宿を出で、隣の花屋を見る、花屋の門燈あり、わが宿の軒燈は「小塚旅館なり、花屋」と、小塚旅館「成程同じく旅館なるに相違なければ、此共通の意味に於て、之を親族同様なりといふべき理由あり、小塚旅館の若

者また伶俐といふべし。

予は大阪に着したる第一日に於て、大阪人の自利に伶俐穎悟なるを感服したり。

(三) 車夫

予は大阪にて初めて車に乗りたる時、車夫は仔細に予の行先を問ふに及ばずして走りたり。予は端なく前年上海に遊びし時、支那車夫の語相通するに及ばず直に先づ前路に向て疾走せる態度を憶出したり。大阪車夫は支那車夫と相似たりとの感想と共に、予が第一印象の大阪人の自利氣風の支那人と相似たるに想ひ及びたり。

車上にして予は車夫に右に折れ左に曲れの命を與へし時、車夫は右を左に左を右にするの支吾を免れざりし事、屢次ありたり。予は大阪車夫の自身に着ける左右方位を會せざるを訝しと思ひたり。街の角に貼

られたる町名及び住所の番號に某の橋詰西入る東入る等の東西南北を記したるを見て、成程大阪人は地に依りたる方位を見るに慣れて自身に附きたる方位を知るに習はざるを知りたり。

予は車上より此觀を演繹して、大阪人は客觀に長じて主觀に短なる氣風なりと思ひたり。

車夫疾走車の四方に往來絡繹して、彼此車輪相觸るゝことある時、車夫の相闘ふが如きは概して少し、車夫の車輪互に相觸るゝは昔に在りて武士の兩刀が鞘當若しくは鞘端當なり、雲介の駕籠の衝突なり、相闘はざれば止まざるが例たりしなり。大阪車夫は斯かる事に相闘ふの結果如何をよく合點し居るが如し、空しく相闘争せんよりは、疾走するの職分を成して其賃錢を得るを自利なりとするが如し、一時の激昂されたる感情に依りて事を處置せざるの思慮は、車夫の心作用にも現はるる大阪人の氣風ならずや。予はしか感じたるの空しからざるを其他の

事象に實驗したり。

(三) 小賣商店

予が初めて大阪の小賣店に物を買ひたるは、堂島邊の紙屋なりき。江戸川なる巻紙一本を買はんとして、其紙質如何を検すべく巻き封せられたる筒の内部を少しばかり引き抜き見紙質の良好なるに満足して價を拂ひ之と同様なる他の一本を取らんとせんに店員は之を止め予が檢したるためや、形容を損じたる前の品を手に渡したり予は大阪人が汝に出づるものは汝に返る、薄きたる種は自から收めざるべからずの眞理を奉ずるに忠實なる氣風の「小賣商店」にもなほよく現はれたるを感服したり。

顧客の機嫌如何を見るよりは商品の幾分にも損せざるを利とするなり、まかし予若し檢したる品のや、形容を損せられたるを受取る

に満足せずして、然らば予は買はずと言ひて去りたらんも、恐らく商店員は不平を口にいふのみにして止みしならん予は不幸にして予が爲したる種を予が收めざるの勇無きが故に斯かる事を試みざりしのみ。

(四) 塔と鐘の天王寺

大阪に見物すべき處は何かと問はるゝもの必ず先づ天王寺、大阪城、築港、毛馬、開門、東西本願寺、別院、道頓堀、文樂座等を以て答ふるなるべし。天王寺は大阪に唯一の五重塔を有するを特色となし、更に世界に有數なる巨鐘を有せるを誇となすべし、少くとも奈良が大佛を以て誇り、埃及が金字塔とスフィンクスを以て誇り、倫敦がウエストミンスター寺院を以て光彩とし、巴里がノートルダム塔を以て特色の一とする意味に於て天王寺の巨鐘に大阪の光彩のみならず、或は日本の光彩ならずといふべからず。

此日本の光彩として差支無き大阪名物の巨鐘は見るべくして撞くべきものならざるなり撞きて可ならんも撞くも鳴らざるが故に撞くを要せざるなり鳴るも響かざればなり凡そ何くに行きてか響かざる鐘あるべき或は曾て響きたるも變故に遭遇して響かすなれる鐘は之あらん大阪市外長柄なる鶴満寺の古鐘太平十年二月鑄造の銘ありが黄鐘調の音ありとて名高かりしも盜難に遭ひて損じたる爲今は響かざるが如き其例にして鐘が響くを生命とする限りこは廢鐘なり天王寺の巨鐘は始めより廢鐘を鑄造したるなり何人の耳も其隠々の聲を聞きたるなきなり。

天王寺の僧侶は響かざる鐘に依て聖徳太子の威徳を渴仰し歸依する人々の心絃を鳴らすの勇氣あるなり譬へば人と人と互に相信すること無くして能く相信する如く装ひ得る心を有するなり響かざる鐘は信無き僧に同じ信無きの僧が天王寺に幾多の佛教信者を集むるの

勇氣は大阪に於て認むべからずや或はこは大阪人の特色ならず一般俗社會の習慣なりといふべからんも予は特に天王寺の巨鐘に於て此感を切にせるのみ。

若し夫れ天王寺の塔の彼の鐘が囚はれたる僧侶の勸進に依りて成れるに比し此は淡路屋太郎左といへる一個人の勸進に成りたり(文化九年太郎左は大阪白銀町の紙屑屋なり信仰は紙屑屋をして寺院の莊嚴大阪の形勝に權威を添ゆる高塔を造らしめたるなり。

此紙屑屋は紙屑屋といふ商人たるに満足するの勇氣無くして宗教上に信仰を有し信仰に隨喜して斯かる高塔勸進をなせる彼の爲に幸なりし或は不幸なりしか予は此紙屑屋の家門子孫が如何になりしかを知らざるも天王寺の高塔を仰ぎ若しくは之に昇りて大阪の大觀を瞰むるものは淡路屋太郎左の名を喚起さるゝなるべし。
「蛆もまた向上の心あり」これは予が雪隠にして得たる少年頃の觀な

りき、バビロンの古傳説にあるバベル塔は天に達すべく志されたる建築なりといふ、人間は天を仰いで之に至らんとするの心あるを證すべき一例ならずや、蛆も人間も向上の心あるは同じと見ゆ、天王寺の五重塔は偶々大阪人に向上心あるを表するものか、非か。

近代の思潮は人間たるに満足せずして超人を主義とする獨逸の哲學者ニーチエの指導に従ひて流る、また地上を歩し、船車に乗るに満足せずして鳥の如く飛ばんと欲するの心旺に飛行機を作り、頻に天空を翔るの人多し、天王寺の塔は超人主義の默示か、人間の飛行機心の默標か。

大阪は此塔一個にても時代の思潮に立てるを表せずや。

(五) 文樂座と道頓堀

人形淨瑠璃は大阪名物の一なり、之を演ずるの場は歴史古き文樂座

と近松座とあり、道頓堀は劇場と遊廓と見世物興行とを集注したる大阪繁昌の中心なり。

淨瑠璃座には大阪の出せる日本の文豪近松門左衛門を懐び道頓堀の男女風俗には近松と併稱されたる井原西鶴の述作を聯想せらる。

近松を英國の沙翁に比するものある時沙翁を更に偉なりとの見よ、之を不倫といふ文人多かるべし、西鶴を文豪なりと稱揚する時外國の文豪に比してさほどに偉大ならずと謂ふもの少からざるべし、今の日本文藝家の多數は事外黨なるが故に實際近松をも西鶴をも能く知らずして評價するなり。

近頃は江戸文藝趣味の復活といふ聲聞ゆ、一九三馬、春水種彦京傳等の作に現れたる趣味を新に現代に調攝するの事象とすれば、大阪にも近松西鶴の作に見ゆる趣味の復活するなるべし、現に或ものは近松西鶴の糟粕なるを意識せずして新しき文藝なりとして脚本小説を迎へ

らるゝもあり。

大阪に文藝無しと謂ふ莫れ、近松西鶴は大阪文藝の権化なり。人は時代新古の差別をいふ、予は真理真趣味の同じきを見る。時代の文藝は大阪文藝に近づきつゝあり。

(六) 文明の大阪

世界の新思潮は日本に浸漸せりといふが常套語なれど、予は特に大阪を除外例とし却て世界の文明思潮は大阪に近づけりと言はんはんと欲す。

世界現代思潮は「自利」を主とせり、大阪は三世紀以前よりして恰好に堅實に自利思想を世間人生に調攝して殆ど凝滞すること稀なる發達を爲したり、敢て今更に世界思潮に學ぶ所無きなり、實驗が真理なりと様に捉へられたるプラグマチズム哲學が世界文

明人の思想に影響を加へし如くなれど、大阪の氣風は左様の哲學理窟を唱道せざるまでにて古より實驗實行を以て人生の金科玉條となし居たれば、プラグマチズム等の近代哲學に益せらるゝ所無く、さる哲學の方が大阪思想に近くなりたるなり。

世界の思潮は、主義主張理窟を必要とせざるが、大阪人は昔より主義主張理窟を殆ど人生の禁物無用なりとしたり、封建時代に於て主義主張などいひしならんには、忽ち首斬られて、大切の生命を失はれたる恐怖の習慣第二の天性となり、市民に自立自存の要慎性を賦與したればなるべし、これは世界思潮に先んじてまか行ひ來れり、何の外に學ぶ所あるべき。

偶々自己の主義主張理窟の通らぬを立腹して、槍刀鐵砲彈藥を振舞し、市街を焼き富家に侵入して騒動を起し、終に自殺の未謀叛人の刑罰に處せられたる大鹽平八郎の如き人物の出でたるは、大阪人の遺憾と

する處なり現に大阪人は米相場を創めたる淀屋橋を架けたる淀屋辰五郎の如き人には同情を有すれど洗心洞後素大鹽平八郎には同情なきのみか大鹽焼といふ市民に難澁かけたる代表者として理窟の失敗者として取扱ひ凡そ大鹽を演せる劇小説の歡迎されたる事無きなり。現代文明の最新思潮を得たりといふ青年が頻に生を主張するは即ち文明人の代表思想なるべけんも大阪人は所謂新しき青年に先だつて昔より生を重じたり造次顛沛に生の爲には如何なる犠牲をも拂ふを辭せざるの勇あり青年の多數には口に生を重んじて行爲は半死半生の輩もあれど大阪人は常住坐臥に生の大切を忘るゝこと無し是今の新しきを倡へて誇とする青年よりは疾の昔に新しき思潮を得たるものならずや所謂新しき青年は大阪人に對して靴の紐を結ぶの要あり大阪人は新思潮に得る所殆どこれ無し。東京人は法被を典しても初松魚を買食するの市民ありたるを誇り

としたれど近頃は左様の氣質が文明の風の爲に吹消されたりと嘆くもあり大阪にては新しき魚を食はんが爲に生に必要な衣を脱ぎたり生に損なる借金するが如き無分別者は昔よりあらず昆布を咬み粥を啜りはもを食ひ米利堅粉の饅頭を好むに満足を生を得ることを知り東京の初松魚に比すべき鯛を食はざるも生に差支無きを知るが故にその習俗が所謂文明の風に吹消さるるの心配無きなりこれは東京に比したる場合の僅に一例のみ一例なるも大阪人が生に忠實堅固の氣風を察すべし随つて文明に負ふべき必要無きなり文明に先じて既に文明を得ればなり。

別世界の風潮は都市を勞働の巷となし田園を慰樂の家となすの傾向あり大阪人は昔より家は働く處にて慰樂は郊外なるを常となしたりされば市中に公園を必要とせず樹木を必要とせず中の島公園は鼠色の樹木を植ゑ置かんよりは家屋を建て列ぬるを可として遠からず

廢せらるゝ時運にあり天王寺公園は新設されたるものなれども隣地に興行場の繁華を作りて樹林の清趣を要せざるごとくなるべく慰樂を欲するものは濱寺眞面奈良京都に往くに非れば遠からざる電車沿道の田園に行樂するの自由あるなり東京が上野公園の保勝を考へ日比谷公園芝公園の別荘區を存するが如き氣風とは異なるなりこれもまた大阪が世界の文明に負ふの結果にあらず大阪人が疾よりの氣風なるなり。

(七) 今後の大阪

予は十三年前より大阪居住に得たる大阪見物記録は元より多し如上の斷片語は砂漠中の一細沙のみ滄海の一滴のみ但だ一沙一滴の必ずしも沙漠滄海を説得ざるに非るを信す予は謂へり文明は大阪に近づけり文明が大阪に追つきたる時大阪は如何にすべき文明と行進を

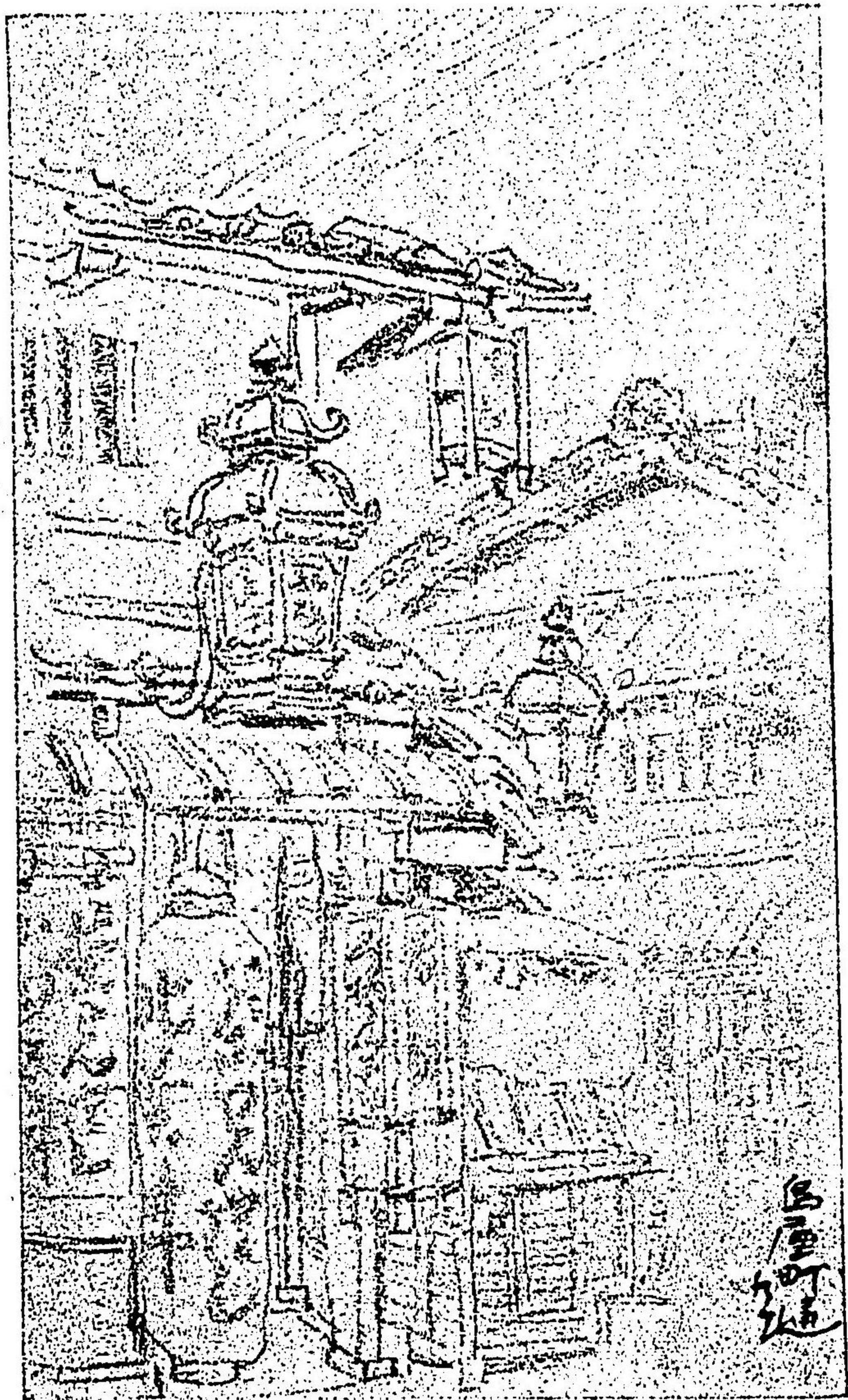
共にせんか大阪に何の誇る所なからん文明の追つきたるに委せて依然たらんか三百年前より先せられたるに拘らず追つきたる程の文明は或は大阪を背後にして行進せば大阪の大阪たるを失ふならん然らば大阪の重なる大阪の生と自利を損するならん是に於て今後の大阪の生るゝ機會無かるべからず。

大阪に追つくまでの文明は大阪の味方なりき今後の文明は果して依然たる味方なるべきや否や。

予はなほ之を見物するの愉快を欲せざるにあらず。

(八) 予と大阪

予は幸に大阪の知己にして不幸に大阪の異教徒なりその善く大阪を見て感服したるに於て大阪の知己たるなりその毎に大阪の見物人にして被見物人たらざるに於て異教徒たるなり。

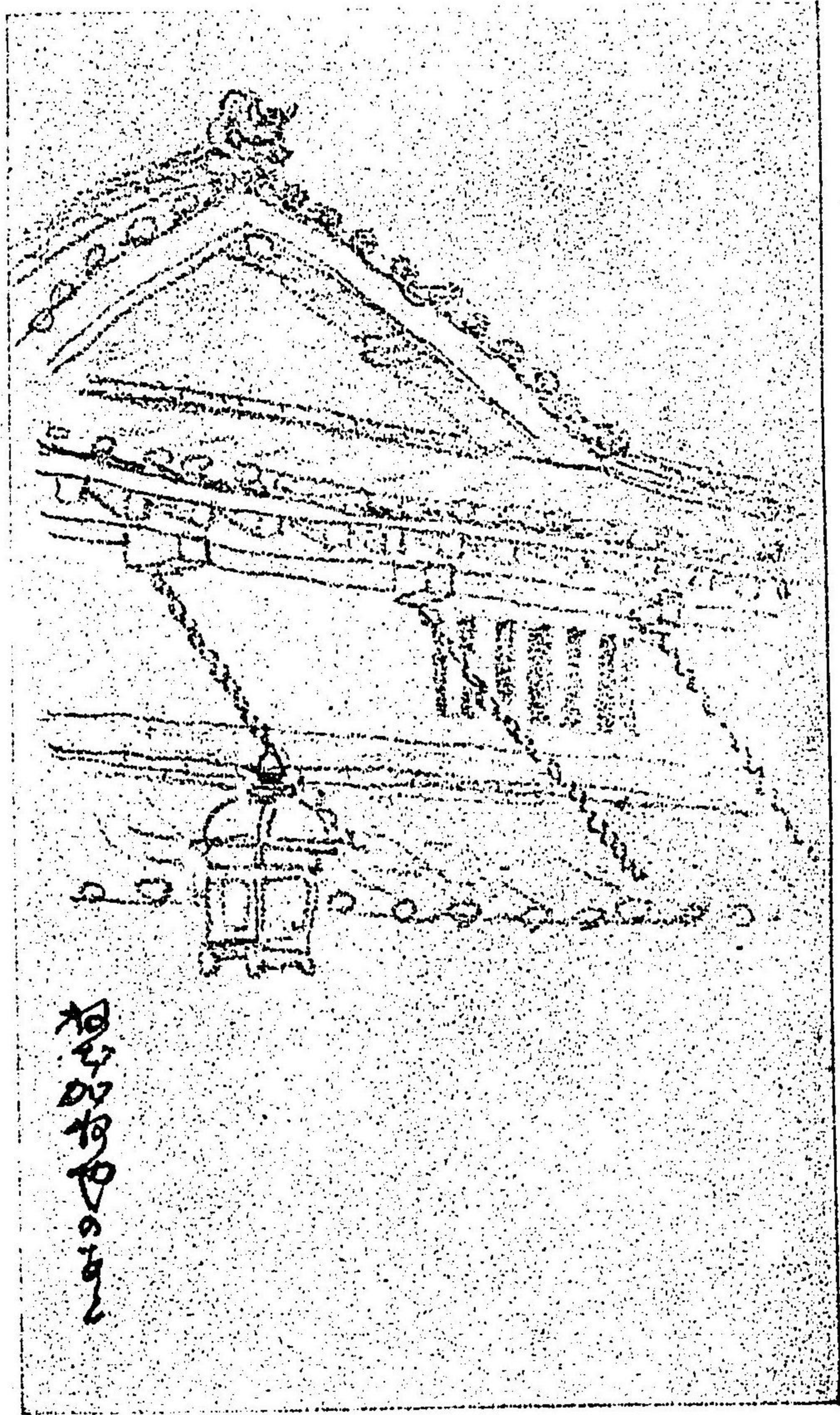


或はいふ大阪は人を殺す處なりと云かし大阪は異教徒を殺さざる寛容力ある處なりその殺さるゝは同教徒に多きが如し予は殺されざるを以て大阪に感謝すべき理由多しと信すまかも見物の際に於ける予の見聞の利益は多大なるをや。

予は大阪に依りて生を教へられたり但だ異教徒なるが故に之を得るの信念方法の同じからざるのみ自利また然り。

予が愛する知己の大阪予が信する胸廣き大阪汝の異教徒なる予は満腔の同情を以て汝を見物し汝に握手す汝と予とが汝と予との別あるを遺憾とするのみ。

予は大阪見物を記する此機会を以て汝に敬意を表するの光榮を有す。(完)



相
同
的
建
築



浪速の夢



須藤南翠

初めの家

私が花屋の座敷から引き移った家は内淡路町の高倉筋の東角であつた。

一切半牧さんに願つて置いたので家の勝手も知らず近所の様子も更に心得ないで鐵道から引き取った荷を送りつけた後から家内残らず車を揃へて乗り込んだのであつたが格子戸を入つて玄關の六帖へ上つた細君は離座敷まで十間といふものぶつ通しにした奥深な家を見て呆氣に取られて突立つたまゝ「宛で箆箱ですわね」といつた切り荷物に手を着けやうともしなかつた。

一體花屋といふ宿が東京向に出来てゐて、少しも氣が變らなかつた處へ、突然間口三間半奥行十間といふ三つ間造の離れ附き、而も通り庭といつたやうな純大阪式の古風な町家へ投り込まれたのだから、細君の喫驚したのも無理はない私もむら／＼と好奇心が發つて、槍持の何とかといふ家の勝手を檢べて見たが、何處にも大阪の臭ひが充滿してゐて、自分達の言語が甚く調和を破るやうな感じがした。

玄關——私達は斯ういふが、此處では格子の間とか店の間とかいふのださうだ。——は往來に接した南が九尺の格子で、四分六の處へ中閤を通し、上下とも四枚づゝの明障子になつてゐるから、採光は十分である。東側は二間通の壁で、こゝに二階へ通ふ階段が取り着けてあるが、是が手丈夫な箱段で、四尺ばかりの觀音扉の外は、一段毎に抽匣があつて、夫がてか／＼と眞黒に光つてゐる。是からして東京ではざらに見られないのに、中仕切の中障子の襖を入ると、こゝも同じく六帖で、東側は二

間四枚のまいら戸の戸棚で見切り西側の障子を披けると、巾三尺長さ二間の總揚板の板間があつて、其外は直と土間になつてゐる。土間の向ふには、一間通りの淺い戸棚がある。この前にも一尺ばかりの揚板があつて、夫が戸棚の横へも三尺ばかり食出してゐる。こゝに巾二尺程の袖が立てゐて、これに續いて、竈が並んでゐる。私の家には並三升の釜と、十人前の鍋とがあるばかりだが、こゝの竈は大小七つまで、黄大津の腐つやゝかに、づらりと口を揃へてゐるから、其の五つは全く無用の長物である。こゝから華崗の板石を敷込んだ三和土になつて、走水盤がある。水瓶がある。直そこに井戸がある。湯室がある。中庭へ出入の切戸がある。そのまた奥には、物置と下園とがあつて、この瀬戸を乗切ると、奥の上園に通する三尺の開戸があるのだ。斯やうに玄關の土間から一直線に裏の裏まで通するのを通り庭といつて、便利なる事は遙か後に解つたのであつた。

座敷は、中の間の奥にあつて、東に床違棚を設け、北に二間四枚の中硝子の障子を嵌めた劉とした八帖だ。床の横手が直と書院窓になつてゐたり、小壁に採光の窓があつたり、中の間境の鴨柄の上には、遠州透彫の欄間があつたり、床が高麗縁の敷込になつてゐたり、袋棚には金砂子の小襖が嵌つてゐたり、こゝだけは總ての裝飾が整つてゐて、東京の借家には、迎もこんなものはないと思つた。障子の外には三尺の縁側がある。華崗石の巖形の手水鉢がある。鉢前に棕櫚竹がある。庭には小さい池がある。東の池境には一丈餘りの高い土塀がある。其見隠しに植樹が並んでゐる。西側にやつと歩ける丈の溜縁があつて、離座敷に通するのだが、大概の人は、疋傳ひに真直に渉るやうであつた。離座敷は南が縁で、北が庇掛窓で、床違棚が東にあつて、西側は一間の押入と三尺の開戸になつてゐる。此の開戸を出るとそこは板の間で、不浄場や手洗水は、こゝに装置してある。窓の外は、もう隣町の境界で、一條の

下水が東から西へ流れてゐるが、窓際には小さな植樹棚などがあつて、隠居所には恰當の四帖半であつた。私もこゝを書齋にした。七八年の後、内藤湖南も一時此の家に住んだ事があるが、やはりこゝを書齋として、床から違棚から押入から座上まで、十重二十重に擁書城を築いて、やつと二三人の膝を容るゝだけの空座を存してゐたのであつた。二階はお話しになつたものではない。階段を上つた處が七帖で、表の窓は例の塗格子になつてゐるから、陰鬱な事此の上なく、奥に一段上つて六帖があるが、是も眞黒な簾筵が敷いてあつて、室といふよりは物干へ通ふ敷込み廊下といふ方が至當である。併し七つの竈は何うにも方が着かなかつたが、此の二階は當坐不用の荷物を残らず投り上げて置いたので、思ひの外取片手さが速く濟んだのを多とする。初めての経験ほど、奇怪で、可笑いものはあるまい。一順濟んだ處で、皆なで湯に行つた。湯屋は儘か葵湯といつて、一軒隔た東隣にあつ

た番臺(ばんたい)取場(とけ)が入口(いりぐち)の方(かた)を睨(にら)んでるのからして勝手(かちて)が違(ちが)つたが石榴(ざくろ)口の存(ぞん)つてゐたのは何(なに)となく嬉(うれ)しかつた石(いし)の流(なが)しもながしのないのも其(その)んな事は先刻(せんこく)承知(しょうち)の上(うへ)だが桶(か)の小さいの上(うへ)り湯(ゆ)の不自由(ふじゆう)なのは閉口(へいこう)した夫(おとこ)よりも閉口(へいこう)したのは風呂(ふうよ)の一隅(いちこく)で何(なに)だかあツツと言(い)つてゐる人(ひと)があるので朦朧(もうろう)とした燈光(とうか)に透(とお)して見(み)ると千人(せんにん)の垢(あせ)を湛(た)えた穢(きた)い湯(ゆ)で切々(きりぎり)と嗽(く)をしてゐるのであつた孰(あ)れ迷(ま)信(しん)より來(き)た呪(まじ)禁(げん)であらうが此方(こちら)の身(み)體(たい)を穢(きた)されるやうな氣(き)がしたので早速(さつそく)上(あ)り湯(ゆ)で消(け)めて歸(かへ)つた間(ま)もなく女(おんな)どもが歸(かへ)つて來(き)て頻(しばしば)りに可(か)笑(わ)がつてゐるのを聞(き)くと熱(あつ)い温(ぬ)い番(ばん)頭(あたま)に通(とお)じるのに板(いた)壁(かべ)を敲(たた)かすに手(て)を鳴(な)らすのが間(ま)が抜(ぬ)けてるといふのであつた湯屋(ゆや)は水道(すいどう)開通(かいつう)以來(いらい)悉(ことごと)く温(ぬ)泉(せん)風(かぜ)になつたが槽(さう)中(ちゆう)の含嗽(くわく)と柏手(かしで)をうつことは尙(な)ほ存(ぞん)してゐたやうに思(おも)ふ閉口(へいこう)したのは湯(ゆ)ばかりではない忽(たち)ち兩便所(りょうべんじよ)に閉口(へいこう)した何(なに)をいふにも離座敷(はなれざしき)の其(その)また奥(おく)にあるので夜(よ)に入(い)つては女小供(おんなこども)には一(ひと)人で行(い)かれ

ない雪洞(ゆきどう)か提灯(ていとう)を持つてお供(お供)が入(い)る騒(さわ)ぎだ下(した)から行(い)けば下駄(くだ)を穿(は)て長い道中(みちぢゆう)をしなくてはならぬ上(うへ)から廻(まわ)れば一(いっ)遍庭(べんてい)を通(とお)らねばならぬ小用(こよう)を達(た)すといつても中々(ちゅうぢゅう)ちよつくらと出(で)來(き)ないそれにまたいざ寢(ね)るといふ段(だん)になつて戸締(とじ)をするに忽(たち)ち此(こ)の座敷(ざしき)にも離(はなれ)にも雨戸(あまど)といふものゝ設(た)備(び)のない事(こと)を發見(はつけん)した表(おもて)の格子(かぢ)と裏(うら)の窓(まど)とだけは戸締(とじ)があつても兩方(りやうほう)の縁側(えんがは)には戸袋(とぶくろ)もなければ一(いっ)筋(すぢ)も通(とお)してない箆箱式(へらばこしき)に開(ひら)いた口(くち)が塞(ふ)がらなかつた細君(こほくん)はもうヒステリックな神經過敏(しんけいこうびん)を發(は)して勞(らう)れ切(き)つた身(み)體(たい)を横(よこ)へながら中硝子(ちゆうせうし)に薄(うす)い曙光(あけぼの)の映(うつ)する頃(ころ)までまじりとも爲(な)得(え)なかつたさうである。もう一つ閉口(へいこう)したのは客(きやく)を座敷(ざしき)に通(とお)すには厭(いと)でも取散(とけ)らした勝手(かちて)を通(とお)さねばならぬ事(こと)であつた東京(とうきやう)の住宅(たくわ)では何(なに)んな狹(せま)い家(いえ)でも座敷(ざしき)へは勝手(かちて)を通(とお)らずに行(い)かれるやうになつてゐるので勝手(かちて)を通(とお)すといふ事(こと)が客(きやく)に對(たい)して無禮(むれい)であると同時に見(み)ず知(し)ずの勝手(かちて)を覗(のぞ)かれ

るといふ事が主婦としては堪ふべからざる屈辱であることやうに、解釋してゐる者には、是が如何ばかりの痛苦であつたらう。大概の客なら玄關で應接つて還し、通す客なら仔細を言て玄關に待たせて、手早く其處を片付けて通すといふ習慣を知らない身では、是にもはたと途胸をついたのであつた。

處へもう來客があつた。昨日一旦投り込んだ物を出して、仕分をしてゐる最中だから、中の間は一杯散亂つてゐる。さあ言はない事ぢやないと言つて大いにとつちて居る處へ、お客様は案内も待たないで、無禮にもつか／＼中の間へ踏込んで來る。逃げ場を失つてびたりと其處へお辭儀をする。客は稻野年恒渡邊霞亭山内恩僊といふ面觸であつたので、ペそを搔いた誰やらの面も忽ち笑ひに融けてしまつたのであつた。

天王寺の回憶

今私は龜井の水の縁に縋つて、長い柄の附た竹筒に、戒名を書いた經木を挟んで、龜の口から噴き出す水に沈めさせてゐるものを、一心になつて眺めてゐる。

竹筒が的確に水を受けると、漸次に壓力が加はるので、經木は筒を離れて流れ出し、夫が水の直下に廻ると、一旦水底へ押沈められて、思はぬ所に浮て來る。斯と認めたら其人は、香盤に線香を炷いて、懇念に合掌して歸つて行く。やれ／＼彼の佛さんも浮びやはつた。さあ行きまへうと、助ぎ出すのは霞亭である。私は斯いふ歴然としたもさひきに導かれて、大阪見物の第一に、佛法最初の伽藍、四天王寺へ參詣したのであつた。石の華表の額も見せられた。佛足石も見せられた。五重塔も見せられた。金堂も見せられた。太子殿も拜せられた。猫の門の睡猫も聴かされた。

東照宮の址も見せられた石の舞臺も見せられた此の水が龜の口へ出るのではない彼は金堂の須彌壇の下から湧く靈水だといふ事も聴かされた而て産婦の渡る橋太古の石棺の蓋で今は掘出して飾つてあるやら校倉やら慶長元和の兵燹を免がれた東門やら其處にある梅ヶ枝の手水鉢やら見せられつ聴かされつして東門を出た揃ひも揃つた能辯家に捉つて是だけ烟に捲かれながら私はまた龜井の水の所作を今始めて見るのではないといふ信念が胸一杯に盈ちてゐる考へて見ると古い印象のあるものは龜井の水ばかりではない胸を突くやうに高い南大門五重塔の屋根にある人形夫から長い土火鉢で焼き立てる田樂吹きながら口に入れる熱い田樂木芽の香が鼻を劈く田樂其んなものまで私は明白と記憶に存つてゐる。

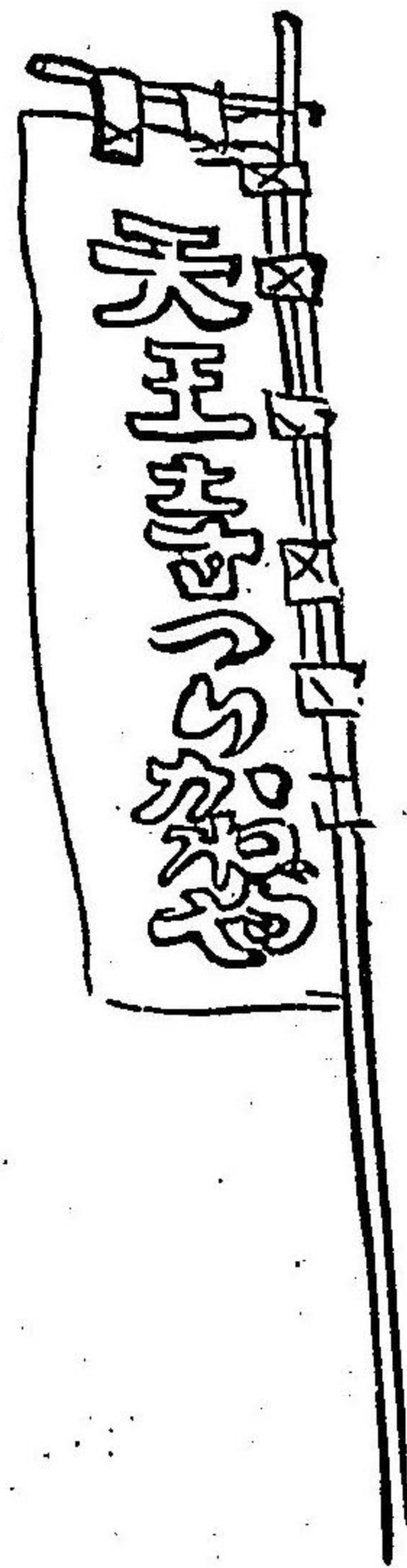
夫は二十餘年の昔の事である忘れもしない私が十二の春先考に伴れられて住吉からこゝに廻つた事があつた東京では御厩に澤山馬が

居たので遠路はいつも騎馬で出かけたが大阪の藏屋敷には馬がない雪踏穿のてくく歩きで朝早くから中の島を出た私の頭には總髮の大髻が着てゐた腰にも無論重いのを二本きめ込んでゐたぶつ割羽織に簾の馬上笠を被せられて見ると鞭を持たなければならぬやうに心得て洋式の呼子の着たのを携へ今宮まで来るともう夥多しい乞食だ家を出る時から乞食には目も觸れるなど戒められてゐたから幾ら附て来ても知らん顔で歩いてゐたが小供と見て馬鹿にしたのか種々な事を言つて私を圍繞うとするのでつい我慢が爲切なくなつて鞭を揮つて追拂つたさあ大變だ大勢の乞食が前後へ詰かけてもつと打てくれろ而て一文頂かしてくれろと言たやうな調子で私の袖を捕へんばかりにする私は泣きたくなつた夫と見た従弟と兄とが蕎麦地に駆けつけて非常な勢ひで毟號つけたから乞食は驚いて後通りする新那馬鹿ッ！といつて私をぐんぐん引張つて行つた。

天下茶屋の是齋で休んだ時私は大事な鞭を取り上げられてしまつた。此の先には餘り多くの乞食にも會はないで無事に住吉へ参詣した。反橋も渡つた難波屋の笠松も見た高灯籠にも登つた。三文字屋だと思つてゐるが赤前垂の女中の居る庭の廣い茶屋で晝食をした。夫からまた社の脇の立派なお寺の前を通つて田圃道へ出た。安倍晴明の何とか松蟲鈴蟲の何とか種々な話しを聴かされて、麥や菜種の中を歩き〜ひよつこりと此の天王寺へ來たのであつた。

今考へて見てももつと立派なお寺であつたやうに思はれた。而して安居天神だの新清水だのと引廻されて日の暮々にその下の浮む瀬といふ料理へ行つた事は此處で見せられた鮑の貝の盃だの七人狸々の大杯だのに驚かされたので其の記憶は慥かに存つてゐる。此處で駕籠を雇はせて歸りは夢現であつた事は記憶といふよりは連想によつて語り得るのである。

今日はまだ夫と反對に東門外の關帝廟といふのに導かれて愚僧の尺八を聴きながら腥さうな普茶料理で飲んだ。雲水(邦福寺)よりも潤澤なだけに雲水よりも黄藥を遠ざかつてゐると年恒が説明して聴かせた。鶏の佳いのがおます。一つ絞めまへうか、といふ坊さんだよと霞亭が裏書をした。



桃谷の宿

二週間ばかりの後、北桃谷の四角な家に移轉つた。三帖二間に、四帖半六帖といふ手狭な家ではあつたが、門から玄關まで二間もあり、北受ながら庭園も五坪餘りあつて、何處か斯う伸びりとしたやうに思つたからである。

實はといふと私はもつと大阪らしい、ごみぐししたやゝこしい處に住んで濃厚な——寧ろ濁した大阪の空氣に浸つて見たかつた「日本」の櫻田さんのやうに、俗賣になつて長町裏へ這入り込む勇氣はないまでも、出来るだけごん底を叩いて、狂れ易くして親み難い大阪人の心理を、抜本的に調べて見たいと思つて居た。其の點からいふと、内淡路町の住居は私に取つては結構な材料といはねばならぬ。私は曾て一種の大阪を味つた事があつた。何でも十六七の時代だつ

たらう。私は小學教授法の傳習生として松山(伊豫)に學び、何ういふ間違だつたか、勝山小學の授業生に抜擢せられた事があつた。教鞭を執つて生徒に對して見ると、年は弱に相違ないが、私は生徒の方がえらいやうに思はれてならなかつた。放課後更に各郡から選抜されて來てゐる傳習生に、下等小學の教授法を授けろと命せられた。生徒は孰れも先生より年も長じて居れば、漢學の素養は全然比較にならぬ。夫でもこれを満六歳の子供として、私が教はつた通りを口うつしにするのだから、思つた程怖ないものではなかつた。併し私は考へた。今私は育英の任を負はされて、而も育英の人を造つてゐると思つたら、夫は大變な誤解である。私は今鸚鵡の口眞似をしてゐるので、何處に自分の地聲があらう。齡はといへばまだ乳の香の失せぬ黄口豎子ではないか。此の日進月歩の時世に、鸚鵡の眞似をして何にならう。所詮一日も早く生徒に復らねばならぬと考へが一決すると、もう一日も猶豫は出來ない。暑中休暇後まだ

一月にもならぬのに、断然辭職して東上の途に就いた。

斯ういふと大層立派に聞えるが、志は其の通りであつても、旅費とか、學資とか其んな重要な問題は、少しも解決されてゐるのではない。唯だ東京へ出さへすれば、熟知の土地ではあり、親類も在る事だから、何うにかならない事はないと云ふ丈の考へであつた。是が抑大間違ひの上に、只た二日の辛抱だから、下等に乗れば済むものを入らぬ娑婆つ氣を出して中等に乗込み得意になつて菓子賣に頭を下げさせなごしてゐた。其の酬ひは、靦視神戸横濱間の船賃を拂ふと、それでもう底を拂ふ悲運に陥つてしまつた。

此時何かの話しから心安くなつた一商人が、私の境遇に同情して、その案内で先づ大阪へ乗込み、北堀江の鐵橋北詰を東に入つた北側の宿に泊つた。此家は其人の定宿であつたから、家人からは家族同様に扱はれ、緩々宅に居て教員の口を探したら、必ず勤め先のない筈はないと言

はれて私も一時大阪に足を留め、多少の學資を貯蓄した上、初一念を果たさうと決心して、お客様の待遇を辭退したのであつた。私がこの數週間に見た斯した階級の大阪の家庭、斯した家へ出入する人の氣質、習俗といふものは、慥に偽らざる特質を握り得たと信じてゐる。

尤も、其の頃は文樂座が松島にあつて、古軼太夫といふ名人が、軼の永代濱で素淨瑠璃をうつたりなごした時であつた。話が枝葉に涉るやうだが、少しこの永代濱の淨瑠璃の模様を語つて見やう。私が其處の客人家族に伴はれて行つた晩は、古軼の語り物が三勝の酒屋で、木戸は三枚札だと言つて、皆なが古軼の見識を激賞してゐた。私が容貌や音聲を記憶してゐるのは、新軼灘の造酒家の主人と山四郎(津太夫の師山城大椽)とだけで、肝腎の古軼は、細面の温和な顔、御靈で殺されたと聞いた時にも爾う感じた。太夫のやうに覺えてゐるばかりで、音量の強弱も記憶しないが、其の語口だけは、今以て慥に耳に残つてゐる。送りが済んで、「後

には園が」と出ると極りて「待てました」と来なければ是非「ぢわ」が
来なくつてはならぬ約束だのに、此時ばかりは小屋も張裂るやうな大
入、お負に小屋の外にも一杯の立聴き、橋の通行も止つたほどであつた
さうだが、夫で居て宛で水を打つたやうに静りかへつて森としてゐる。
思做しか知らぬが、三味線の調子まで低く沈んで、太夫も目を瞑つた
まゝ、極めて低い極めて静かな、而て内に萬斛の涙を湛えた深刻な痛切
な、華實な典雅な婉曲な、潜び音に、思ひ餘つた胸の懐ひが、知らず識らず
口に上るやうに、動もすれば胸を衝いて、進しらんとする熱涙を呑み吞
み、我と吾が心に物語るのであつた。沈んだものだ、寂しいものだ、何處に
一言喝采が投せられやう、私は隙子一重向ふに居るお園が、我にもあ
す意中を語つて、我が苦節を慰める聲を聴いた。私は到底古物といふ名
人の語る淨瑠璃を聞かなかつた。
打れたやうにぐつたりして歸つた後も、寝るのを忘れて、淨瑠璃の月

且をしたが、翌る日も幾どお園の噂で日を暮らした。私は三日目に氣が
着いて、心當りを奔走して見たが、自分を教員として採用される望みは、
先づ断念するより外はなかつた。私は家人の意向を測り難く、此事を告
白するのが苦痛だつたが、何時まで隠屏して置く問題でないのか、断然就
職の望のない事を語り、此上は職方は出来まいが、丁稚にでも何にでも
なる。然るべく處分して呉ると投出した。此時主人夫婦は、大阪の土地と、
大阪商人とに就て、其の裏面を説明した上、此んな習慣に抵抗しても、大
阪では一日でも暮らせない。大阪で仕事をするには、全く大阪に征服さ
れなければならぬ。貴下には夫は出来ぬ、御覽なさい、九州から出た人
だらうが、奥州から来た人だらうが、大阪へ来て何屋何兵衛で成功して
ゐる人は、何處を尋ねても、西國魂もなければ、奥州氣質もない、皆な純粹
の大阪人に化して居る。五代さんはもう薩摩ッぽぢやない、藤田さんも
長州拔がしてしまつた。失禮ながら貴下には金儲は出来ません、出来ぬ

事をしやうとするのは天下に此より恐な事はないと言つたやうに諄諄と諭して呉れた私は此時ほど深く大阪を解した事はなかつたと、今となつても深甚追懐するのである。

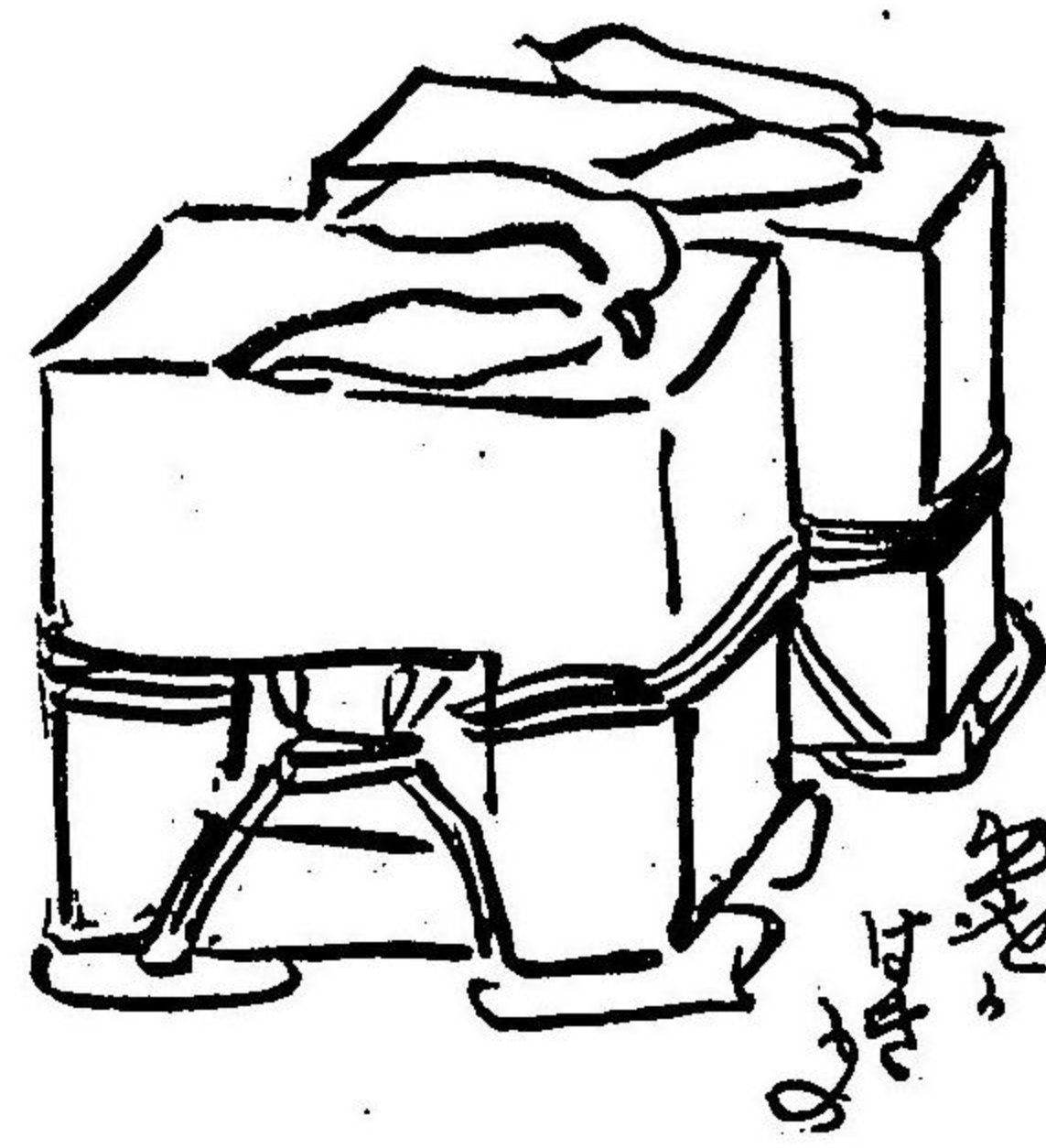
其時と今日とは境遇も違へば時勢も違ふ當時解し得たと信ずる大阪の味ひと今將に解せんとする大阪の味ひとは到底同香一味ではあるまい。此の等差と時運の速度とを比較研究するのも慥かに趣味のある事業と考へられる私は此んな點からも一遍は大阪の空氣に酔つて見たかつたのであつた。

東成郡役所の標札からして多少の野趣を想はしむる天王寺へ來たのが第一順序を顛倒したのに歸途波邊氏に迎へられて所謂四目(四間とも)造りといふ住宅の廻り庭に廻り縁庭の向ふは崖になつてゐて、月をも風をも妨ぐるものゝない快濶な閑靜な家の様を見せられたので私は鰻の穴のやうな細長い陰鬱な巢へ歸るのさへ情々もう厭になつ

てしまつた所で不案内の市街を方角も定めず足に委せて馳すり廻つて十三小路とかいふ處で路に迷つた後ひよつこり出た角から二軒目の家に移轉の貼紙のしてあるのを認め得た時は能くいふやつだが鬼の首でも取つた心持であつたそれが西川漸といふ知名の士の舊栖であつて見れば爾後い家でもあるまいと思つて直に屋守を尋ねて一見に及んだのが即ち此の北桃谷の新居である。

新築後一二年位の家ではあり壁隣の家もなく何となく住み心が好いので始めて自分の宅を得たやうな氣になつたものゝ、此處では所詮大阪を見る事は出来なかつた元は五十軒屋敷といつて城附與力の邸宅であつたさうだが其の低い土瓶は大阪の人に愛されずして地方から來る軍人裁判官官吏教員銀行員新聞記者と云つたやうな人に占領せられ朝夕出入る商人さへ此處では大阪辯を行使ぬ程に他國化してゐるからである私はもう大阪を知りたいといふ希望を抛つたやうに阿

波の鳴門でお馴染の、ごんごろ大師だの、契沖阿闍梨の圓珠庵だの、左衛門尉幸村の眞田山だの、誓願寺の西鶴の墓だの、法妙寺の近松の碑だの、味原の池だの、産湯の清水だの、野中の観音だの、桃山だのと、雲雀もまた歌はぬ先から、郊外珍らしさに漫歩いてばかり居た。



櫻野宮の四季

櫻野宮の堤上には、二度までも住んで見た。大阪十三年の滞留中、何處の印象が一番深いかと言へば、それは此の櫻の宮である事は言ふまでもない。

年恒が大川町の書塾を網島の樋の口に移した。其處の座敷から四明の嶺まで一瞬に落る萬頃の麥隴菜畦を望せられた時は、矢も楯もなく健美に堪へなかつた。郊外の散策で半野性に俘はれた處へ、理想のまゝを實現したやうな此の勝境へ來ては、着々として桃谷の家の缺點が算へられ、同じ住むなら此んな明麗な境に身を處きたいと、もう心の根元から動き出した。而て稻野氏にも頼み、自分でも捜して間もなく「わざと切」の北造幣局の對岸なる憲兵分屯所の跡を借受けた。而て短兵急に移轉つたのであつた。

天幸なる哉翌日は朝から珍らしく薫らぬ花を開かして終日殆ど小歌もなく降り續けた樓に登つて展望すると對岸の造幣局も見えず水の色も黒く淀んで鉛を溶かして流すやうな中を篙士が筏を刺して來た緑の竹には玉屑を載せて居る笠も篋も鷲毛を着飾つてゐる霏々として降り紛々として飛ぶ天女の磯を一竿の棹に拂つて流れに随つて遠かつて行く見る／＼前面に白い長堤が築かれたそれは對岸一帯の櫻に春に知られぬ花を盛つたのであつた岸の柳も磯の小草もそこの捨小舟も唯だ一色に白く淨められて頓て天は一碧に晴れ霽つた今や摩耶山頭に春かんとする夕陽は紅く燃えて一大銀世界を描き出した淡と嶺との輪廓が明らかになつた雪の美は遺憾なく發揮された私達は雪に酔つて風の寒いのも少しも感じなかつた。

淺緑色の雪の嶺に目を駭かされてゐるうちに日は全く落ちて代つて月が昇つた今度は川を捨て山野の美觀を縦にせねばならぬ雪の客

人の霞亭と私とは年恒の畫室に席を移した狐の足痕一つない雪の田圃は一面の白布を展べて遠近に散在する村や杜や淡い隈に浮き出したのが晝よりも却つて鮮かに見える膽駒の連峰と遠い宇治の諸山とは高低参差として北方に斷續し八幡の男山と山崎の天王山とは相對して僅に中斷してゐる其扇面形に開かれた處に伏すものは京の東山である稍や起るものは如意ヶ嶽である白川越である其後に峙つものは大比叡である小比叡である山崎の上に聳ゆる愛宕を以てこの大觀を區劃るとすれば私達は今四州の山野に對して月と雪との清賞を専らにしてゐるのである如何なる天の寵光ぞ！

此時は都島の水道工事が始つたばかりで城東線はまだ形もなかつたから磯に紫雲英が咲き堤に土筆が芽ひ頃になるともう漸々菜の花が彩り初める椿が落ちて柳が糸を繰る時分になると堤上の櫻がそろそろ花を粧ひ遊好きの浪速男浪速女を狂はせるが有體に言ふと櫻の

宮は名のみなりけりて花よりも千金の價ある美観は満目千里の黄金
海である咽ぶばかりに香の高い鬱金の花の中を無数の白帆の登り行
く光景は先づ海内無雙と言つべきである明ゆく空に川霧の中を破つ
て花のみ先に明わたる遊幣の岸を見るのも言ふべからざる絶賞では
あるが他に類のない點から言つても盛りりの長い點から言つても展望の
廣い點から言つても私は櫻の宮の春光は何うしても菜の花の方に軍配
を擧げたいと思ふ。

汀の楊に翡翠が屢々来て葦や蔕の角ぐり頃になると麥秋の忙しき
刈る跡を直鋤きかへす中に相對して連枷を動かす男女の顔ばかりが
通らぬ意を節にも聲にも表はしてゐる麥稈が無心の少女に籠を編れ
て中に草苺を盛られる時分には菜種も疾に拂はれて其の殻を山積し
たのに夜を籠めて火を放つと天を焦して炎々と燃え上る是れを菜種
焼といふ開夜に此の火が點々と燃え立つて或は近く或は遠く或は熾

んに或は微に此處に滅すれば彼處に焚け宛然雄大なる狐火を見るや
うに千兵の野營を見るやうに攝河の野を彩るのはいかにも豪快な壯
觀である臆病な都人の菜種火事に驚かされて警鐘を鳴らし消防を繰
出す事も決して珍らしい例ではない。

青田になると此郷にも汗を搾り出す或物が来る昔は猫間川の堤に
は若衆に伊達を盡させて笠撲に豪華を競ふた大盡もあつたと西鶴は
語つてをるが櫻の宮には流笠も多くはなく一笠來い行燈に隠れて笠着
て來いと呼ぶ聲の聞ゆるのはほんの僅な期間に過ぎない一番草二番草
はまだしも三番草となつては田の水も沸かうが人の身體も茹る岸の
通ひ船が下へ降ると日は網島から昏れそめてやがて音のない花火が
遠く輝く人は只だ此の夜を待つばかりだがさて思ふほど風はない蚊
は甚い蟲は多い市中で考へるほど夏の櫻の宮は極樂ではなかつた。
でも水郷の一徳には天満祭が濟むとそろ／＼自分の世界に近いた

やうな氣で、母恩寺の蓮や鶴満寺の萩が、噂に上る其内に京街道あたりから太鼓の音が轟いて、村若衆や村嬢の口には、晝から江州音頭が諺はれる。そのまた鉦の音が甚く男女の心をそゝり立てるので、浴衣に手拭を吹流しに被つた踊子が、腰をふりく踊りの場へ急ぐのも、人生の享樂を盈たさん爲めて、強ち淫風に浸潤した汚俗とのみは言はれまい。踊は兎に角、農家の青年男女が、唯一の夜會である舞踏會である。

雪を歎美した私は、月をも激賞せねばならぬ良夜に會した事があつた。夫は二度目に廣喜の大銀杏の表へ住んでゐた時で、殆ど無月かと思はれたのが、三時頃から廓然と晴れて、碧天一夜秋水の如き良夜となつた。晝が晝だけに來ると約した友もないから、櫻野宮の上まで行つて月の出を見た。何をいふにも、俄か天氣だけに非常に水蒸氣が深く、月の出はすばらしい大きな物であつたが、水蒸氣の爲に輪廓が暈流てゐて、其の光りは鈍かつた。けれども此の景色が却つて別種の妙があつたので、

私は草の上へ腰を下して、一心に月の方を見てゐると、昇ること三年ばかりで、周圍の水蒸氣は光破されて、眞白に透徹るやうな月が、天一面に輝いて來た。その美觀といつたら、些も形容する語を持たない。只もうあの美麗だと言ふばかりで、恍惚として見てゐたが、何時の間にか月の反射が非常に廣くなつて、向ふの山も下の人家も霧の中に見え難きほどに薄らぎ、我が眼前三尺ばかりの處から、もう朦朧としてゐて、乾坤無一物の眞只中に、唯だ一團の大月ばかり、縦まに清光を放つてゐるのであつた。私は一時月と私と唯だ二つ、この大虚空の間に取殘されたものと疑つた程である。月の美か、水蒸氣の美か、私の生涯に於ては、今日まで斯やうに月の美を味ひ、斯やうに崇高に打たれた事はなかつた。

一年中を通して、大阪で最も氣候の佳い時といへば、五月から六月中旬まで、九月中旬から十月一杯までの所謂裕時節を舉げねばならぬ。此の季間は、比較的晴天が續き、空氣も乾燥してゐて、神身の爽快な季節

である櫻の宮に網打の多いのも此の季節なら釣徒の衆いのも此季節である。

倦怠やうな蛙の聲を聞きながら露れるでもなく雨るでもない五月雨の空を眺めて、量の増した川面に目を落とすと、腰袋を纏つた舟士が一隻の舟を操つて下つて来る、其の舟には舟の長よりも大きな四ツ手網が備へてあつて、適當な處で棹を立てると同時に四ツ手網を洵然と水に下すすると外に二隻の小舟があつて、双方から葉織の切片をべらべらと垂れた繩を沈めながら左右に漕ぎ分れ上流を一杯に展開するを合圖に、今度は速度をかけて網舟の方へ縮合しつゝ、其の繩を左右に手繰るのである。それが網に近接するのを待つて、今度は四手網を徐ろに引き揚げる、水を列ねた網が中空に霞を張つたやうに開くと、潑刺たる鮮鱗は袋に陥つて玉網に掬はれて半水に没した畚の中に放たれる、斯くしてまた下へ降つて同じ所作を繰返すのである。この四手網が十隻

も二十隻も川を壓して列なつた時は淀川はいつしか大海となつて、ここに漁浦の光景を現出するのが、いかにも爽涼な好風景である。若し夫れ日全く没して、芦間の水の却つて白を存するの時、無数の網舟に漁火を點じたと來たら所謂お眺へ向きの美觀を呈して、首夏の宵をして、畫化し詩化するの想ひあらしむるのだ、是れに多少の雨を添へると、また一段の光景を加へるのは改めて言ふまでもない。

秋の此の季節になると堤の下の芦が更けて、櫻蓼、犬蓼、紅蓼の類が、此間に赤い小さな花を一面に零して粧點する。堤の斜面には小笹の中に野菊が紫の花をさへげて、赤蜻蛉のなぶるに委せてゐる。楊柳の茂みには、時を得貌に芒が穂を抽んで、根方の露の溢い處には、鴨跡草の瑠璃の光澤が、白晝まで眺められる。水は常よりも量を増して、其の流れは最も清く澄わたつて、底の眞砂も算へられるやう、私は此の美しい秋の川を舟で社へ通つた事があつた。――斷つて置くが、石油發動機の巡航船

は、是より遙か後の事である。――私が櫻の宮へ移ると、間もなく霞亭も来た程、程を経て、恐懼も来た。また此の秋になつて、松本晚翠も来た。『難波濁』時代の桃谷が櫻の宮へ轉じたと言つた人もあつた程だつたが、何事も別様の趣味のある晚翠の發起で、通ひ船を一艘僱つて、通勤の俵に代へることを試みた。即ち先づ川上に居る霞亭と晚翠とを載せて下つて来る。と前のケレツプで私達が乗つて、夫で流れを下つて、中之島三丁目の社の前まで横着けにするのであるが、道も近ければ、樂でもあり、書見も出れば、談話も出来る、何だか社へ勤めに通ふのか、遊山をしてゐるのか、理屈を言へば分らぬ位の沙汰であつた。而して網島を裏から藤田邸を見た工合や、御藏下を過ぎて、將棋島にかゝると、楊柳が水に梳づる、間子や、亂杭に綸を垂る、釣翁の風采や、慥かに詩中の材もある。天神橋を過て、築地の裏にかゝると、錦の裏といふよりも、刺繍の裡を見るやうな感じはするが、吊葱の間から見える人情の機微は、少くもゾラ風の觀察に

は、適する題材であらう。公園を右に見て、網彦や柴藤の生洲船を通り越す時に、胃を刺戟するやうな香を嗅がされる事がある。疑と唾を呑込みさへすれば、船は逃るやうに、肥後橋を潜つて、白楊蔭高き社の濱に安着する。此んな出勤の道中は、殆ど他にはあるまいと思つた。

冬の櫻の宮は、一年中の最も劣つた最も悪い時季である。川から来る風は時に戸障子を飛す事がある。夫だけに天満に林立した烟突から、煤煙が猛烈に舞込んで来る。表の戸障子を釘着するの、此時なら表側の障子が眞黒になるのも、此時である。事實はこれに相違ないが、私はこゝで四度ばかり冬を越して、別に大して寒いとも感じなかつた。市中で悪く底冷のする根性の悪い寒さに惱される程、こゝの寒には畏れなかつた。初寒の夜に、靄を磨る白挽き歌を聞いて、稻子の附焼でも啣る時分、から堤はもう寂しくなる。磯へ引上られた通船は、船園をして見棄られる。宮の銀杏も、廣喜の銀杏も、黄色い葉を振つて、川には家明の聲ばかり元

氣が好い。

寒に入ると鉢叩(はちう)空也(くうや)や寒念佛(かんねんぶつ)は来ないが野施行(のせぎやう)はこゝへもやつて来る。此邊まで来ると大分(おほぶん)すば抜けて噪ぎ出す。施行! 施行!! 野施行(のせぎやう)ちやい!!! 男(おとこ)の聲(こゑ)はもう皺(しわ)唄(うた)れてゐるが若い女(おんな)の聲(こゑ)は寒風(かんぷう)を劈(つ)いて能く冴(さ)える。而(しか)して此(こ)の間(ま)には何か隠語(いんご)めいた事を言(い)ひ合(あ)つては、キヤツキヤと噪(な)ぎ狂(くる)つてゐる。爐(いろ)を擁(よう)しても尙(なほ)ほ寒い夜(よ)に遠(とほ)く温(ぬ)かな市中(しやうちゆう)から来て稻荷(いなぎ)の社(やしろ)を尋(たず)ね廻(まわ)り寒(か)に入(い)つて食(た)に窮(きう)する神狐(しんこ)を憐(あは)れむために赤(あか)の飯(い)に油揚(あぶらあげ)を添(そ)へた竹(たけ)の皮包(かわかみ)を施(せ)行(ぎやう)して行く。信仰(しんぎやう)心(しん)同情(どうじやう)心(しん)慈善(じぜん)心(しん)の温(ぬ)かさもあらうがまた内(うち)に燃(も)ゆる斯(ごと)ういふ優(やさ)しい血(ち)の發(は)作(さく)が凛(れん)烈(れつ)な邪(よこ)寒(か)をも忘(わ)れさせるのであらうか。熱(あつ)烈(れつ)な篤(あつ)志(し)家(か)に對(たい)して稻荷(いなぎ)の神(かみ)は如何(いか)なる利益(りやく)を垂(た)れ給(たま)ふものであらうか。神使(かみづかひ)の狐(こ)は如何(いか)して恩(おん)に報(はぐ)うるであらうか。狐(こ)の口(くち)に入るに先(ま)つて手(て)を受けて奪(は)ひ去(さ)る山家(やまか)者(もの)乞(こ)食(じき)の一種(いっしゆ)は如何(いか)ばかり此(こ)の惠(めぐみ)に感泣(かんだ)するであらうか。提灯(ていとう)持(も)持(も)荷(に)擔(た)ぎを

除いても一隊十人を越ゆる此の男女が志す神祠(かみづかひ)を一巡(ひとめぐ)して歸(かへ)つた時

に衷心(しんしん)に感(か)じ來(き)たる情懷(じやうわい)は抑(おさ)り如何(いか)なるものであらうか。

櫻(うめ)の宮(みや)も遂(つい)に大阪(おさか)市(し)に領有(りやうゆう)せられて北區(きたく)東野田(とうのだ)町(まち)となつてはもう昔(むかし)の野趣(のそ)を尋(たず)ぬるよすがもない。豊太閤(とよたか)のお茶(ちや)の水(みづ)に汲(く)まれた青澗(せいがん)は、淺瀬(あさせ)となつて潺湲(せせ)を聞(き)けども、茗(めい)謙(けん)雅集(やじつ)の茶寮(ちやせう)は碑(い)とにも存(ぞん)する。今日(こんにち)淀川(よどがは)橋(はし)の擬寶珠(ぎぼうしゆ)の故(こ)とらしいのも風致(ふうぢ)を補(おぎ)ふ力(ちから)はない。私は水道工(すいどうこう)事の進捗(しんしゆく)とも市(し)の塵(ちり)が襲(おそ)つて來(き)たのに畏(おそ)れて逃(に)出し重(おも)ねてはまた鐵道工事(てつどうこうじ)の爲(ため)に工夫(くふう)勞働者(らうどうしや)の跋扈(はくこ)に畏(おそ)縮(ちぢ)して遂(つい)に別(わか)れを此(こ)の勝境(しょうけい)に告(つ)げたのであつたが、其(その)後(ご)の櫻(うめ)の宮(みや)には月下(げつが)に展(ま)開(かい)する銀世界(ぎんせかい)の美觀(びくわん)があるだらうか。八面玲瓏(はつめんれいろう)乾坤(けんけん)只(ただ)月(つき)と吾(われ)とのみの幽景(ゆうけい)があるだらうか。

上町の住居

私は内淡路町に前後三度島町通の谷町に二度住まつて遂に島町の善安筋の西北角に根を下してしまつた。斯うして上町にばかり居ては幾分か東京化せられた土地だけに全く大阪の單色を窺ふことが出来ない。ので、何うかして、少しも地方の色彩を混じない船場内に住んで見たいと熱望してゐた。度々此の方面の空家を捜しに行つたが、一度も住み着く機會がなかつた。一度などは、伏見町の一家を、まだ人の住んでゐるうちに、借用を申込んだ事があつた。私が頼んで申込んで貰つた人は、其家の持主と兄弟同様の間で、此人の口添なら必ず成功するものと思つてゐたのに、家の監理者の手元には、現住者の借付した當時から優先權を握つてゐる候補者があつて、是れさへ不成功に終つてしまつたので、私は所詮船場に住む縁のないものと斷念して、到頭その希望を抛た

ねばならぬ薄運に陥つた。

斯うして上町に住み馴れて見ると、上町には上町で、一種の威嚴もある。一種の長所もある。一秒にもせよ、朝日の光りが先へ中るだけに、何か舊慣故俗に囚はれない、小節に拘はらない、新しい元氣に盈ちてゐる。私は朝時間がある。城外の馬場を一巡して來るが、此の雄大な金城鐵壁を仰ぎ、此の老蒼たる龍鱗鶴骨に對し、紅暎の金光を投る下に、一隊の野砲兵の縦列を見ると、心境一時に開けて、何うやら自分の身體まで大きくなつたやうな感じがする。また夕方こゝを散歩して、大手門の白壁に夕陽の映じる時、一騎の傳騎城を出で來たるを見る。肋骨の黄線の反映に因つて金色を呈し、緋の袴の更に赤きを加ふるは言はず、鐵騎と堅城との對照が、宛然一幅の名畫となる處、いかに人心を堅實にするよ、如何に人意を強健にするよ、私は池邊三山鳥居、素川等と月をこの城外に賞した事があつたが、矢倉の壁の白いのと、並木の松の黒いのと

東西に相對して廣漠たる廣場に遮る陰もなく光りを投げかけた月は、別様の清光を放ちつゝあるやうであつた。大手門外のかづら石に倚つて深い深い薬研堀に浮ぶ蟬影を賞しながら、大阪城の馬場の光景の雄壯なのは、天下何れの名城にもないと言つて、三山が頻りに各地城外の外観を語つた事があつた。私もこれに同感して、歸途借行社の角に佇立し、三人齊しく東南を願望した事があつたが、月夜の大坂城には、慥に豊太閤の英靈も來たり遊ぶといふ感想を抱せられる昔は馬場の月見といつて、城南練兵場を開放したから、非常な賑はひであつたが、風紀上禁せられたのみならず、今は兵營で建て詰つて、設令や許されても、其の場所がなくなつたのである。

博物館も上町の有する誇の一つである。名は博物館だが、科學上の博物館ではない、美術館と陳列館と、能樂堂と、衆樂館と、動物園と、植物園とを極めて非科學的に結合した、一つの娛樂場に過ぎないのだ。公園らし

き公園を有せず、俱樂部らしき俱樂部を有せざる大阪に在つては、此の五千坪の地域は唯一の樂園である。春秋二季の美術館に於る展覽會、時の共進會、陳列會は言はずもあれ、四時の花に憧れて來る老若山野の動物を喜んで來る子女黨の會、繡眼兒の會、金魚の會、朝午花の會、牡丹の花、摘菊の花、瓶花の會、抹茶の會、琴の會、習會舞の會、習會素人、義太夫音樂會、何でも持ち込む場所は、こゝである。博物館は、市民の利便を感じ、子女の悅樂を感じ、公共の性質を的確に感せしめる處はあるまい。博物館は、大阪市の生命である。

高津天王寺間の最も景勝の地を占有する寺町も、又上町の有する誇である。小橋寺町、上寺町、生玉寺町、中寺町、下寺町に門を對し、薨を列ぬる幾百の寺院は、維新前に比して多少その觀を改めたであらうが、東京京都の如き、大檀那の退轉にも遭はず、寺祿の沒收にも遇はなかつたので、今も尙ほ堂々として、白堊の色を變へない。更に一步、卵塔に入つて、苔を

拂つて碑陰を讀めば、幾多知名の高士が永眠の床は、到る處に發見せらるゝのである。地の景勝といひ、殿堂の完備といひ、寺町は確かに大阪の誇りである。

別莊地としても私は東郊一帯の地を勸めたい。出入の便不便是決して別莊の要件でない以上は、展望の快潤な、空氣の清涼な、煤烟の稀少な、地味の膏腴な東郊に別業を營まないのは嘘であらう。私は桃山の絳桃火の如く燃ゆる頃、木原氏の七松庵に招かれた事があつた。庵は餌差町の圓珠庵の向ひにあつて、七松の滴翠春光を覆ふ處に、廣からず狭からぬ別業を置いて、其南に一段低き廣庭がある。中央に圓山を築いた。けで、一面の芝生となし、爰に瀟洒な閑室茶室がある。欄に倚つて眼を放つと、自園の桃林を隔て、味原の池は太古の水を湛え、堤の外より産湯の森と、ともに桃山の春色が一瞬に藏るのである。桃園に下れば、池畔に床木を設け、茶を啜り、瓢を傾けて紅霞を貪り、觀るに委せてあつた客を待つ

設備は言ふがものはないが、別業として能く其處を得た點は、何人も否認することは出来まい。私は此んな處で會心の書でも讀んだら、何んなに爽快だらうと感じたのであつた。

井原西鶴は大なる上町の誇である。其の舊栖が現存して居ないのは無論ながら、何處に住んで居たかといふ事は、知れない事はあるまい。その考へで、鎗屋町を尋ねた事があつた種々と説を立てる人はあつたが、其人とても何等の資料があるのではなく、唯だ此邊らしいといふ推測だけで、何の目的もなく探してゐる私と謂は、い五十歩百歩に過ぎなかつた。一時は日課のやうにして、内本町から常磐町にかけ、鎗屋町を中に狭んで、搜索して見た土地で一番の舊家といふ人に就ても聞いた。露路の小名なども調べた種々と手は盡した積りだつたが、私の力では、頭調上げる事が出来なかつた。饗庭篁村は名が懐しいと言つて、京橋鎗屋町の煉瓦の家にさへ住んだ事があるから、同じ地の同じ町だけに、切

て住でも見やるかとも思つたが何うも今の鎗屋町へは住む氣にもなれなかつた。

もう一つ上町の誇を語らして貰はう。石町の高倉東筋にハリスト聖教會があつて、日曜に鐘の鳴る事を知らない人はないが、こゝに外務省の出張所として、外國使臣と樽俎の間に折衝した史蹟のある事を知つてゐる人があるか？南無阿彌島の長寺さへ、金の威光で投げ出される現代に、其んな史蹟位誰が詮索するものかと言はれ、ば夫れまでの事だが、維新草創の時、外國館副總裁伊達宗城、東久世通禧の兩少將が、外交團の大難物パークスを始め、露佛公使等の難局を平和に解決せんとして、京都より往來しては、一代の才智を注ぎ、一世の雄辯を揮つて、我が國體に寸毫の傷をも附けず、に纏めた處は、即ち聖教會の建物である當時は、三大橋を一陣に收る處から、樓を三橋樓と號して、大阪有数の旗亭であつた外國館では、京都に屢々外國公使の來往するのを畏れて、此の絶景

の地を出張所となし、此處で何事をも折衝したのであつた。今も有名な根つきの床柱が存つてゐるといふ事であつたが、遂に一見する機會を得なかつた。斯様に、我國外交史に深縁ある舊家は、ハリスト教會の會堂となり、教會の發達と、もに更に、全く其の史蹟は取毀され、爰に露國式の堂々たる大寺院となつて、全大阪を睥睨するに至らんとは――

前 伊 突

正月と祭と節供

金光燦爛たる大禮服に堆かきまで勳章を輝かし、二頭立の馬車自動
車騎馬の執れを問はず、瑞霞めでたき千代田の皇城に参賀する正々堂
堂の儀容こそないが、大阪の正月は、整然と折目切目の正しいのが嬉し
い私のやうな横着者は、遂に一度廻禮した事もないが、夫でも宅に居て
一々來客に接し、吉例通りにすべき事は、眞面目にしたで、來る人も大概
極つてゐる。元日には誰々三日には誰々と思つてると、其人達は確然其
の通りに來られる。是が所謂一年の事は元日にあり、豫定を變更せず
に、整然と厲行するからであらう。私達の書生仲間には、別として、土地の人
であつたら、來る順序まで大概極つてゐた袴を着ける人も着けない人
も、服装は上下ともに紋服で、帯にさした扇子を把て、膝の前三寸の處へ
一文字に置き、夫に準じてびたりと手を突き、其處へ額を持つて行く禮

儀ふりまで誠に規則に當嵌つてゐる。

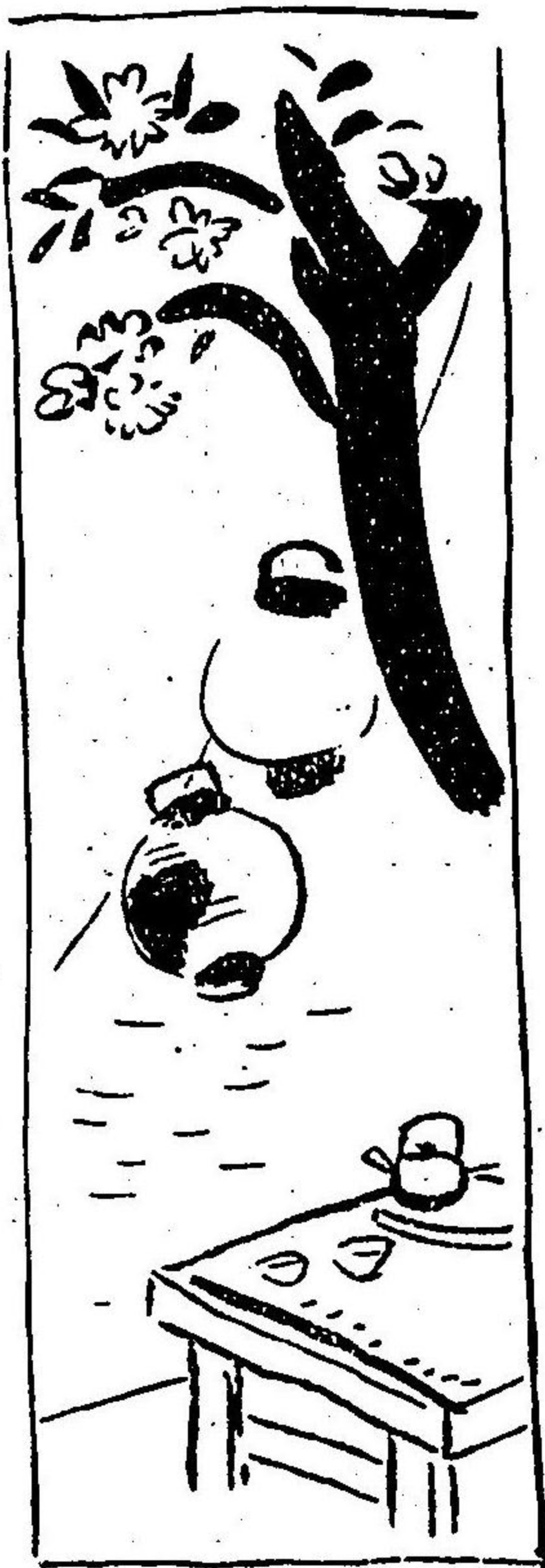
船場あたりの商家を見ると、表には家の紋を染めた幔幕を張り、出入
口の處だけ絞つて、其處へ國旗と高張が出してある。玄關には二枚折の
金屏風を建て、其前に緋の毛氈を布いて、高脚の三寶に鏡餅を飾り、夫に
對して蒔繪の文壺に同じやうな名刺入が載せてある。其脇には宣徳の
火鉢を置いて、鼠の紋服に角帯をしめた丁稚が二人、膝も崩さずに請附
を勤めてゐる事々しいといへば、夫までだが、元々斯ういふ古儀式は、現
代の習俗と一致するものではないから、迎も行くなら、是れ位にきつち
りと行りたいものだ。私は此んな處を見る毎に、爾う思つた。
併し元日の夜十二時をうつと、石油の空洞壺を叩いて「沸た〜湯が
沸た!」と初風呂を知らせるのと、初賣の商人が入りもせぬ物を推賣を
したり、夫から恥も外分も構はずに「初賣もたら〜云々と、狼狽な言を臆
面なく、歐號り散らすのとは、餘りに非文明過ぎて、閉口させられたが、是

れ等は警察の干渉に因つて、大概後を絶つたやうである。夫からもう一つ困るのは、小供が鳶口を持って注連飾を奪りに来る事だ。昔は十日戎に鳶口を買つてからであつたさうだが、今の上町の小供は三ヶ日の内からやつて来る。而て此んな悪態をつく「下んせ、下んせ、お注連繩下んせ、くりくだんせ、くりくだんせ、濫い嬉たき出せ、好え嬉内へ置け！」私は其の煩に堪へないから、十四日の晩に來い、而たら渡して遣る。來る者は其内の一、番年少者に限ると明らかに言ひ渡して、鳶口の訪問を免かれたが、實をいふと斯して貰ひ集めて、天神様なり何處なりへ納め、とんごに揚げて呉れるのは、難有いと言はねばならぬ。納めに行く人手もなく、焼拂ふ空地もないと來たら此んな持て餘しものはないのだから。大阪は夏祭が主となつて、今は一月後れの七月九日から始つて、八月一日に残らず濟んでしまふので、是れも極りの好い一つであらう。祭禮に山車も録車もなく、樂車と枕太鼓とを出すのは、大阪が先で近郷へ及

ぼしたものだらうが、正直に言ふと、孰方も餘り都雅なものではない。枕太鼓は單調な打ち方の上に、打人の風情が古い人形でも見るやうで、蠻氣のあるうちに古朴な處があるが、樂車に至つては、あの嘶子からして鄙びてゐる私は、煉物にも何にも、此處の祭には一向感心しないが、氏子の家々は祭禮らしくつて、大いに氣に入つた。其前日灰汁洗ひまでして、家をすつかり清淨にした上、表へは幕をうち、提灯を掲げ、店へは金屏風を引廻し、毛氈を敷き、或は花を生け、或は碁を囲はして、如何にも平生の事を忘れたやうに、此の二日を樂しむのである。日が暮れると、お祭提灯を真先に宮へ參詣して、提灯にはお神符を受けて歸り、夫れを梓にさして表へ飾つて置く。私は此の提灯が大好だ。青貝塗の柄に銀金具の附た蠟側の長提灯で、上へは白毛を飾り、下へは鈴を下げてあるが、其の格好に何とも言へぬ好い處がある。是は樂車に反して、全く都會を象徴する適材であらう。

五節供は、東京ほどの熱がない證據は、四月六月に御堂前へ行て見ると分る。雑でも、鍍人形でも、皆な大ぶりで、細工も甚だ無器用である。雑道具の大きな釜籠だの、五月の煉物の太鼓だの、甚だしく田舎染である。七夕は東京では全く廢つて昔のやうに、全都が竹の林になつて、吹流しの短冊が、虹のやうに天に横はる盛觀は、廣重の錦繪でも、捜さなければ見られないが、大阪では今以て行はれてゐる。手頃な笹に紙屋で賣てる五色の色紙短冊、細工物を提げて、それに幾つでも實に金箔を塗つた鬼灯を結び着ける。而て物干の柱に結え付けて置いて、日が暮れると女の子が擔ぎ出し、棚機さん鬼灯取つてるだんないか？餘り取つたら勿體ない、小供の事ならだんない〜と自問自答しては、其の鬼灯をちぎつて可愛らしい唇に啣ひ、棚機といつても爾ういふ位のもので昔のやうに机や硯を洗つて、芋の葉の朝露を硯に受け、夫で七夕の歌を書くとか、五色の糸で竹と竹とを繋いで、夫に梶の葉を掛け、七夕提灯を點し、水菜

子を献つたり、琴を供へたりするやうな事は、ない。九月はこゝも廢絶したらしいが、其代り天長節を黄花節として、大概の商人は業を休み、家を空しくして、盛装して出遊する。市内では博物場の雑踏此上なく、到る處の停車場は、一行二行三行と並んで押なくと待いてゐる。



泉布観

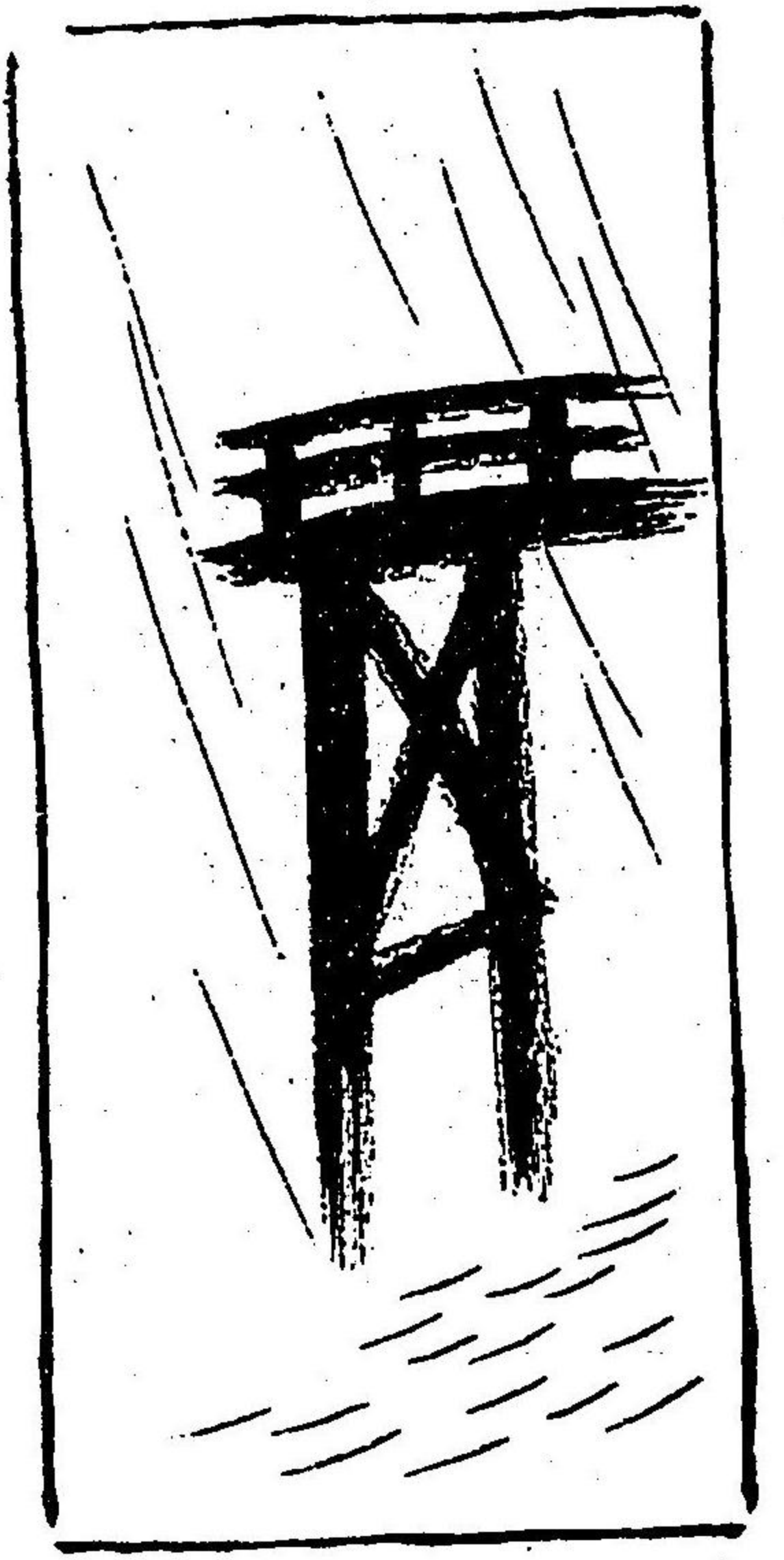
元は造幣局の應接所に建てたのが明治五年六月九州御巡幸の時行在所となり初て泉布観の佳名を賜り十年の大和行幸にも行在所となり二十年には故英照皇太后の御座所となり二十二年には皇后陛下の臨御があつて観は神聖な處となつたので遂に川崎御料地として宮内省に移つたのである。後また北白川宮の御住居となり遂に美術協會にて拜借する事となつてより庶人も随意に出入するやうになつたが實際こゝに来ると鹿園を離れ得た心持になつて百年の壽を延し得たほどの餘裕が出る。鹿園の峰でも淀川の水でもこゝより見ると異彩があつて聖地は聖地だけ全く別な感情を抱かしめる。庶幾くは恩に狂れて噴きいれ！

長柄の鶴満寺

日羅の故蹤もあるさうだが工場の石炭に黒められて今は其の跡も分るまい。森塚は豊碓橋の手前の路傍に老梅を頂いて踞んでゐるが、乞食は拂はれて影も見えない。國分寺は唯だ由來ばかりで布目瓦の一枚も見えぬが、其の隣の鶴満寺には天王寺よりも阿彌陀池よりもまた古い寶がある。人は絲櫻の花に招かれて來る萩の花づまに忍んで來る鶴満寺はともかくも春秋の花によつて大阪の人に戀はれてゐるが寶に心を寄するほどの悪人はないと見える併しかねと聞いては決して人後に墜ちる御人體とも思はれぬのに何故此のかねには心をかける人がないのかかねとは何？ 門を入て斜め右に進むと其處の鐘樓に吊されてゐる小形の梵鐘がそれだ。ちよいと見ると小つぼけなけち臭い半鐘の毛の生えたやうな鐘だが是が大阪は恐な事日本全國に於て四

つとはない古鐘名鐘と聞いては誰しも今一度見たいであらう。こゝに
 此の鐘の由来を語つて見やうか。この鐘は元來日本の物ではなく支那
 は支那だが西晋惠帝の御世に鑄造した黃陟鐘であつて其の銘には永
 平十年の撰と彫んである。西晋惠帝永平十年といへば我が朝では人皇
 十五代應神天皇の三十一年で今を距ること一千六百十三年の大古で
 ある。永平十年は正月に永康と改元されてゐるから此の銘は正月に撰
 せられたものでなければならぬ。何と古い物ではないか。此れを日本
 三鐘の一つに算へるのは當然の事で支那にも或ひは之れに匹敵する
 古鐘は——發掘物のほかにはないかも知れない。鶴満寺も雲松山慈祥
 院など、號して開基の年さへ知れない古寺だが夫にしてもえらい寶
 物を持つてゐるものだ。いや、大阪がえらい寶物を持つてゐるのだ。
 此の黃陟鐘は彼岸にしか撞かない。私は櫻の宮にゐて其の音を聞いた
 が、何處の寺の鐘が鳴つてゐても此の鐘の音は別に澄んでゐるので決

して他の聲と混する事はない。櫻の宮の人達は、その鶴満寺の鐘が聞え
 ると、もう徐々、絲櫻が咲くぞといふのである。今は國寶にでもなつてゐ
 るか知らん。



四條畷神社

北河内の山は西受でありながら一體に陽氣だ。元春日の枚岡神社もそれだが陸と舟との口論で有名な野崎の観音もさうだ。山に大樹のない故かと思へば枚岡のやうに森林の鬱茂としてゐる處もある。四條畷神社は勸請の年月が新しい故もあらうが是が神さびるのには幾十年を費さねばならぬだらう。飯盛山も年々に切開かれて別荘染た料亭の敷を殖すのは神威の上からいへば困つたものであるが人氣を惹き寄せる爲には是でなくては成らぬかも知れぬ。父君の湊川神社も漸と境内を清掃せられたが土地が土地だけに夫が却つて不調和なやうだ。極生眞面目に精忠無二でおはしました楠公御父子は何うして斯う陽氣に祭られ玉ふのか社の西三丁ばかり宇摩屋村にある小楠公の墳墓は雙幹になつた老楠が覆つてゐるので誠に崇敬の念を起させる將に

鋤きかへされんとした古墳に新たに碑を加へてこれを保存し得た大久保贈右府は眞に忠臣を知る忠臣であつた。是れにつけても私は嵯峨の藪蔭にある小楠公の首塚と相並んで我が骸を埋めさせた敵將即ち足利二代將軍義詮の心のうちが床しくてならぬのである。



濱寺公園

大阪といふ處は妙な處で折角公園の必要な市の中にはそれらしい物を一つも持たないで公園としなくつても誰でも遊びに行ける筈だとか住吉だとか此濱寺のやうな處を公園にしてそれを市の人までが誇りにしてゐるのは如何にも妙ではあるまいか私は濱寺全部が公園かと思つてゐたら來て見ると案外窮屈で何うやら別荘地の方が廣廣としてゐるやうに思はれた名にし負ふ高石の濱で元は天津まで一帯の青松白沙であつたのを時の縣令税所爲が盛んに伐採させたのを聞いて例の大久保内務卿

音に聞く高師の濱の松ヶ枝も世の浪風はのがれざりけり
と一首の和歌を認めて送つたので税所もはつと思つて早々禁伐の令を下したがために是だけの古松を存することが出來て遂には繁昌な

公園屋さへ開業される事になつたのだ。一基の歌碑くらゐでは人の注意も惹くまいから非美術的なる中之島公園の豊公の銅像に負けぬやう、一大銅像でも起して永く遺功を記念しては如何？まだ全國に大久保公の銅像はないやうだから。



金熊寺の梅

和泉は美麗な國である。住吉派の畫をそのまゝに見る國である。私は岡野半牧の故郷なるが故に、其の東道主人のもとに、和田風月とともに金熊寺の梅を尋ねた事があつた。汽車はまだ堺までしか通じなかつた時分、堺から車を列ねて紀州街道を貝塚まで行き、こゝで志貴氏に宿泊したが、其の沿道の風色を見つゝ、また戀知らぬ少女のやうな愛らしき媚を看取したのであつた。道々の里閭小驛もさうであるが、南朝の雄鎮として知られ、岡部氏の居城として聞えた岸和田も、來て見れば丈夫の氣はなく、初めて結つた島田と初めて撤つた肩揚とを羞かしかる娘のやうに、町のかゝりにもおほこい處がある。貝塚は尙以て膩粉の氣が多く、卜半の大伽藍が町を壓して建つてゐるのが、何か威嚇してゐるやうに思はれた。

翌日車行して根來街道を行く時、四つ池だの蟻通しだの、孰れも住吉畫中のもので、櫛井といふ村に塙圍右衛門や淡輪六郎の墳があるのが、何だか平仄が合はないやうに思はれた。金熊寺そのものは高地に據つて山を負ひ、何處にか密宗の寺院らしい森嚴な趣きを備へてゐるが、裏山を登つて一たび梅林に對すると、何うしても婦女の嫵媚が懷ばれる。梅は谷に沿うて漸次に麓に下り、川を隔て前山の松林に對してゐる。其の松林の赫い幹なり、緑青色の葉なりが、極彩色に描いたやうなのに、梅鉢の間に處々紅梅が點綴してゐるので、猶更傲霜の意氣に乏しく、麗姫の纏ふ模様ものゝ大振袖を見るやうにのみ感せられた。

當時の金熊寺梅鉢は漸く岨道に沿うて諸所に急造のベンチを取着けた位で、外に何等の設備もなく、口を濕すものごとくは、唯だ一人の村媪が密柑に錫瓶詰の酒と茶を商ふばかりであつた。私達は貝塚から食物を携へて行つたので、別に不自由をも感せず、寺から借りた薄縁を敷き

村媪に火と茶とを分て貰つて、幽香深き處に、口腹の要求を充たしたの
であつた。此の時間は餘り短くはなかつた。夫に午前から午後に涉つて
ゐたのに、探梅の客といつては、自分達の外に絶えて人影も見えなかつ
た。此の好天氣に、此の満開に、餘りといへば人は梅花に疎過ると思ひな
がら、爾う何時まで見て居られるものでもないから、切上げて歸途に就
いた。探梅としては誠に此の上もなく好都合であつたが、斯くまで閑却
された金熊寺の梅花には、何となく一翹の涙を溢ぎたいやうであつた。
樽井まで汽車の通じたのちは山火事を出し損ふほどの苦心をして
火を起す必要もなく、横枝花稀なる處には、必ず酒旗が翻へつて、現代
の羅浮の仙女が睡らぬ夢に入り來たる繁昌を來たしたとの消息があ
つた。花神のためには、孰らが満足であらう？

平野鑛泉

今の三矢印平野水を製造して居た川久保某から探蕈の案内があつ
た。西村天囚の誘引を受け、彼の平野鑛泉を見た事があつた。同行は
堀紫山渡邊霞亭で、池田驛へ下車すると、上司小劍が迎へに來て、池
田の町へは見舞すに、呉服橋を右に見て、道を網延川の左岸に取り、池
の町盡頭で川を渡つて、鼓ヶ瀧の奇勝を左に見ながら、能勢街道と分れ
て多田の方へ谷川に沿つて溯つて行つた。其處の路傍に、幸羅先生の碑
があつたが、石が磨滅してゐて、碑文の讀は下らなかつた。溪澗が逼つて
來ると、間もなく平野村の川久保採泉所に就いた。鑛泉は川中の岩の間
から湧出すので、其部分に鐵錆色になつてゐる。與へられた吊瓶で汲み
揚げて見ると、其れは少し茶色が、つた水で、口に入れると、少しく鹹味
が強いだけで、氣の抜けた平野水を飲むやうに、何の刺戟も感じなかつ

た。これを清澄して瓦斯を入れて壓搾すると彼の通り強い沸騰性を持つて服むと同時にげつぶが出るほど強く胃を刺戟するのである。此の川の上にも左側にもう一軒あるのが孔雀印平野水で當時は外國人の投資によつて成立つてゐたのださうな。

私達は鑛泉を飲んで息を繼いで、一氣に向ふの狸山に登つて香茸を狩り立てた雨が遠かつたので獲物は多くなかつたが、夫でも新しい染手拭を被つた赤い裨の村嬢達が熟した山路を經廻つて採つてくれたので大阪から持て來た鶏を煮たり、落葉を集めて焼いたりして、意地の穢い胃を満足せしめた上各自の手には一籠づゝの土産まで提げて歸つた。私は腹加減もあつたらうが、此時の焼松茸ほど美味で香氣の高いのを味つた事がないやうに思ふ。是も或は二杯の平野水の効能かも知れなかつた。

此の鑛泉は昔は温泉として湯治客の賑はつた事が攝津名所圖會に

も出て居るが温泉として外用する効驗と炭酸水として内服する効驗と孰與ぞといはいは、外用の内服に及ばざる遠しで今は平野水の名の下に寶塚邊まで採泉の手を擴げてゐる殊にオレンジだのサイダーだの各種の清涼飲料に應用されるやうになつては、黙々として鑛泉の湧出を拒まざる鐵錆色の古岩はいかなる優遇を與へられたであらう。



御影住吉

酒の芳醇なる御影一帯の地は、水が極めて清冽である。氣候が極めて温和である。春は他に先つて二十日も早く梅が開く如く、夏も他より二十日以上早く秋風が来る。寒に毛や綿を多く要せざるが如く、暑にも帷子羅衣の必要を認めない。私はこゝに八月の酷暑を過ぎた事がある。電車の開通に先つ三年ばかりで、今よりも土地はすつと静かであつた。其の家は海岸から町を隔てた新街道に面した田圃中の一軒家であつて、私はその二階四間を占領して、涼味を壘断したのである。

大阪も爾うであるが、瀬戸内の夕風といつて、日が没すると風がぱつたりとなくなつて、十時若くは十一時頃まで、晝間十分に搾られた汗を、また蒸々と搾らせる病は、西の方福岡邊まで、一般の慣例になつてゐる。灘目とても同じ瀬戸内であるから、此の病ひは免かれさうもないのだ。

が幸福なことには、夫が除外例になつてゐる。勿論朝から終日吹込んで来る紀淡海峡で壓搾された太平洋の涼風は、日没とゞもに一旦全く斂るが、吹込む風が止ると同時に吹き出す風が六甲山嶺を真蔭地に覆して来る。沖の風も何ともいへぬ涼しい力を以て居るが、山の風はより以上冷やかな或物を含んで来るので、行水の後には濡手拭が入るやうな事は、先づ滅多にないものとして宜しい。私が一月こゝに居るうちに、晝は一度も障子を外した事がなく、夜になると時には北の方を少しづつ、締めた事もあつた。夏の凌ぎ好いといふ事は、此一時で十分説明せられるであらう。

御影町は石屋平野御影から成り、住吉村は吳田住吉から成つてゐる。住吉川から石屋川の間を總稱して、こゝには假に御影住吉と呼びたい。御影住吉が多く大阪の人の住宅若くは別荘地となつたのは、餘り遠くない過去であつて、一つは阪神電車に促進されたものと思はれるが、私

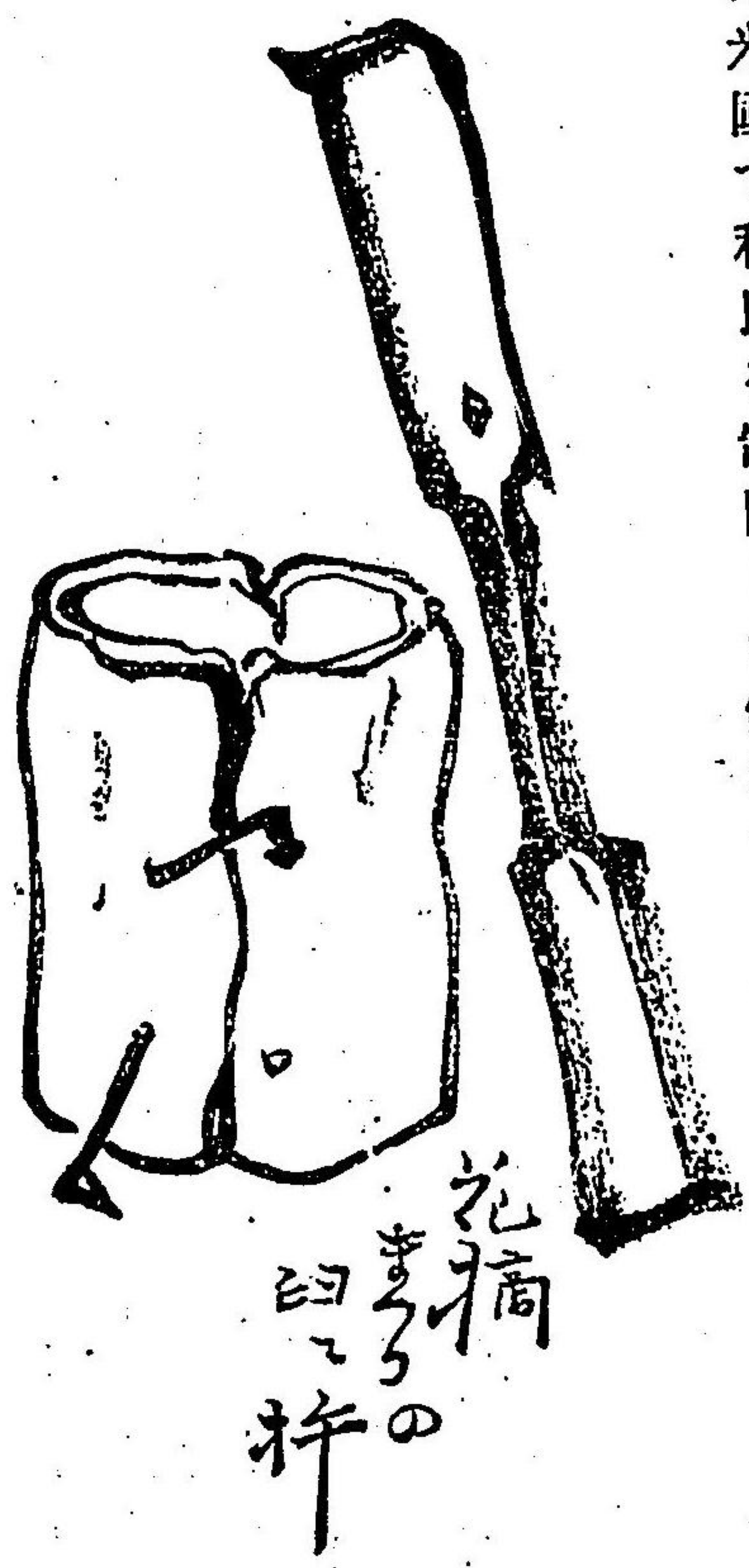
の居た時分には、有馬道から弓弦羽の杜までの山手にぼつりと別荘を建て、村山氏の香雪荘などもまた四圍の塀を繞らしたに過なかつた。弓弦羽神社の西には平野の池の上に、神戸の人の住宅があつたばかりで、夜は火葬場の火が寂しく無常を吐やいてゐた。町の海岸には、松方さんだの高屋さんだの、別荘があつたが、海岸は酒蔵の大きなのが並んでゐるので、沖から別荘の灯を、星のやうに望むまでには發達しまい。何にしても第一は山手、第二は師範學校前、第三は住吉川堤上と發達して行く順序だらうと考へてゐた。

住吉でも、御影でも、町は往來が狭いのに、酒蔵の間へでも入らうものなら、息塞りがして堪るものではないが、濱は高低があるのさへ構はなければ、偏見の遊歩場である。執方の堤防も、松が茂つて其下には常夏なごが咲てゐるから、こゝも運動には好い。殊に常には水がない川だから、競走ぐらゐの運動には、差支へがない。見る場所は爾う多くもないが、住

吉川方面に、雀松原の古跡がある。半崩れてはゐるが、求女塚もある。石屋川の西にある求女塚は、車式の全形を存してゐて、伊達千廣(陸奥伯父)の碑文も立つてゐる。もう一つはこゝには無いが、存つて居ればあるべき筈だ。夫から住吉神社や、弓弦羽神社も、心持のいゝ社で、石屋川を溯ると、八十八ヶ所の眞言寺もあるが、是は少し道が遠い。尤も今は電車が須度まで通じるのだから、少し車を借さへすれば、遊歩區域は何處までいも伸て、更に不足は感じない筈である。

酒は固より此處以上に良い處はないが、下戸にも土地の名物として、丁稚羊羹だの外郎だのがあつて、不自由も訴へまい。食物に就ては、最近の供給地として神戸がある。こゝで用の足りぬものは、大阪まで電話をかければ、濟む事で、食物に關しては、別に考慮を費す價はあるまい。私はこゝに居る間、此んな事を考へてゐたが、世間の人は私より、伶俐だ。黙つて、すんく實行して、今は立派な住宅地、別荘地となつてしまつ

た酒屋も今に鐵筋混凝石の蔵を列ねて冷蔵醸造をするやうにならう
 が爾なるともう百日の歌聲は聞かれなくなるだらう。
 この形勢は強ち御影住言ばかりでない西の宮も盛んに大阪人に制
 服せられ附近には會社の建た家も殖えて来て此の街道は長い長い住
 宅町とならずに巴ひまい夫でありながら大阪にも空屋が不自由だと
 はまさか米國で移民を制限した餘波でもあるまい。



花摘
 白杵の

昌隆社茗筵

茶と花とは十歳以上の男女に知らない者のない程盛んに行はれて
 ゐるが夫は抹茶と生花とである韻致の深い煎茶と掴み挿の瓶花とは
 多く研究する人を見ない昌隆社は骨董商の團體だが何時の頃から煎
 茶法に興味を持つたのか自然のままの瓶花に意を凝らして時に清雅
 な茗筵を張ることがある。一皮剥けば斯して調和を取つて飾り附ける
 と品物の品位が格別に上るものであるから斯して見せて二の返しは
 入札と來る言はゞ體の好い下見である。
 私は此の會に行つて飾附の美術品や文房具の安排を見るのも面白
 くない事はないがいつも感心するのは此の瓶花である挿た花の活き
 たのを示すために多くは盆栽を配置してゐる根のある盆栽と剪た花
 とを對照しては瓶花の劣るのが無論であるべき筈だのに多くの場合

が却つて瓶花の方に、自然の色と枝態の生氣との勝つたものがあるのだ。私は此の苦心と手練とが、少しも偽りのないのに感服するのである。斯いふ瓶花を見つゝ、適當に飾り付けられた席で、名器を以て茶を啜むのは、正に無上の清賞と言はねばならぬ。盆栽の老案、一樹園が二十ばかり此の瓶花を入れたのを見たが、多くの花から適當なのを選び取つて、少し曲を直すばかりで、花器の形と色とを吟味して入れて行く。夫が見てゐると、只突挿すやうに何の意をも用ひないらしく見える程。それ程彼は自由であつた。何うして爾いふ枝態なり、配置なりが、咄嗟に定るかと思ふ。尋ねると私の態は盆栽から割出すのですが、活き物と違つて死物は扱ひ好いものです。唯だ其の死物を真個に復活させるのが至難しいのです。と語つた彼は、無難作に死物に魂を入れて、瓶裏に復活し得るのである。此の昌隆社一流の瓶花は、時代に適應した裝飾術として、大阪の誇るべき特技であらう。

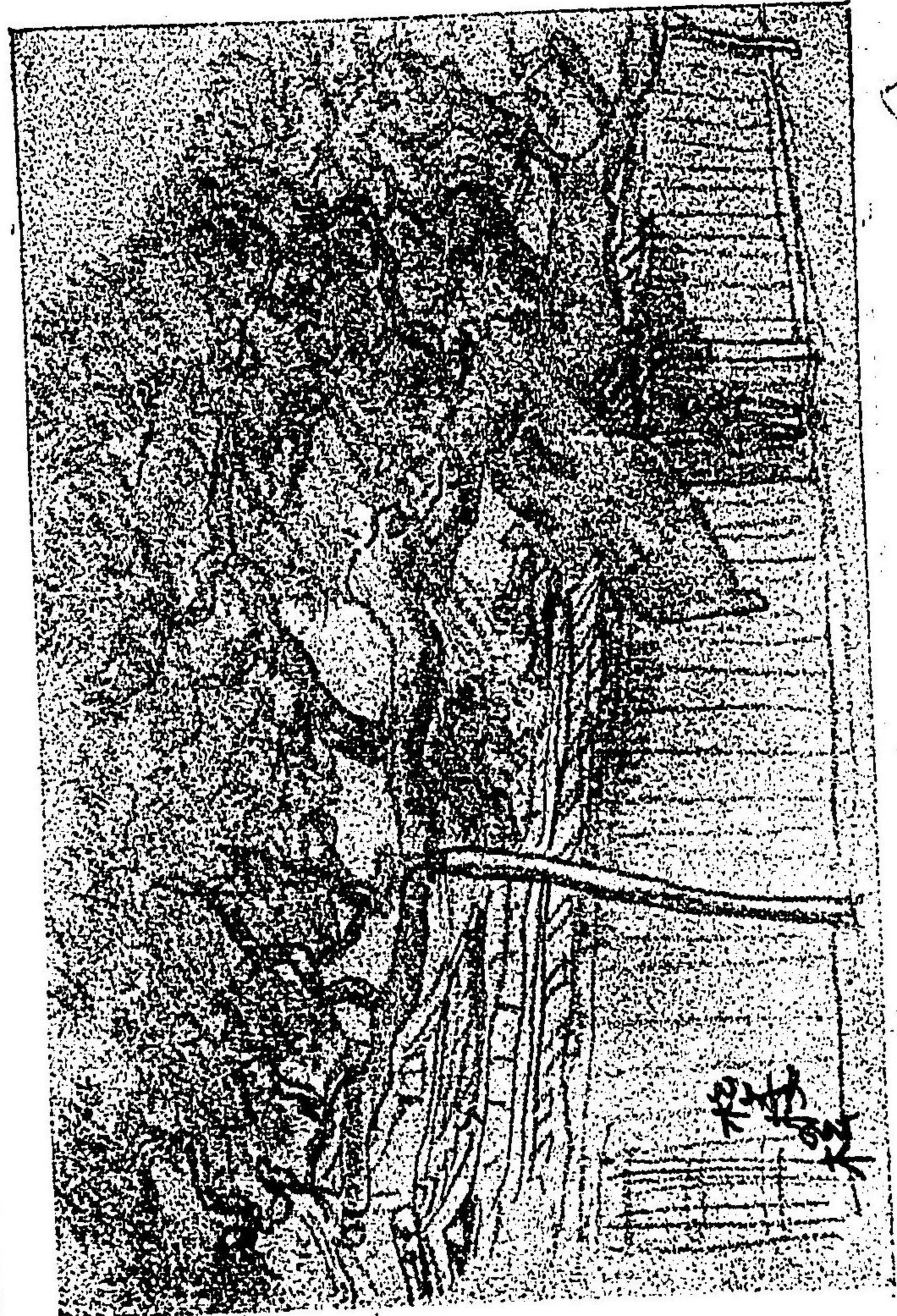
梅田の瞬間

十一時何分か、夜の汽車で、別れを梅田に告ぐる時であつた。親しい人は夜の更なるのも厭はず、プラットホームに列んで、今發せんとする私の列車を贈めてゐる。中には細君の爲に、娘の爲に送つて来た婦人連があつて、其清い眸には優しい涙が、泛んでゐる。伴の爲に送つて来た學生連は、元氣よく未來を語つてゐる。此の列車が運動を開始する刹那、誰の發聲によつてか、萬歳を浴せられた私も、之れに答へんとしたが、感極つて聲が出なかつたので、唯窓外へ頭を下げて、動き出した敷石の上には、僅かに一滴零れたものがある。それが私の大阪に残した十二年の謝恩の一點であつた。

十とせあまり三とせの春をすぐし來し

なにはに夢の宿にぞありける







有馬の湯

中澤弘光

有馬は山腹にある湯で、函根の蘆の湯のやうに、白い雲の底から硫黄の香が匂つてくるのだと思つてゐた。京の豫想は違つた。

三田の停車場から雪の六甲山へ向つて、平坦な道を二里半人力車で行くと雪が加つてゐる黒い松の様な小山の下に、白く屋根が段々になつて新しい別荘風の家なども見える。繁華な温泉場であるといふのに、氣がついた。白い六甲山脈が見えて、その麓にあるといふので、それが湯本の様にも思はれる。車夫の一人が

昨夜の雪ぢや有馬は五寸から積つてらと聲をかけた。
今日ら道が重たいな、上は積つとるな、なんば程積つとるえ、
吹きよせたら一尺もあるえ、景色がえ、わ、今すいとりますな。

と車夫のいふのを聞いてゐると橋を渡つて町に着いた。狭い坂になつた道の兩側に、空も見にくい程、二階三階の家が、軒々と建てこんで、伊香保に似てゐる温泉場であると思つた。細い露路のやうな所を入つて左の奥まつた三階の旅籠屋の前で車を下ろした。三階から雪景がいゝと云ふので、車夫は此宿を勧めたのであつた。

宿に着くと火を持つてくる。直ぐ炬燵をしてくれる。而して熱い湯で茶を飲ませる間も無く、白い猫が人なつかしい聲で、自分の膝にやつてくる。客の無い冬の旅籠は居心地のよいやうな氣がせられる。障子を明けて、屋根の白くなつてゐる。有馬の町を瞰下して見る。伊香保に似てゐる町の様子。小山に圍はれた底に、一かたまりになつてゐる。湯屋が一つ中心になつて、八方に露路のやうなのが坂になつて通つてゐる。六甲山から出る川が、一つ町の北側を流れてゐる。高い真白くなつてゐる六甲山脈が見えて、雪が斑になつてゐる。小山の裾に温泉場のこみいつた屋根と

其間に二階三階の欄干がいくつとなく見えてゐる小高い所に鳥居を見出して其横手が行基菩薩の本尊である温泉寺だと教へられるといふ水の音や犬の聲などが木霊に聞こえるやうな気がして雪の有馬は静で淋しい宿屋の二階や三階から隣へ物のやりとりも出来さうに建てこんだ温泉場も物干や欄干に赤い湯巻の一つも見えない何坊と名をつけたべにから塗の二階家は例の鳥籠式の窓格子と欄干のあるのが面白いのを見た有馬は古い歴史を持つてゐるといふので、天皇の行幸も秀吉も入浴にきたといふことが書いてある御籠で山越しをしてきた客が多かつたといふ十年前まではゆもじをした男女混浴の賑ひも見られ湯女が美人の揃ひで唄ひ弾き旅宿の送迎から浴衣の世話までもしてくれたといふ事だ今もある兵衛といふ宿には代々お宮といふ美人を置いておまきおつねお藤といつた様な評判の娘もあつたと云ふことだ正月二日は、この神官僧侶と宿屋の主人や前帯に結つ

た湯女達が行基の木像をかついでこの湯壺にもつけて而して

有馬やどや下から見れば白いゆもじ下帯結びさげ……

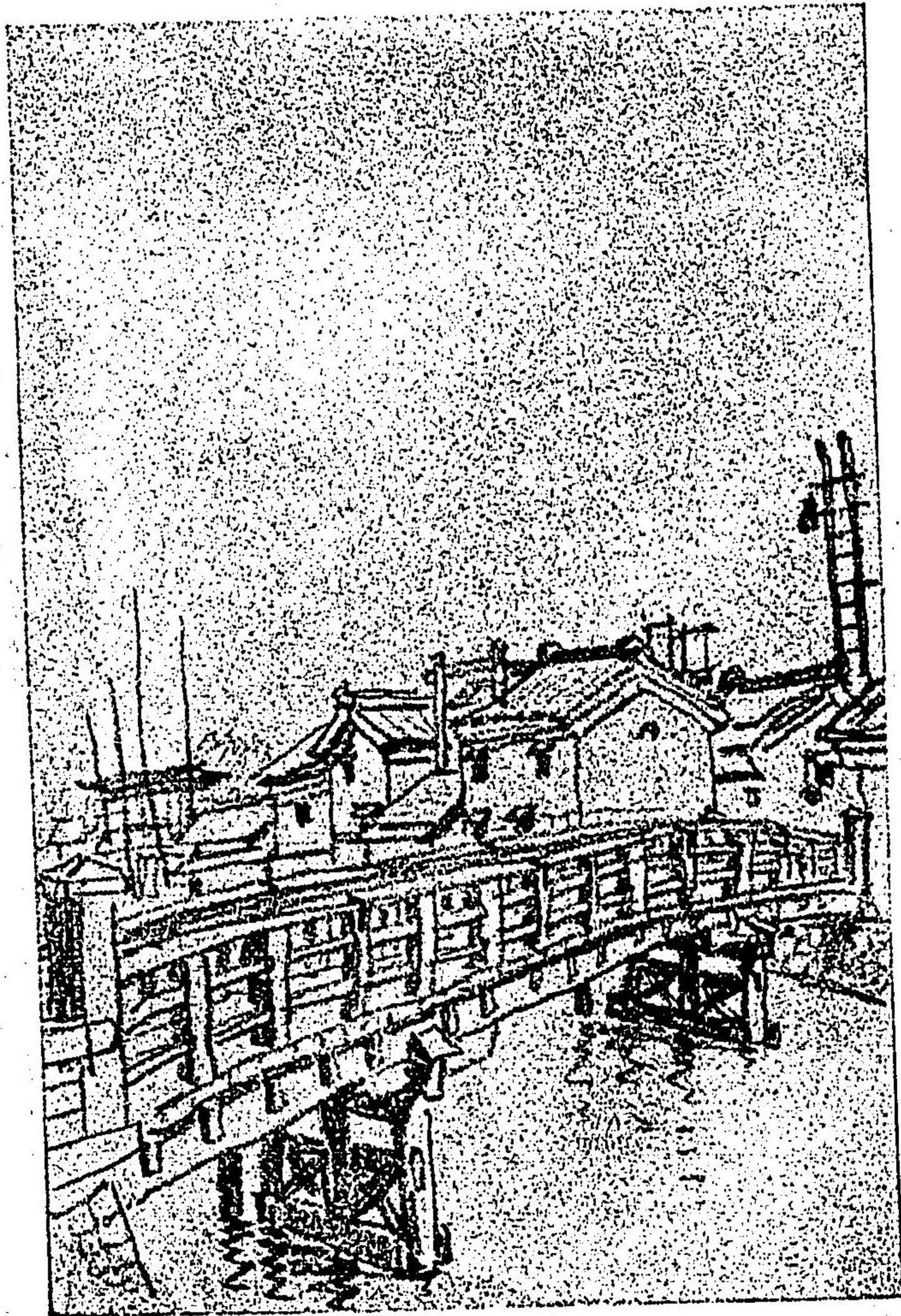
といふ様な有馬名所を歌つたといふ事だ今の有馬は東京の洗湯風になつてゐる共同湯と高等と名の付く湯屋とが唯二つで内湯の無い有馬

は温泉場の舊趣味がもう失せてしまつてゐる。

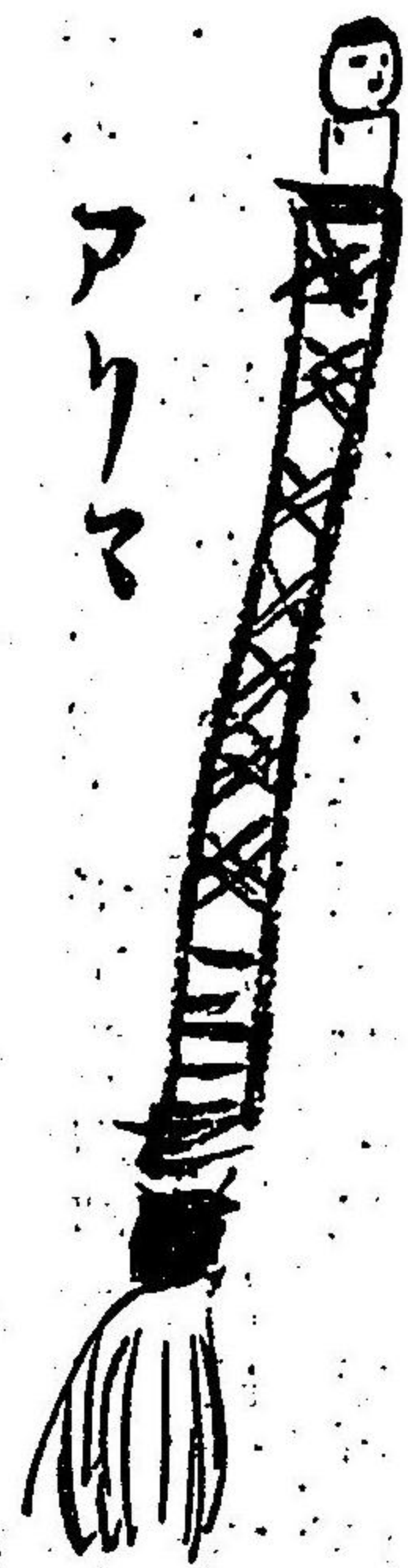
温泉にきて、女人禁制の男風呂で自分は髪洗ふ浮世繪と、ロダンの彫刻で見た女の脊のまるき曲線と而して口紅のうすい舞子の顔の事なごを思つて見た見た夜霧の深いロンドンの街カリエールの書の事なごも思つて見た而して風紀の取締といふのが、この温泉場の建築をも没趣味にして行くかのやうに思つた事であつた。

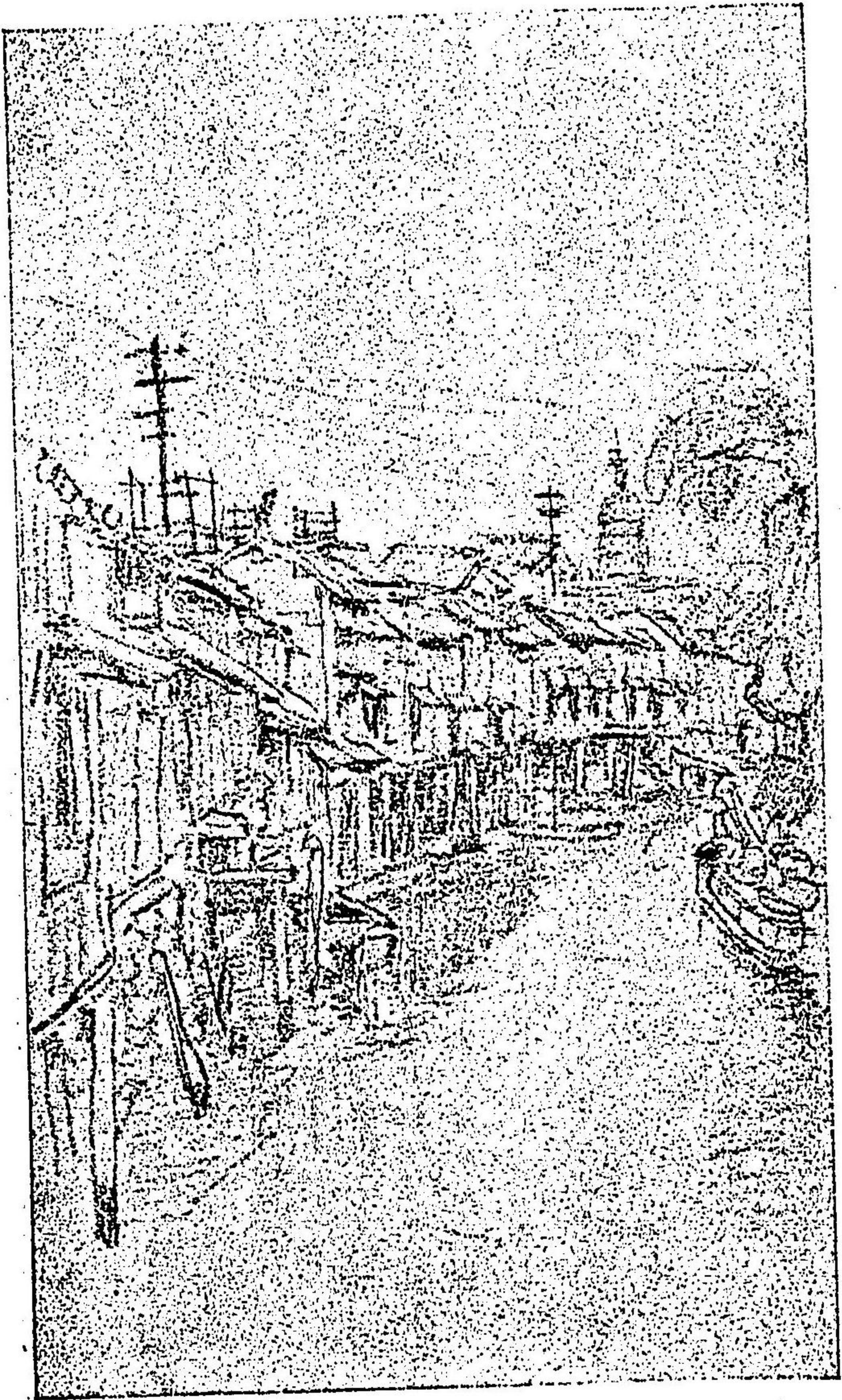
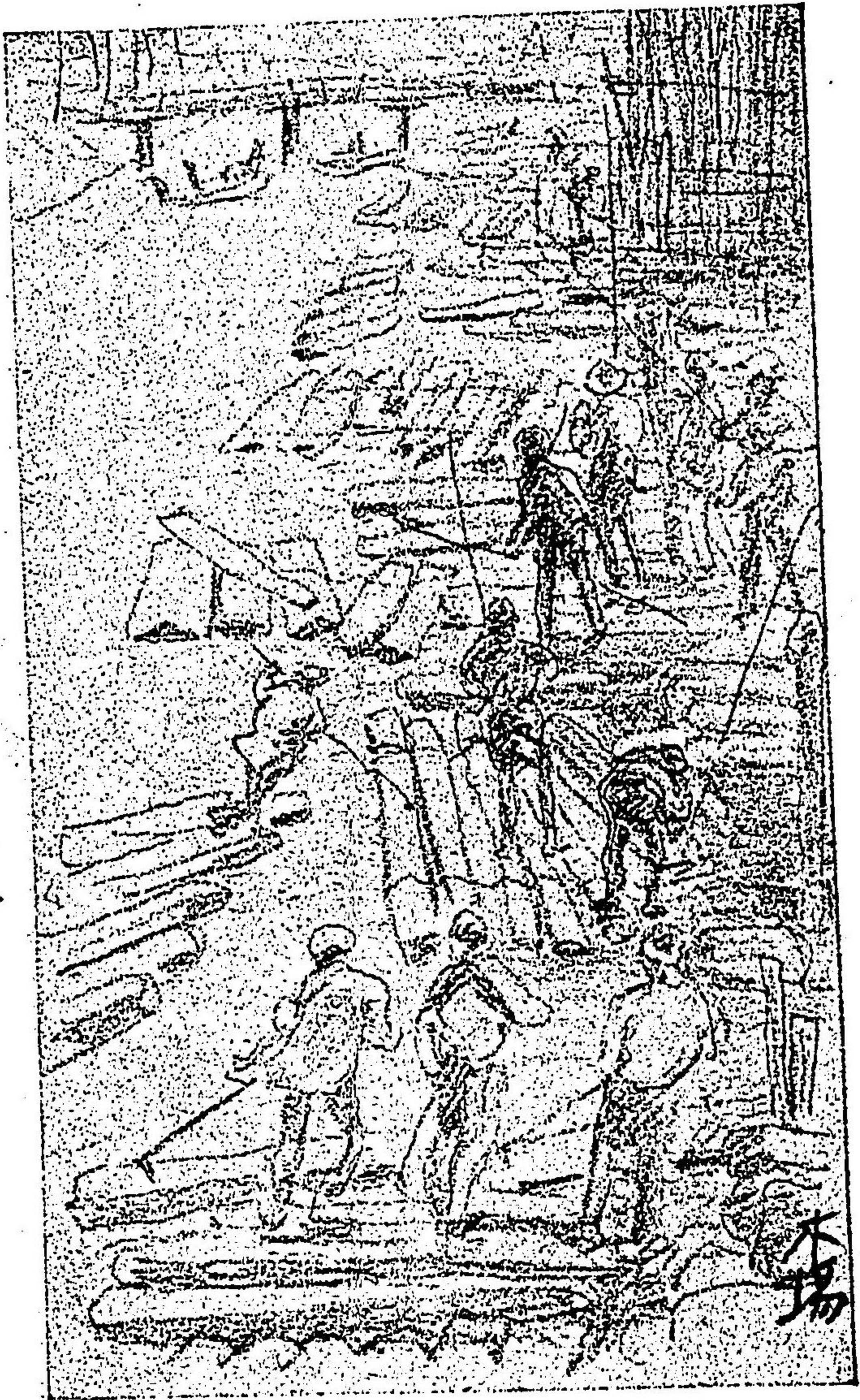
湯の町の夜に雪ふりてはたごる男二人は炬燵してねぬ

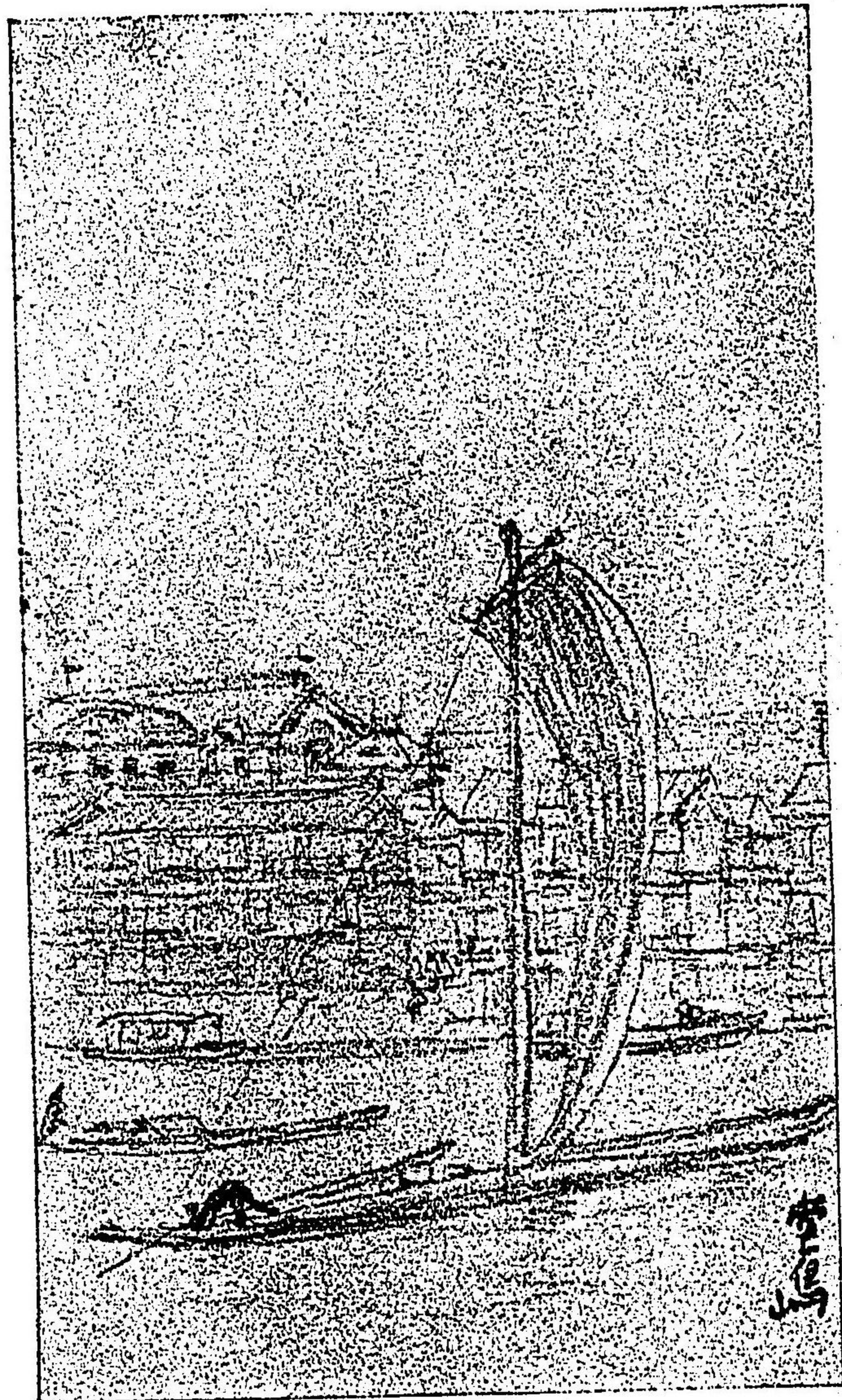
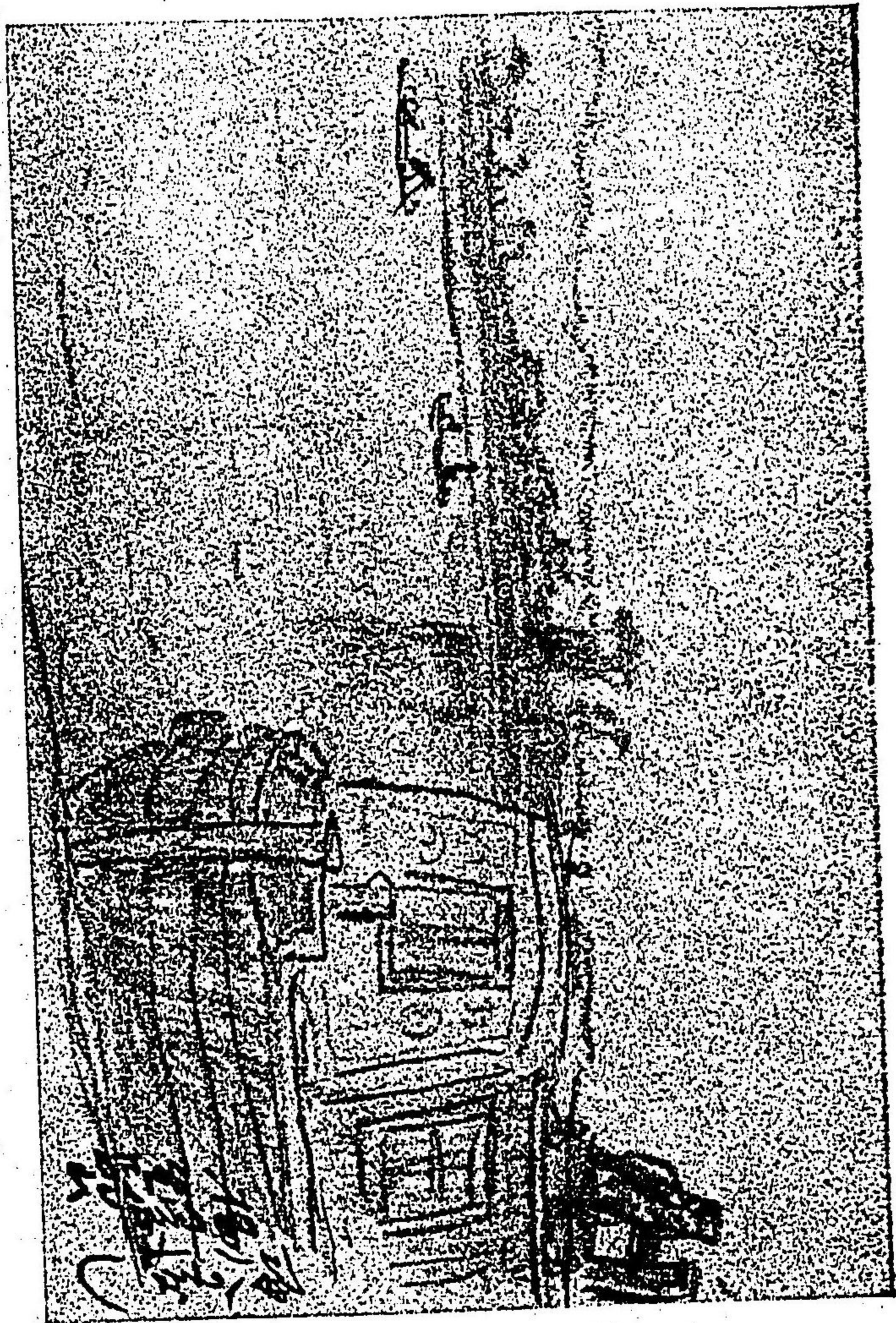
乙女子が椿の油海近き豆相の山の青き湯思ふ

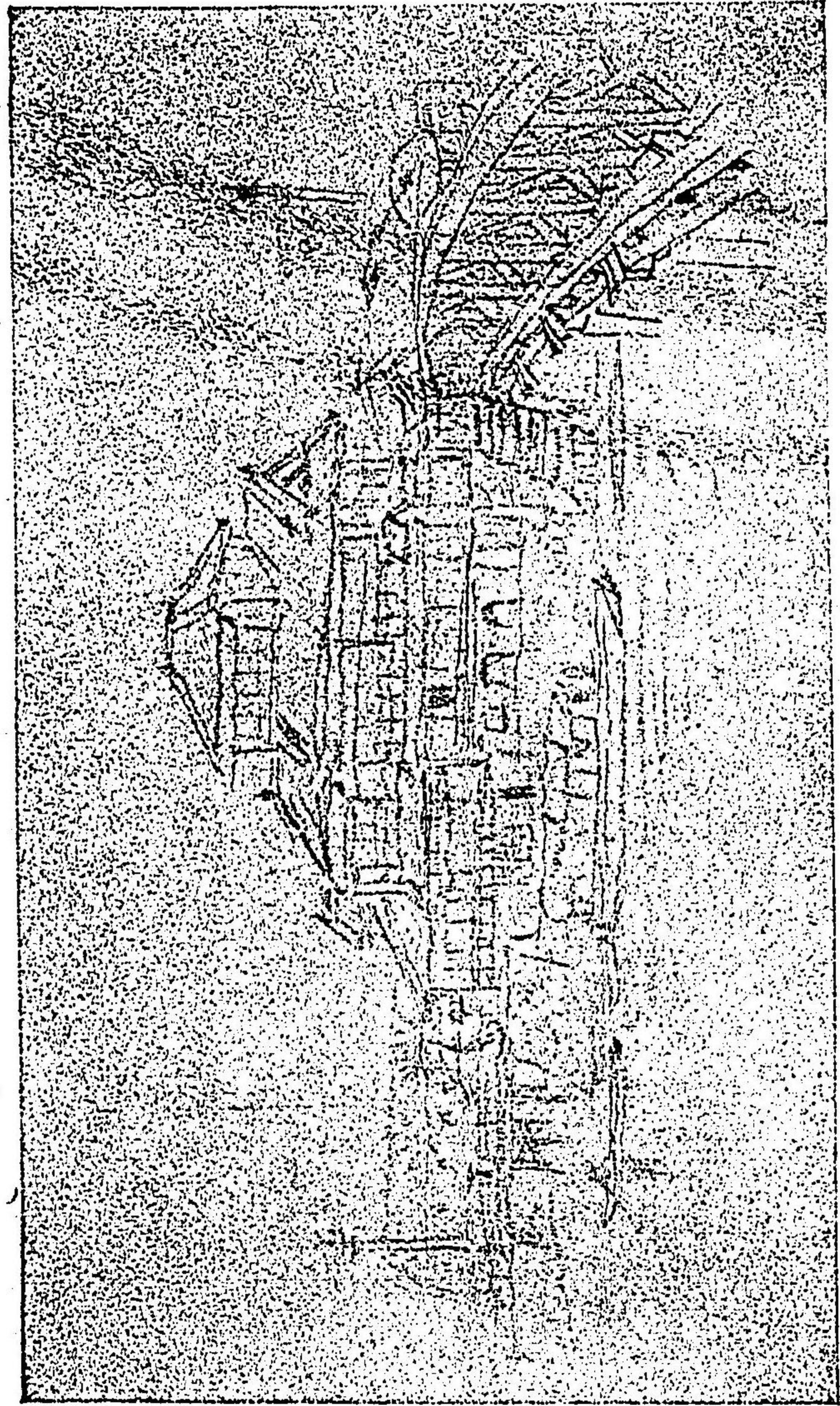
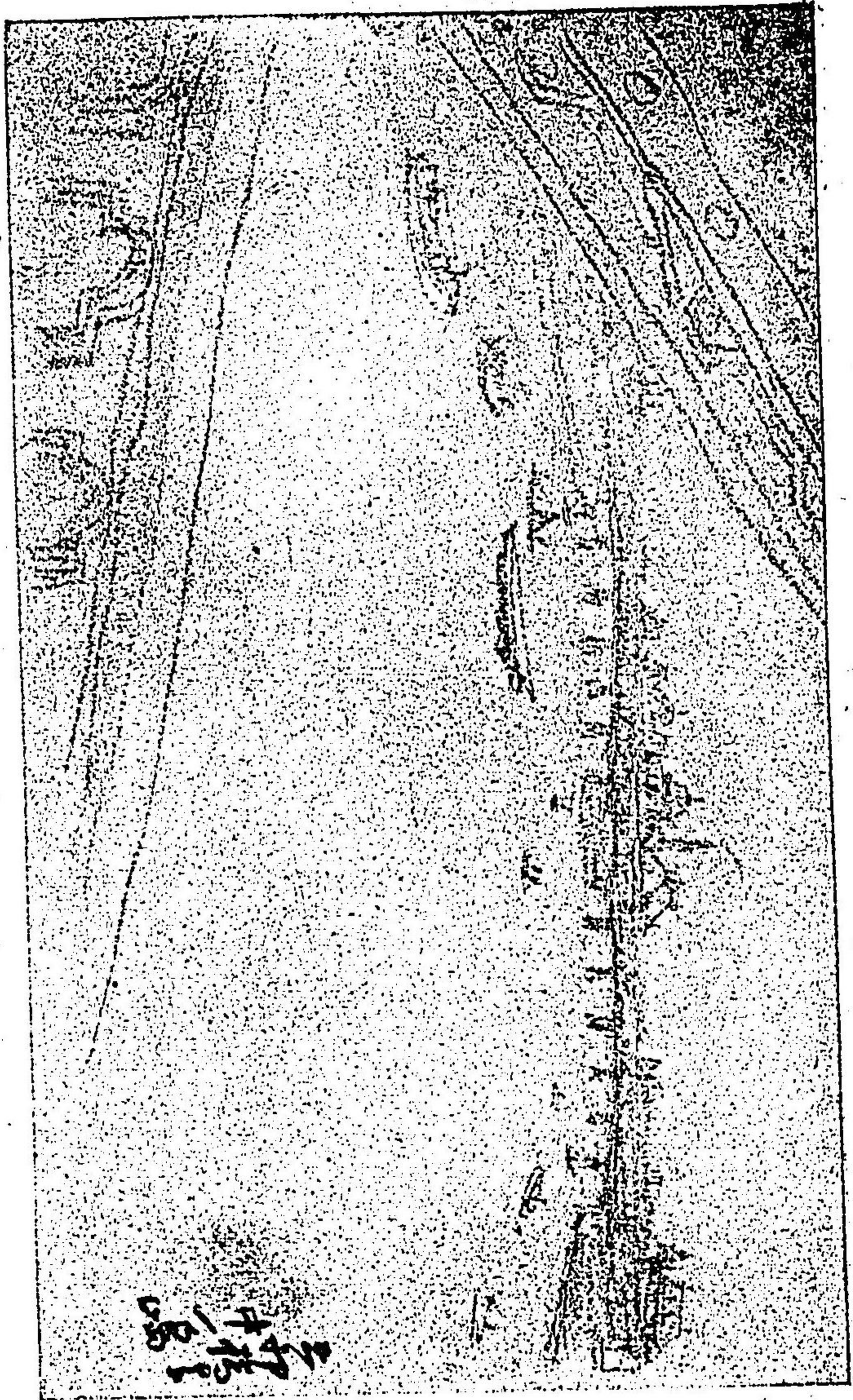


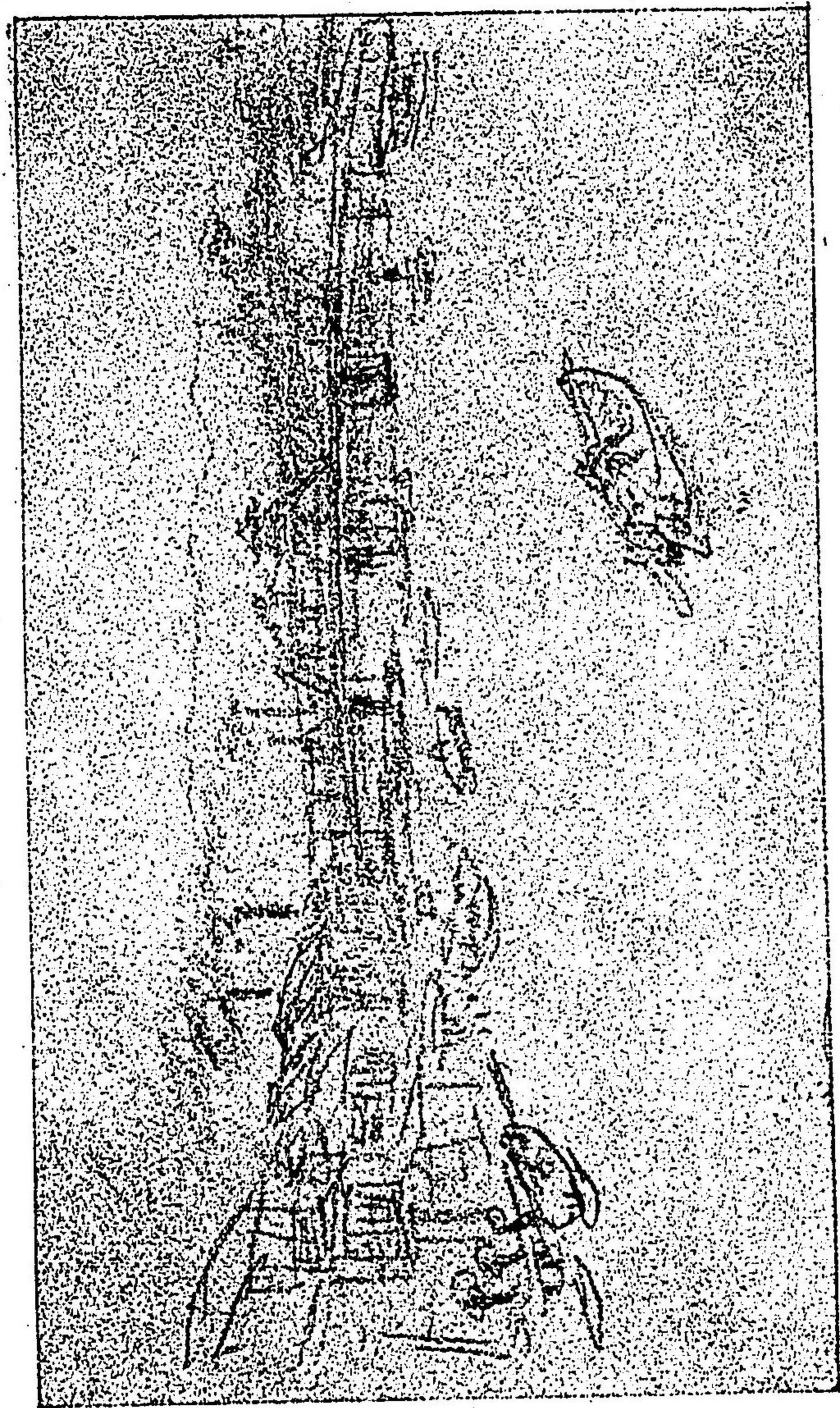
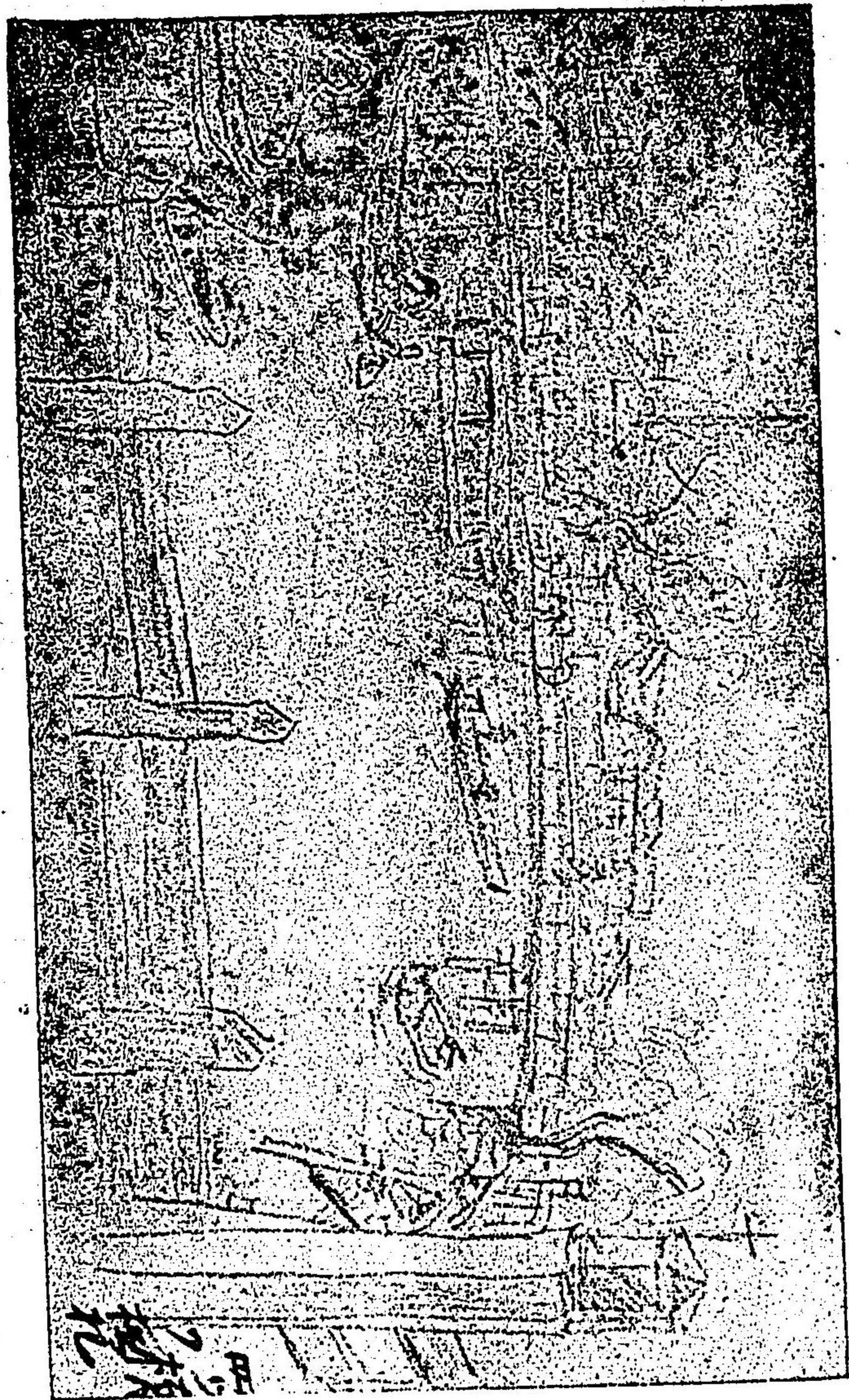
川中の浴槽のけふり旅籠屋の赤き夜着干す橋の欄干
 色硝子湯ふねに映り人の肌彩る風呂の窓明りかな
 種をつたひ窓近くくる鴉と山の湯瀧を思ひつゝ寝ぬ
 白き灯の大湯の中に女の脊まろきを見んと旅に思ひぬ
 雪の上にはすに夜汽車の火花散る枕の窓にねざめして見ぬ
 河ぞひの内湯にくると村乙女釣橋渡る伊豆の湯が島
 瀬に映る夫婦の二人河床の總湯のぞきぬ旅のたはむれ
 國根路か春の雪降る七湯を伊豆へ越ゆれば桃の花咲く

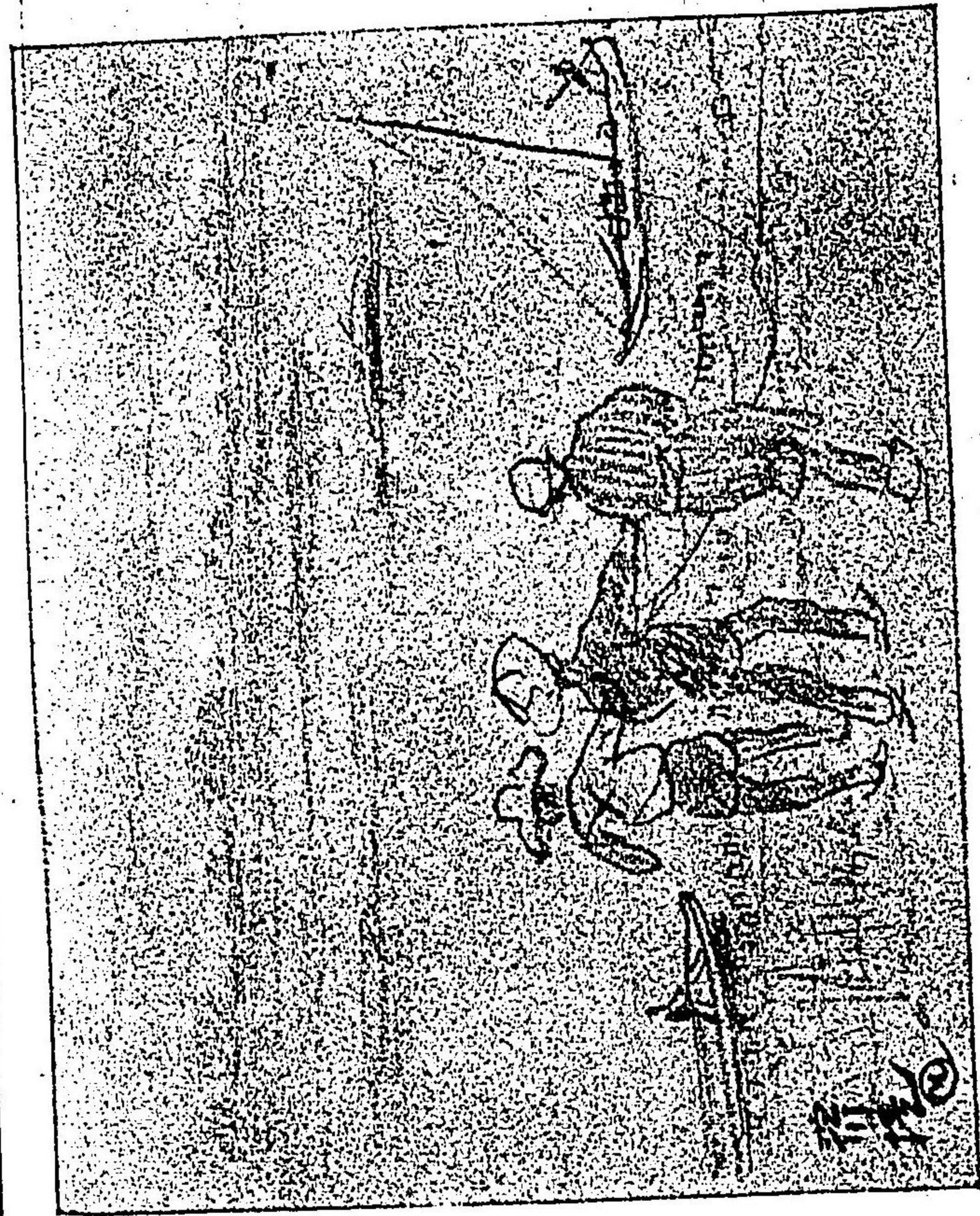












口
ふ
と
丹

堺の春

與謝野晶子

街の名を甲斐市熊野戎櫛屋車材木宿屋神明九間柳櫻錦綾旅籠半町
 と自分の家のある甲斐の町から北へから敷へるのを、お煙草盆に結つ
 た私は店の丁稚に致へて貰つた。丁稚の云ふのよりは早く間違はず
 にこれが云へるやうになつたのはもう殿馬場の學校へ行くやうにな
 つてからであつた。南へ敷へるのは大町宿院中寺地小林寺新在家旅
 籠半町と云ふのである。これは口關が悪くて丁稚も歌のやうには云は
 ぬのであつた。大小路の街の柳が焼鍛を當てた髪のやうにたわたわ
 とふうわりとした形ちになつた頃東の田甫の菜の花はこの古い街の

老いた子供とも云ひたい人達をぞそるやうな香を家毎に送つた。さうして女は皆天王行きの濱行きの割籠を造らされた。煮しめ竹の子の木芽あへ下の重には海苔巻が詰められる。去年萌黄風呂敷の重箱擔いで行つた丁稚が今年には瓢箪持ちの半元服の手代になつて居る。川尻や川端の街の人等は濱行きの連中を見て評判した。女の子に隨いて居る女中は皆緋縮緬の太いくけ紐を幾筋も持つて行つた。それは潮干の海にあるかないかの蛤を拾ひに降りる時の裾や袂をくくり上げる用意なのであつた。龍神橋を渡つて敷石をたらたらと下りて新地へ入ると左右から知つた茶屋の女が出て来て口挨拶をするのであつた。藝者も出て来る遊女も出て来る。海の風が櫻を散して旦那様番頭手代丁稚乳母女中の白い頸筋赤い頸筋をこそばゆがらすのであつた。

「歸りにきつとお寄りやはい。戸え舞を見せたげまつせ。」

嬢様はこんなことを新地の人に云はれて點頭して居た。橋をもう一つ渡る頃から嬢様は手代の背に負はれた。乳母や幾人かの女中は兩方から嬢様の機嫌を取つて歩いた。妙見様の山の下を通つて濱邊へ出ると繁いだ荷物茶船の船乗りが旦那に聲を掛けた。車でこの道を往來する人を。

「野暮くたい人や。」

と連中の者は皆云つた。濱の掛茶屋で嬢様が舞をする時見物に来る濱行きをしに來て居る見知り越しの町の人と連中同志は極めてすました挨拶を仕合ふ。乳母などは越路が文樂の土間棧敷を見るやうな顔をして居た。何助何七が流しの技紀伊の國を踊り飯焚男の何三が喜仙を踊つてやんやと云ふ聲を連中が上げる頃にはもう旦那は目をどろどろさす程に酔つて居た。それでも仲居の絃で、さかあいすみようし、

なご歌ふのであつた。燈臺に灯が點ると船の人が急に陸を戀しく思ふやうに濱行きの連中はその青い光から逃れるやうに東を向いて歸るのであつた。貝細工店で番頭に紅と紫と黄の色を附けた貝を嬢様は買つて貰つた。紅の好きな事は云ふ迄もないが嬢様は力彌の著る振袖の着物の色のやうな妹背山の久我の助の房々とした髪の色をしめた組紐の色のやうな紫の貝が好きであつた。黄いろいのは厭また色の附いてないのも乞食の貝だと云つて嫌はれた。街へ入ると男も女も、

おさかの踊りにおまけなえ負けてお腹をお立てなえ。
と云つて踊つて歩くのであつた。

住吉祭

海邊の方ではもう地車の太鼓が鳴つて居る。横町を通る人の足音が常の十倍程もする。子供の聲甲高な女の聲などがそれに交つて朝湯に入つて居る私を早く早くと急ぎ立てるやうに聞えた。此處に近い土蔵の入口に大番頭が立つて、

「真鍮の大の燭臺を三組中を五組銅の燭臺を三組大のおらんだの皿を三枚大のおらんだ皿を八枚錦手の皿を三十枚やまんの皿を百人前青磁の茶椀を百人前朱の吸物椀を百人前煙草盆を二十それから煎茶茶椀を百人前」

と中に入つて居る手代に手びかへを讀み聞かせて居る。

「墨二墨敷位の蛸がなあ砂の上を這ふてましたのやらうそしたらら傍に居た娘はんがびつくりしやはつてさやつと云やはりましたん

だすせ。」

「ほんまだすか。」

「眞實にすともうはばみのやうな大きい鱧もおましたで。」

「まあいややこと。」

井戸端で昨夜の夜市を見て来た女中が外の女中とこんな事を話して居る。時々思ひ出したやうにこほろぎが鳴いた。湯から上ると縁側の蒲筵の上に鏡臺が出してあつて化粧役の別家の娘が眉刷毛を水で絞つて待つて居た。青い楓の枝に囲まれた泉水の金魚を見ながら、頭の白粉を附けて貰つて居ると近く迄来た地車のさしむ音がして、

牡丹に唐獅子竹に虎虎追て走しるは和藤内

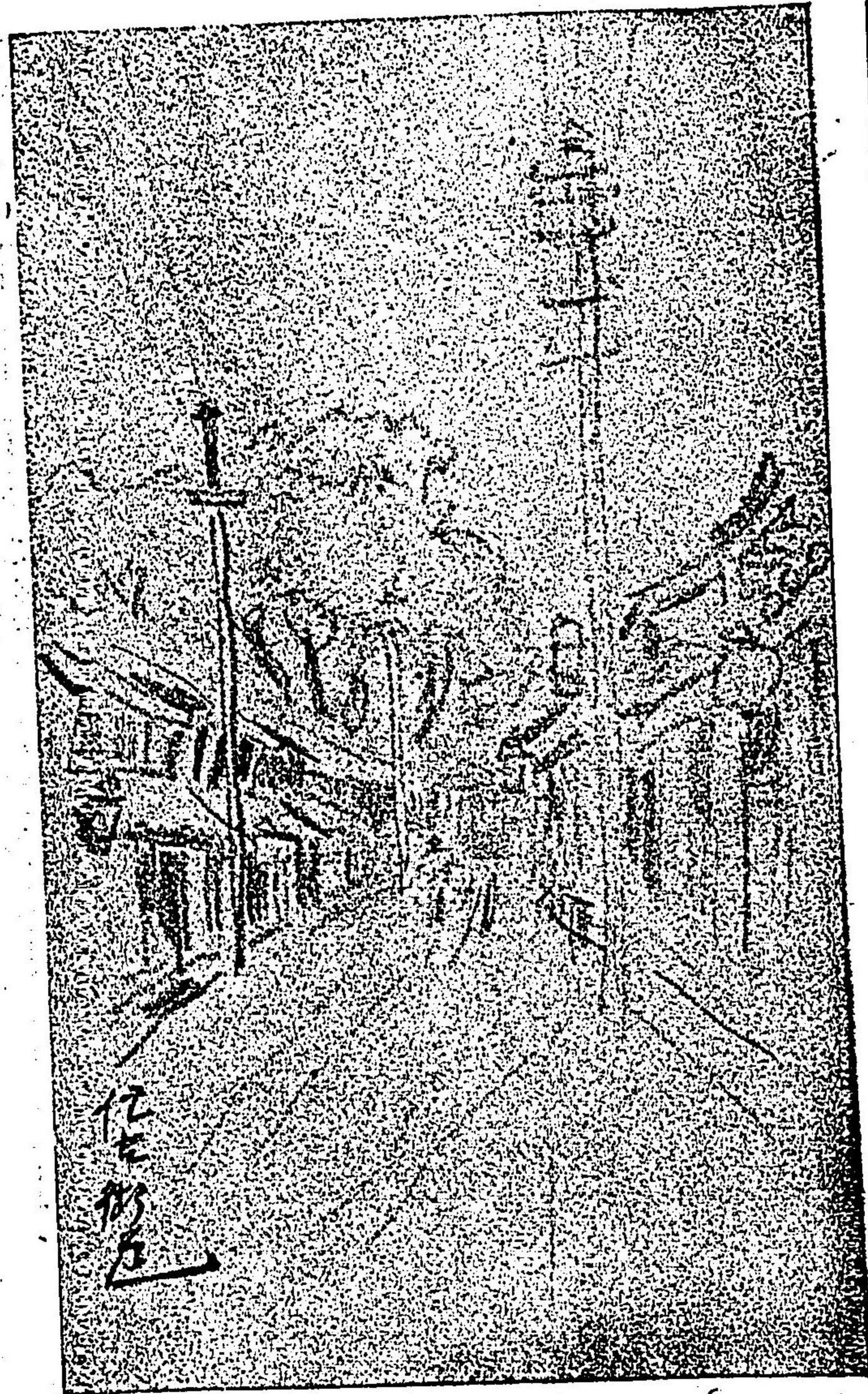
こんな歌も聞えて来た。さうすると三つの井戸の金滑車がけたたましいい音を立てて地車の若衆に接待する砂糖水を造るので家の中が忙しくなる。

「旦那様ありがたうおました。御寮人さんありがたうおました。」

その世話人が四五人家の中へ入つて来て父母に挨拶をした。揃の浴衣に白い縮の股引を穿いて何々漬と書いた大きい濫團扇で身體をばたはたと叩いて居る姿が目に見える様である。白地の明石縮に着更へると別家の娘が紅の絹縹の帯を矢の字に結んでくれた。塗骨の扇を差した外に桐の箱から糸房の附いた絹團扇を出して手に持たせてくれた。店へ行く廊下を通る時大きい銀の薄のかんざしの鈴が鳴つた。菊菱の紋を白く抜いた水色の麻の幕から日が通つて金の屏風にさらさらと光つて居た。從兄と兄はその前に置いた碁盤で五目並べをして居るのである。將棋盤の廻りには十人程の丁稚が皆集つて居た。花毛氈の上であるから並んだその白足袋が美しく見えるのである。九谷焼の花瓶に射干と白い夏菊の花を投込に差した中から大きい虹がうなり聲を立てて飛び出した。紅の毛氈を掛けた欄干

の傍へ座ると、青い紐を持つて来て手代が前の幕をかかげてくれた。向ひのおてるさんが待つて居たやうににこやかに目禮をした。道の人通りが多いで常のやうに物を云つても聞えさうではない。水色の透綾の長い袂と黒い髪が海から来る風で時々動くのが見えるだけであつた。水屋が彼方此方で大きい聲を出して客を呼んで居る中へ屋臺に吊つた太鼓を叩いて菓子賣が来た。辻に留つて背の高い男と、それよりも少し年の上のやうな色の黒い女房とが聲を揃へて流行歌を一曲さり歌つた。ごんごんとその跡でまた太鼓を打つた。欄干の前に置いた大きい床机の上で辨當を開く近在の人もある。和歌山の親類の客を迎へに停車場へ行つて居た番頭が真先になつて七八臺の車が着いた。紹の紋附を着た裏町の琴の師匠が来た。和歌山の客は皆奥で湯に入つて居るらしい。杯盤や切すしを盛つた皿が持つて来られて父も母も客も丁稚も皆同じやうに店で食事をした。通る地車の數

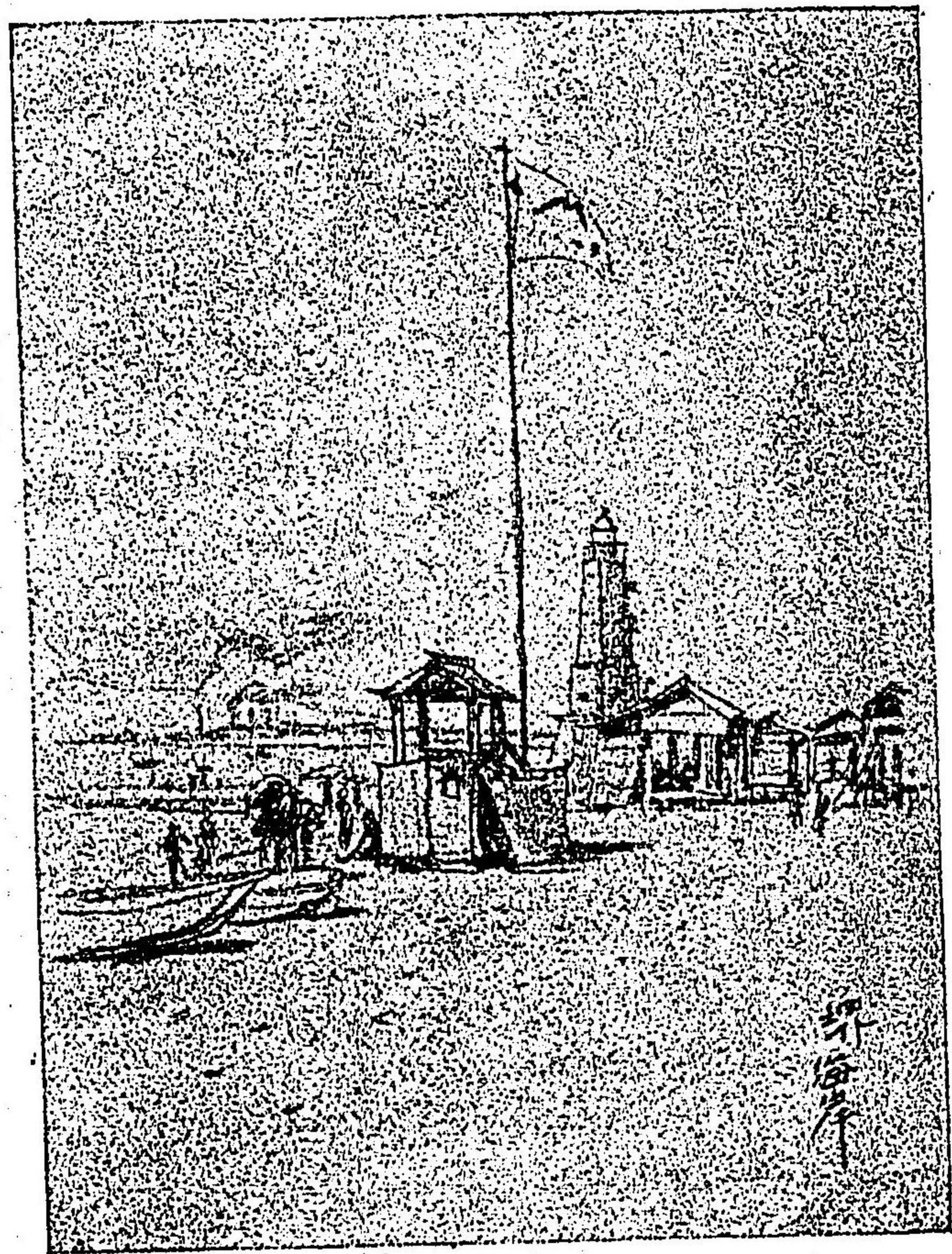
が多くなつて砂糖水はもう間に合はないで奉書包を扇に載せてその世話人達に番頭は配つた。橋の上に立つて大きい目をした張飛だの加藤清正だのの地車の彫物を和歌山の客は珍さうに見るのであつた。「とても和歌祭にはかなひまへん。」と父はその人等に云つて居る。街々の祭提灯に火が入るまでに私は三度程も着物を著更へさせられた。行列の太鼓の音がほのかにすゝると家中の人が皆欄干の處に集る。この家が船であつたなら一方の重味で覆るであらう。猿田彦が通り美しく化粧したお稚兒が通り、馬に乗つた禰宜が通り、神馬が通り、勅使が通り、行列は終ひになつたが、神輿はまだ大和橋を渡つたとか渡らぬとか群衆が云つて居る。黒い波のやうになつて道を通る人は皆南の方を向いて神輿のお旅所の方へ行くのであつた。濱の方からは神輿の迎へに開運丸住吉丸など船の名を書いた旗を持つた若者が幾人も幾人も走つて来る。四五町

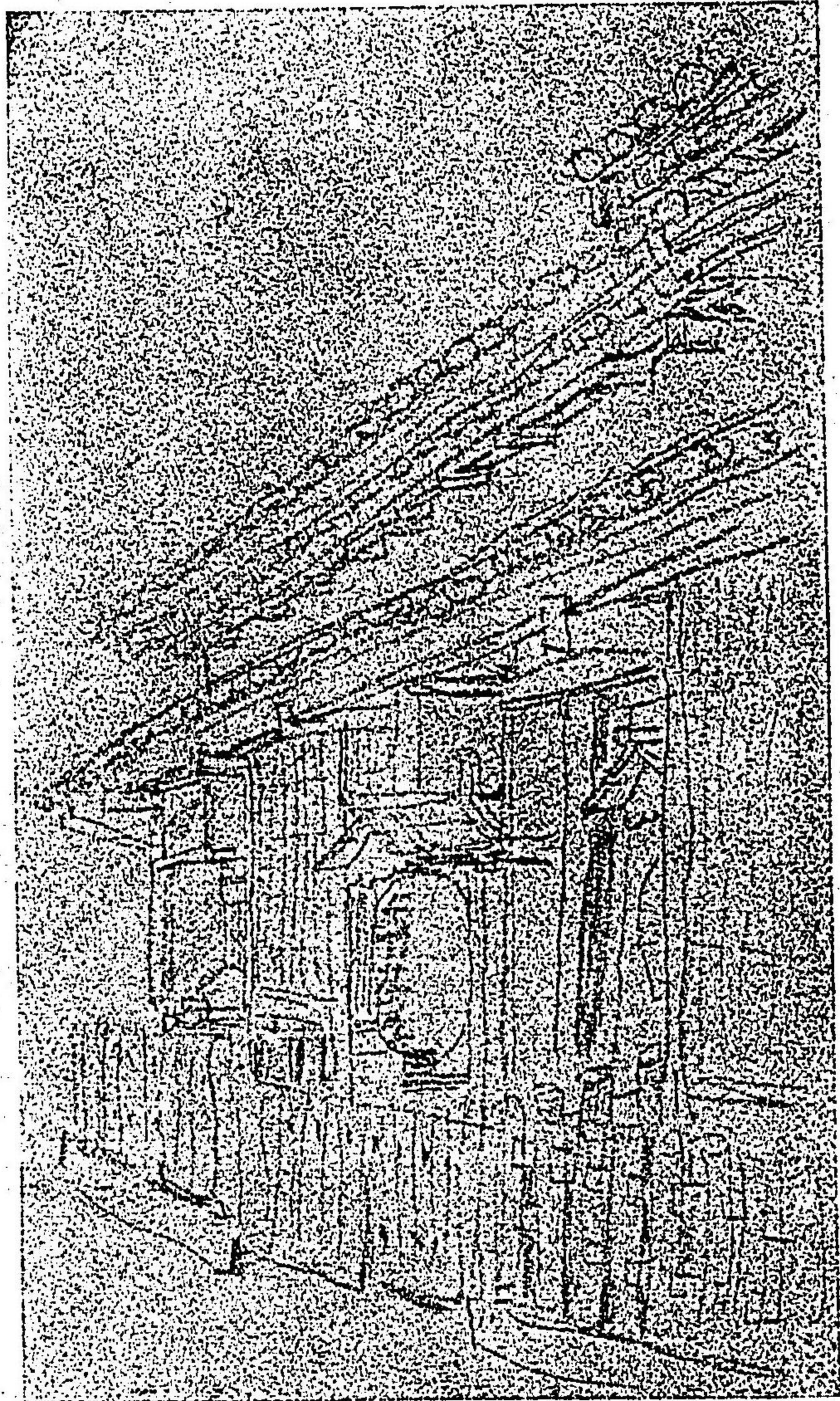


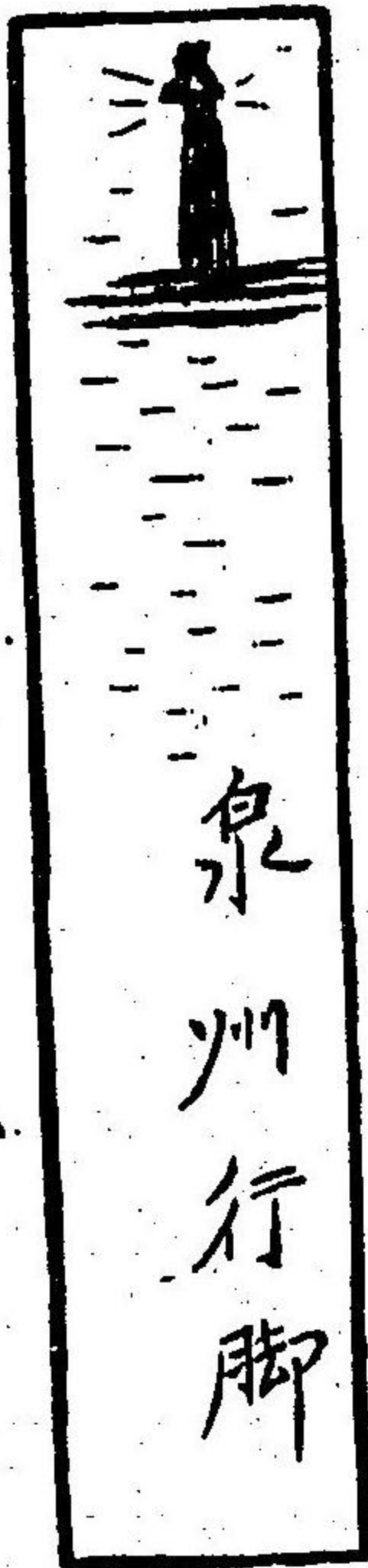
仁
徳
在



先へ神輿が来た頃から危ながつて道端に居る人が皆店の上へ上つて
来るのであつた。幾千の弓張提灯の上を神輿が自然で動くやうに見
えて、四方に懸けた神鏡がきうきうとして通つた跡二三分で祭の街
は死んだやうに静かになつて、海の風が藻の香を送るのであつた。







泉州行脚

如是法師

(一)

これは行脚の僧ちや尤も頭には蓬々毛が生えて經文半卷誦じた
こともなく生れて此の方未だ嘗て南無と唱へるやうな悪い事をした
覚えのない僧ちやが元來頭に毛がないで僧侶ちやと威張れるならダ
ルウキンなども種の起原を書いた頃は立派な僧侶ちや又經文を讀ま
ぬから僧でないといぬかすなら釋迦如來が僧でない釋迦が何時妙な節
をつけて經文を讀んだ子曰くと云はねば儒者でないなら孔子サンか
士臺儒者でない譯ちやマタ南無と唱へたから僧侶ちやといぬかしたら
情死をする男女は片端から僧侶ちやらうが山僧は頭に自然と生へる
毛は自然に委して生やして置くちや腥坊主の剃刀に剃らせる位なら

(274)

臺灣坊主の何やらいふ虫の舌に舐めさせます哩無理やり經文を唱へ
といふなら外面如菩薩内心如夜叉位は唱へもせう夫れでも僧は僧ち
や又盡十方無碍光如來は斯く申す儂自身の事と心得居るで己が名を
己れでは呼ばぬ理窟で嘗て南無阿彌陀佛と申した事も無いのちや。
斯やうの大徳ちやによつて此の炎暑九十何度とやらいふ空に平然
として行脚に出掛けるのちや坊主共は夏行など稱へて夏は百蟲繁
殖の時ちやで野山を歩けば自づと蟲けら共を踏み殺さねばならぬで
知らずく殺生戒を破る事になるから庵に退込んで居るちやと釋迦
が云はれなんぞと申すが飛んだ落嘶ちや印度の夏は日本の夏どころ
ではない今日は百度ちやで大分冷りとするといふやうな次第ちやか
ら到底炎天に坊主頭を曝らせる譯のものちやないで退込んで居るの
ちやが坊主が書生共のやうに暑中休暇をやるといふたら聴えが悪い
で蟲を殺さぬ爲めと附會たものちやお釋迦さんは間違つた事は爲な

(275)

んだが、何うでも能い理窟などは時々出鱈目を言はれた、だから死ぬ時には己れは何にも言はなんだと始めて眞諦を道破された天地に口も舌もない如く釋迦にも口も舌もないのちや生前吐いた無駄口は一切取消ちや今の坊主共は其の無駄口に妙な節を附けて大汗で我鳴り立て、居る阿呆の骨頂でないか、山僧が經文を讀まぬに無理はなからうかの……話が岐路へ參つたで、山僧は此炎暑に紀州路の行脚を思ひ立た、きついコツチャなごいふ奴もあるが近頃盲目が富士山へ登つたさうちや、目明が平地を行くに何がきついコツチャ。

(276)

問。群盲登富嶽。作麼生。

云。脚底踏邁。黑沒焮地。

問。覓什麼物。

云。天上天下七百分。

何と禪味がお座らう……何うも話が餘事に亘つてならん、手取早く

申さうなら、月の十九日と申すに、天下茶屋の山莊を啓行いたした尤も其前一寸問題が起りかけた。と申すのは、此頃山莊の隣に恐ろしい盜賊が棲んで居つて、警察から偵邏とやらが參ると逸早く風を食つて逃げ失せて仕舞つた。そこで山僧が此度少しの間行脚に出ると申すと留守のもの共が兎角怖ろしがる、依つて山僧は申した事ちや、當世に生れて盜賊が怖ろしいなど、申すのは、御一新前に生て武士が怖いと申すやうなものちや、昔は武士でなうては男で無かつた、今は盜賊でなうては紳士でないと申すではないか、盜賊と云れるが嫌さに腦天を撃ちぬくやうな小膽物は物の役にも立たぬさうな、ハテサテ怖ろしい……で、は無い怖ろしうない事ちや、隣家の盜賊などは親類同様に心得べきぢや、代議士といふものを見る、盜賊と肱を押し合つて居つたではなにか、盜賊が怖ろしうては代議士にもなれぬ哩と懇々説き戒めてやつたで、漸く納得し居つた山僧も安心して、愈紀州路へと志したわけぢや。

(277)

兎角して天下茶屋の山莊を罷り出た事で御座る朝露を踏んでぶらり／＼と参る心地は電車に飛昇りをやつて驛夫ごもに叱られながら毎日大阪へ通ふ心地とはまた格別ぢや驛路の人家は煙に鎖され紹鴨の森も眠たげぢや。

安倍野には山僧等の教科書の著者が二人ほど住んで居る。一人は北島親房先生今一人は吉田兼好先生ぢや神皇正統記や徒然草は山僧等の小學讀本ぢや今では教科書と申せば文部省から月給を貰うて居る役人が横文字を堅に書き直したもののことぢやが昔の教科書は堅のものを堅に書いたものぢや而も希代の聖賢乃至一代の豪傑が心血を傾け盡したものぢや月給や原稿料の仕事ではない親房が戦の庭に在つて愛國尊皇の大義を道破されたものが神皇正統記ぢや一國の騷亂を知らず顔に哲學書などを書いて居た西洋のカントやら申す學者も一

見識ある男ぢやが知らず顔をして豪らがるは樂な仕事ぢや鐵火に命を委して大義を千載に唱ふるのは命がけ以上の仕事ぢや今時の伶俐者は折には安部野神社に詣つて社前の白砂を戴いて煎じて飲むが好いのぢや兼好法師に至つては滑脱洒落心の誠を傷らすして一身を全うしたところは常人の及ぶ詮義ではない色好まさらん男は玉の厄底なきが如しなごと申して師直の爲めに艶書の代筆をやつたは少々困るが西洋には祖父や親父のラヴレッターを集めて書物をこしらへる子や孫もあるで今日から兼好を咎めるには及ばぬ此の兼好の召仕の命婦丸と申す子宮病の丸薬のやうな女があつた其故郷が安部野ぢやつたで兼好も此處に隠棲して居つたと申す事ぢや兎も角山僧の先師が二人まで此處に因縁があるのぢやから……イヤ今一人山僧に因縁のある女性が御座る小野の町と申した者ぢや一寸變り者ぢやつたが花の色はうつりにけりなぢやとか誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

ぢやとか申すやうな歌を詠みよつたで山僧も見放した其墓が此邊にあるといふ事ぢやが何うでも構ひ申さぬ。

道がえらく埃深うて火鉢の中を歩むやうぢやこれに雨が降るときろくになる懐中汁粉といふのはこれから思ひついた發明ぢやらう。潰し餡の汁粉を田舎汁粉と申すなら乾餡の汁粉は國道汁粉と申すべきぢや其の道路を観て其の文明を知ると申す事が御座る此の乾餡汁粉の國道を観ると日本の文明も随分と甘いものぢやと合點が參らう。戀て住吉ぢや毎度參つたによつて此度は素通りぢや此處の公園の松原を山僧は萬葉にあられうつ飯松原住の江の弟日娘と見れどあがぬかもとある其松原ぢやと思つて居つたが聴けば飯松原はもう跡方もなくなつて今の公園の松原は只の松原ぢやさうなまて見れば同じ萬葉に住吉の岸によるといふ戀忘貝とある其貝なども跡方のある事ではあるまいと思つて名物を賣る家に一寸立寄つて忘れ貝はあるか

と尋ねるとオマヌというて怪しげの貝を差出した戀忘貝で無うて戀を思ひ出しさうな貝ぢやこれは忘れ貝ではあるまいぞと申すとイヤ忘れ貝ぢやといふ詐りと知れど尋ねたもの故一つ求めますぞとは云ふたが忘れて其まゝ立ち去つて仕舞うたやつぱり忘れ貝ぢやつたかも知れぬ。

大和川を渡れば堺ぢや行つても行つても限りない長い街でまるで六尺禪のやうちや堺に比べると大阪は越中禪ぢや淀川は其の越中の紐ぢやイヤといふ時には越中では腰が縮らぬ緊禪一番も六尺禪で無うては堪へがない大阪の市政が始終ぐらくして市民の腰が一向に縮らぬのも無理がない市其の物が越中禪ぢやもの。名高い妙國寺の蘇鐵を観たこれは關東までも響いて居る蘇鐵ぢや尤も關東では大ワサビで響いて居るのぢや成程山葵にしては聊か大きい蘇鐵では一向不思議もないこれは何うでも山葵にする事ぢや。

此寺にも寶物がいろ／＼あつたやうぢやが、山僧は斯ういふものを拜見しても氣のぬけたワサビほどにも思はぬのぢや。その中に一つ、光り天目の茶碗といふのがあつた。家康が當寺に滞在中、光秀の信長殺害の報を聞いて俄に歸國の途に上らうといふ際、此寺の上人が抹茶を進めた。其時家康は其の抹茶茶碗をひねくり廻して頻りに威服して終う終う申し受けて、代りに秘藏の茶碗を古金襴の袋に入れて當寺に寄附した。夫れが此の光り天目の茶碗ぢや。茶碗は何んでも無いが、家康の狸爺が尻の穴をムザ／＼させながら、態を落附拂つた風をして、小汚たない茶碗をひねくつて居た面附が、惚ばれて一寸面白いのぢや。

(三)

妙國寺の門前を北へ廻ると例の土佐十一士の墓といふが御座る。堺の警護を仕つて居つた土佐藩の武士が佛蘭西人と衝突して切腹仰付けられ、佛蘭西の役人立合の上で一同物の美事に切腹致した、ハラキリ

と申す言葉が世界中に轟き渡つたのは、佛蘭西人が此十一士のハラキリを眼前に見たが始めぢや。些細な事でもイザと云へば腹を切る覺悟でかゝつたのが昔の武士の取り柄ぢや。イザと云へば公判廷へ罷出て執行猶豫を囑願する覺悟とは大分行き方が違ひます。此の十一士中には格別の人物の居つたやうにもないが、兎に角見事に腹を切り得ただけでも當今の人間と格が違ふと思つて、山僧は墓の數の十一だけヒョイ／＼と頭を下げて敬意を表したことぢや。

堺には南宗寺といふ禪寺がある。筈ぢや、天龍寺の峨山和尚が居つた寺ぢや。今の東海靖州和尚も一癖ある老僧ぢやと承つて居るので、件の南宗寺に罷越した車夫が此寺に利休の墓があるで是非見ろと申す……何行脚の僧が車に乗るとは奈何といふのか……善哉問やぢや。行脚を致すと申して後生大事に自分の脚ばかりで歩いて居るのは昔の坊主の事ぢや。昔でも三藏法師などは馬に乗りよつた行脚とは脚

で行くのぢや、自分の脚でも他の脚でも馬の脚でも好いのぢや、佛法にも融通念佛といふ事がある。一人の念佛の功德が他人に融通すると申すのぢや、今にまだ進歩すると、多勢の念佛を銀行へ預けて置いて、鐵道事故、難船、財産差押へ、其他急場の際に引出して融通する事になるぢや。らう。車夫の行脚は乗客の行脚ぢや、山僧は車上に居眠りをこいて居ても車夫が行脚をして呉れる、亡者は黙つて居つても坊主が經を讀めば極樂へ行かれると同じぢや。

で其車夫のいふまゝに利休の墓を見た。髪を埋めた墓ぢや、粗末な茶氣のある墓ぢや、紹鷗の墓もあつた。これは山僧と同じ天下茶屋の住人ぢや。此墓の下に居るかどうか知らぬが、山僧は御前の森の直き上の所に居る。丑三つの頃にでも遊びに来なさいといふてやつた。

さて庫裏に參つて老和尚に面會を求めた。取次の雲水が「何御用で御座る」といふのぢや、滅相な寺に用事のあるのは死骸になつてからの事

ぢや、息の通ふ間はお寺には用のない山僧ぢや、何も用事はお座らぬ」と申した。

聽て隠居所に通された和尚は婦人の客を相手に何か論じて居つた所ぢや。昨年から眼を病んで物を観る事も出来なんだ。眩ゆ相な眼附きをしてお座る新聞も此の一年ばかりは一向に讀まぬから新聞代を拂ふが惜しいで已めい」と弟子共に言つても、弟子共は自分等が讀みたいでなかく、已めんでノウ、新聞を讀まんと社會の事が少しも解らぬが、何か弟子共の話では衆議院の議員共が牢屋に入れられたとかいふ事ぢや、ノウ、なご、言はれる新聞を讀めばそんな事が委しく解るだけの事ぢや、山僧は和尚が新聞を讀まぬのは賛成ぢや、社會の事がまるで解らんで、たゞ議員が牢屋に入つた事だけ解つては和尚中々迷惑なことぢや、らうと察し申した。尤も今の新聞は議員が盜賊をしたといふと、其當座は三千世界の活動がハタと止つて、たゞ議員が盜賊をし

て居る外何も無いやうな新聞をこしらえるものぢや何人斬があつたと申すと明日は宇宙間に何人斬の外何事も無かつたやうな新聞が出る迷惑は和尚ばかりではお座らぬ。

和尚は眼は不自由のやうぢやが口は中々自由ぢや哲學科學歴史文學神儒佛なんどのあらゆる問題を捉へて古今東西に亘つて滔々已ます何うせ頭から尻まで悪口づくめぢやが破邪即顯正ぢや折には多源一種などいふ西洋の科學者の説を珍らしがるがアレハ阿含部にチヤント出て居るなどいふ事を會釋なく説き出されるので愈面白いのぢや山僧は近頃會心の至りに思うて覺えず三時間も座り込んで餓の御馳走になつて罷り出た。

此寺は大林和尚の開基澤庵和尚の再建で由緒のある寺ぢや東坡の筆ぢやとか狩野某の筆ぢやとかいふものが澤山あるといふ事ぢやによつて古ぼけたもの、好きな人は恭しく拜觀を願ふべきぢや山僧は

件の婦人客の案内で千の利休の茶室を拜見に及んだ背の高い山僧なごはコツくと頭ばかり打ちつけて茶室と申すものは例ながら痛いところぢやと思ふた頭に一寸手でも觸らうものなら己れヤレ真向微塵と猛り立つべき戰國時代の荒武者を斯ういふ所に入れて頭をコツく打たせて内所で舌を出して笑つて居た利休といふ男は中々の才物ぢや。

二代將軍の造つた座雲亭といふのは此茶室と共に有名ぢや何うやら瘋癲病院の躁暴患者の隔離室のやうぢやで一層風韻があるのぢや。東照宮の祠もあるが其の後の床下に無名の墓といふのがある家康が大阪の戦に敗けて逃げる時に敵に害されたのを大久保彦左衛門が首級を護つて此處に埋めたのだと言ひ傳へて居る思ひ切つた出鱈目ぢやが家康の事ぢやから此邊で狸死位はやつたかも知れぬテ。

堺の街外れから真直に風街道を参る。牛の車が濼々と砂塵を揚げる。尻について参るのは牛後となつて男子の面に砂を塗られるのぢやが英雄畢竟馬前の塵と悟り果せた山僧ぢやで、牛後の砂埃位は何とも思ひ申さぬ見なされ参るほどに道端に屠牛場がある。今斯やうに人間の面に砂をかけて揚々と頭を振つて御座る牛は臆て屠牛場の露と消えるのぢや、さう申せば向ひ側には焼場がある。其の牛の尻について賢しさを申し居る此の山僧も臆て彼處の灰ぢや尤も牛の肉はロースになつて高う賣れるが、山僧の灰は肥料にも賣れやせぬ、矢張牛の方がえらいやうぢや。

大鳥神社に参つた官弊大社で祭神は日本武尊ぢや伊勢の能褒野に鎮め奉つた尊の大御魂が白鳥となつて飛び廻られた末此の地に止まられたで、其處に社を建てたのぢや、社殿は眞新しうて太古を偲ぶに便りが悪いが神域は千草の森と稱へて老杉古松蒼鬱たり尊は婦人のやう

に美しうて、然も智略腕力とも人に優れたと申し奉る山僧なごも幼い折は何うにか致してさういふ男に成り立ちたいと餘念なう祈つたものぢや、もう少し年が若かつたら、恭しく社前に頼いて大分にお願ひ申さしやならぬこともあるが、もう斯やうな身の上と相成つては我が上には何の素願も御座らぬで、たい謹みて拜を致す。

此處から濱寺に十町内外ぢや、濱寺の松原は何時もながら心ゆく事ぢやが、其の中は大小様々の家が軒を接して、松原の裡に家があるのやら家の裡に松原があるのやら解り申さぬ、濱松風も浪の音も怪しい物の音に消されて、清々しい濱邊の景氣などは些かも無い、申さば松原の上から大阪を採込んだやうなものぢや、山僧のやうなものでも其のなかをぶらりと歩いて居ると何となう娑婆氣が出て、出家せぬ昔が戀しうなる山僧は今日は此處を泊とする筈ぢやつたが怖しうなつてふつと思ひ止つた、此道から南へかけて萬葉に見ゆる高師の濱ぢやが。

大伴乃高師乃濱乃松之根乎枕宿村家之所思由

で斯やうな所に寝る位なら山莊に寝た方が好いちや。

波打際に鯛の上がつたやうに蠢いて居る夥しい裸體の男女を遠目に見ながら石神病院の知人を訪ねた肺病の微菌を注射したモルモットやら微菌培養室やら佐々醫員の説明を聴きながら見廻つたイヤハヤ詩に曰く戦々競々として深淵に臨むが如く薄氷を踏むが如しとはこれぢや、鯛の中に鯉のでんぶのやうに一杯に填つて居るのは患者の微菌のモヤシぢやさうな検査鏡を覗くと蛆のやうな蟲が赤く染まつてころがつて居るこれが結核菌ぢや斯やうな小さい蟲を澤山に殖やす事は出来ても此蟲に喰はれる人間を助ける事が出来ぬとは、小の蟲を助けて大の蟲を殺すといふものぢや

(五)

あゝ我れながら淺ましい事であつたぞ菩薩は生死の變を懼れず生

(290)

死に入りて生死を度し地獄に入つて經戒を説き餓鬼に入つて布施を説き畜生に入つて姪伏を説くところ、苟くも菩薩候補者ともあるべき此山僧が微塵を碎いて千萬分致したやうな微菌などが恐ろしいとは何事ぢや、醫者と申すものは根ツから菩薩らしうもない人間ぢやが、夫れでも斯やうに微菌裡に逍遙して泰然として御座るは誠に生死中に處り之を以て樂と爲すとある菩薩に遇いものぢや、ト斯やうに考へると恐怖の念は霜のやうに消えて、山僧は件のパチルスのでんぶで温かい飯なご喫て見たいやうな氣も致した。

されば濱寺の松原と雖も斯うに鄭聲衛音の巷とは相成つたが菩薩は本願を以てのゆるに不淨の土を取るとあれば山僧のやうに恐怖をなして退却致しては出家の本分にも背く譯ぢや去れば早速に引返し畜生に入つて姪伏を説かかなとも存じたが未だ菩薩候補者ぢやによつて奈何かと思ふた先づ菩薩に當選した上の事と致さう。

(291)

承れば西洋などでは森林の類は殊の外大切に致し殊に都に近い邊に山の奥のやうな森林を作つて都人士が塵塗の肺の臟を洗ふすがと致し又小兒を森の裡で養育する森林學校といふものも獨逸とやら申す國には却々盛なさうな此邊のやうに可惜森林を都の風に吹き捲くるのは本願を以てのゆるに不淨の土を取る菩薩の多い國故差支もない事であらうが若し斯やうな森の裡で小兒を育て上げたならソリヤコソ一大事ぢや。

先づ罷り退る事と致して信太の森の葛の葉神社に詣つた婦人に化けた白狐を祀つてあるで名高い社ぢや、拳固ほどの森ぢやで人里離れたけはひも致さぬ狐も斯やうな處に住居致したによつて娑婆氣を出して都會に現れて人間の妻となるやうな野望を起したのぢや、人間も狐も棲む所が大事で御座る。

葛の葉委見の井戸と申すのがある右の狐が人間に化けよつた折乃

至人間から狐に戻りよつた折に此の井戸に姿を映して見たのぢや、彌次喜多の入つた風呂桶の類ぢやが夫れよりは聊か詩趣のある事ぢや。此森を遊園地に作りかけたさうだが今は荒れ果て、葛の葉が出さうぢや、若し遊園地などが出来て茶店の類が軒を列べたら人間の狐に化けたのが現れるが定ぢや。

大津川を渡つて忠岡磯上などを過ぎれば岸和田ぢや、日が暮れたによつて泊

(六)

岸和田は岡部前司法大臣の城下ぢや、日本の大臣は殿様大臣ぢやで法律の法の字はシに去ると書くといふ事さへ知つて居れば司法大臣にも成れるのぢやが、此處の殿様は却々殿様らしいものない殿様で平民の知つて居るとは大概心得て居られるのみか、時折は平民どもは下情に通せんで困るなど、仰せられる酒などさし召されると何んだ此

べら棒なごど仰せられて人の頭をボカム、御見舞なさるが癖ぢやと
は承るだに痛快な殿様ぢや、斯やうな殿様の出身地ぢやと思ふと此の
小さな町も懐しい事で御座る、小さいは小さいが南海道の中心ぢやで
繁昌ぢや、海に沿ふて後が山になつて居るところは神戸を小さくした
やうぢや。

此處から一里餘りの龍臥山久米田寺といふは隆池院とも稱し行基
四十九院の一とあるによつて詣る、行基は弘法と相並んだ僧侶學者醫
師彫刻師建築技師測量師農業技師手品使ひなどを兼ねた萬能坊主
ぢや、縁起には隆池院は一國の命珠萬民の依怙なり、堅牢地神、黄牛に現
じて塊を曳き、日月星辰白人に示して堤を固うす、大聖老人は鷲峰海會
の土を運びてこゝに築き善哉童子は清涼山窟の壤を荷うて之に加ふ
とあるが、參つて見るに斯やうに天神地祇力を合せて築き上げた古刹
も年月と共に凡化して仕舞うて當今では詣る人も鮮なうて、何月何日

とやらの命日にも賽錢の上り高は十圓にもなり申さぬと其處の一坊
の百姓片手間の住持が嘆息して居つた。

寺の前の池は周圍八町と稱するが、これは行基技師が此の邊の灌漑
の爲めに天平十年に掘り上げたのぢや、行基は此邊に水田三百餘町を
拓いて此の寺の維持法はチャンと講じて置いたのぢや、今の坊主共は
矢鱈に寄附勸化を求めて愚夫愚婦の臍線捲上を職務と心得て居るの
ぢやが、上代の坊主は斯やうに田地を拓き野山を平げて、愚夫愚婦の臍
線を捲き上げるどころか、臍線を造つてやつたものぢや、當今流行の模
範自治村とやらを弘法や行基は遠の昔大分に經營したものぢや、其恩
返しに百姓等が後の坊主に其臍線を納めて居るのぢやらうが、恩返しも
實際のある話ぢや、全國の古寺名刹がボツリと瓦解致すも無理の
無い次第ぢや。

日盛りの熱砂を踏んで三里が所を犬鳴山へ參らうと存するに就て、

途中お夏清十郎の墓のあるといふ水間寺に詣つた、本尊の觀世音は天竺の文殊菩薩の作で倫敦の博物館にも見當らぬ珍物ぢやと申すから、矢張彌次喜多の風呂桶を去る事遠からざる御本尊ぢや。

境内に愛染堂といふのがある縁結びの神ぢや、アヒソメ堂と申さんでアイゼン堂と申すのは相惚れをサウエツと申すやうなものぢやが、

お夏清十郎の愛染椿縁を結ぶの玉椿

と謠にある椿が其前に御座る、お夏清十郎の兩人は此處で情死を遂げたのぢやさうな、お夏は此の水間のもの、清十郎は薩摩隼人ぢや、普天の下率士の濱自然主義の行はれざるなきは、今も昔も變りはない。

此堂の格子やら前の椿の枝やら一面に紙が結びつけてある、小指と拵指で結んで願をかけるのぢやさうな、白紙を使ふのぢやさうなが中には何か文句のあるのがあるので一つ解いて讀んで見たら、細い野紙に四角な文字で「物品引渡は相方立會の上とす、但異議ある時は其場限

りに申出とあつた。

(七)

犬鳴山は唐土の蛾眉天台はいざ知らず我が邦の神懸耶馬溪の奇も争かだと思はる、天下有數の勝區ぢや、とは南海鐵道で出した案内記の口上ぢや、他のものを人が勝手に賞めるを愚圖々々いふ事もないで、山僧は別段に小言は申さぬが、右の文句のうちの神懸耶馬溪は天王寺中之島兩公園と改め、天下有數は南海有數と改めて欲しいのぢや。

所々小さい瀑になつて居る溪川に沿ふて登る路は些か幽邃でもあるが行き止まつた猫の額ほどの窪地に新しい小さな堂宇がある、水の枯れた溪川の石ころにキラ／＼と西日が反射して居るのも熱ぐるしい事ぢや、これから數町上ると土泥消山骨露、辟硯之奇不可名狀と南岳翁の漢文で見たが、此の漢文といふ奴がイカ様物ぢや、哩今通つて來た溝川に毛のはえたやうな谷のことを、激泉澎湃雪渦漲崖ぢやの「巨巖突

兀泐泐萬狀ぢやのと云つて居るので大抵相場の解つたものぢや。ト云ふものの犬鳴も山僧が申すほど埒のない所では決して御座らぬ先づ山僧が申すのと漢文が申すのとの中程位ぢやと思ひなさる。

山僧は此山の風景よりも此の山の因縁が氣に入つた事ぢや。獵師が頭の上に大蛇の居るのを知らんで鹿を狙つて居ると飼犬が烈しく吠える。夫れが爲め鹿が逃げて仕舞うた。獵師は怒つて山刀を振つて犬の首を刎ね飛ばした。すると其首が飛び上つて大蛇に噛み附いて殺して仕舞うた。夫れで山を犬鳴きと申すといふのぢや。今一つは淡路の小聖といふ男が禁裏に參つて官女のしづと申すに戀慕されたが逃れて此山に入つた。しづは執念強く追ひかけて參たのぢやがやうやく小聖の所へ參ると忽然として白雲たなびいて小聖の姿は見えなくなつた。しづは悲歎に堪へ兼ねて其場で焦れ死んで仕舞うた。夫れで此寺を一名白雲院と申すのぢや。女に慕はれたで山に逃げるといふのは金があ

り過ぎて首を縊る類ぢや。當今の美しい男が理想とやら心得ることを昔の若い男は災難と心得た。昔と今とは理想と災難が顛倒して居たのぢや。

斯やうな次第で犬鳴山を辭して櫻井まで五里餘りの道を下つたが、其の途中に例の蟻通の大明神が御座る。唐土から我が朝廷へ螺旋形に巻いた管へ糸を通せといふ難題を持ち込んで外交問題を惹起さうと致した。其時本朝の物知りが蟻の尻に糸をつけて其の中を通した。さて其の人神になりたるにやあらんと枕の草紙にあるさうな發明家を崇拜するは至極結構ぢやが如何に科學思想の乏しい時代とは申せ。かばかりの工夫を致したで大明神になれるとは餘りに埒のないことぢや。我々日本人に發明心の乏しいのも誠に一朝一夕の事では御座らぬ。ラヂウムやX光線や無線電信などの新發明を致すものが出たら何に祭つたものやら處分に困る事であらう。幸ひに未だ一人も出ぬからよい

様なもの、出たら難儀ぢや、當今でも悪法をかいて俄分限になりよつたものが華族とやらになりよるが、さらばもし真正直に致して大分限になるものが出来たら何と致す、何真正直に致し居つては分限者にはなれやうがないから安心ぢやと申すか、然らばさう思うて安心して居るがよからう。

(八)

樽井には湖月といふ宿が一つあるばかりぢや、滅法大きい建物ぢやが、これは此土地から出て満洲で金を儲けたとか申す、大津某が儲けた金を故郷の樽井繁昌の爲めに抛たうといふ覺悟で打建てたのぢや、ナンカンと申して矢張此處でも一儲けといふ企圖ぢやらうが、さやうな事は何うでも好い、濱は美うして風が消うて海が静かで、波は穏かで、家が大きうて新しうて、居り心地の好いことぢや、怪しい茶店で濱を埋めて、關東の御開張のやうに赤や黄色や様々旗幟を隙間なく立て列ねた

(300)

濱寺から見ると、こゝの方が遙か大阪離れが致して居るだけ結構な土地ぢや、欄に倚つて鏡を磨いたやうな曉の海を見渡しながら、濱松風に耳を澄ましたながら、こゝに斯様な大きい家臺が無うて海と松ばかりだつたら、尙ほよろしかろと山僧は思ふた。

朝まだき素川居士が見えた居士は、聖人の徒ぢや、水なる哉、と水さへ見れば飛び込んで泳ぐ、自在なると魚の如しぢや、早速海に入つて波の間から法師を呼んで入れ、と申す、法師は木の端の如しと、清少納言は云ひ居つたが、此法師は石の片の如しで、一向に水に浮ばぬのぢや、さりとは海川を渡る折りに、嘸かし心安からぬとぢや、らうなごゝ人は申すが、笑止や、五濁の重石を負ふて生死の海に浮沈すれば、墨の上に寝て居つても不安心でないか、生死は海川を渡る折ばかり參るものでは、御座らぬ、山僧は斯やうに悟つて居るで、水に浮ばぬは何の苦にもなり申さぬ、まして信能く河を渡すと、佛陀も仰せられた昔、江南に愚夫あり

(801)

佛在すと聞きて河を渡りて至らんとするに舟筏なし人に河の深さを問ふに其人詐りて水際みづぎはしに及ぶのみと答ふ恐夫即ち水の上を歩むに誠に水際を没するのみ來りて佛前に禮を爲す人々驚き怪しんだが佛は之を讀じたまうて善哉々々信を執ること誠なれば生死の淵すら渡るべし數里の江何ぞ奇とするに足らんやと仰せられた又莫天連にもイエスカ海の上を歩みて舟の方に參つたを見て弟子共變化のものぢやというて騒いだといふ事ぢや其時ペテロは私にも水の上を歩ませて呉れと云ふて浪の上を歩んでイエスの方へ參らうとしたが波に懼れて沈みかけたイエスはそれを助けながら信仰うすきものよ何ぞ疑ふやと申された何んと佛陀の御言葉と異語同義ぢやらうがこんな立派な證據が二人まであるぞ信だにあらば水に落ちても裸も濡れぬ位ぢやよし罷り間違うて首までヌツポリと入つて即刻他界へ渡り越したところで何程の事も御座らぬ佛陀の御世話で極樂淨土に參るかイエ

スの紹介で天國に生れるか何方に轉んでも此世に居るよりも増しぢや。

右やうに山僧は大悟して居るで水に溺れぬ用心は無益ぢやが苟くも山僧ほどの覺悟のない輩はペテロのやうにブク／＼とやつては災難ぢやによつて游泳の稽古は肝要ぢや今日も大阪の師範の生徒が百名ほど教員の指揮で陣太鼓をドン／＼と叩いてヨイコラ／＼と總懸聲で懸命に泳ぎの稽古ぢや山僧は之を見物しながら信仰薄きものよ精々稽古しなされと云ふてやつた。

(九)

晝過ぎに梅井を發して孝子越街道を參る尾崎箱作なんごを過ぎて垂仁帝の第二の皇子五十瓊敷入彦命の御陵を一週して淡の輪についたのは夕頃ぢや愛宕山とやらいふ松山の頂上の何とか申す宿についた二階の見晴らし臺から眺め渡すと松山の下は青田の緑で其下は碧

玲瓏の茅渚の海ぢや沈み果てた夕日の名残のほんのりと紅い空の果
に濃紫の淡路島山其の蔭に二つ三つ捨てられたやうに帆影が浮ぶ横
手を見ると飯盛山とやらが聳えて其の裾山の蜿蜒が起きつ伏しつ折
り重なりつ大波を打つて海に突出て居る海山遠近の眺めは此の沿海
では先づ淡の輪ぢやらう。

遠近の眺めは甚だよろしいがズント近い此座敷の邊の眺めは根つ
から感服致さぬ何づれの座敷も明け離しのところへ何處を見ても赤
いものをピラシヤラとさせた藝者とお客が船船のついたやうにゴロ
ゴロ寝て御座る山僧の山荘に山僧の弟子が寝て居る譯ではないで孔
子さんが宰子を叱つたやうに己れやれ馬糞の堆で取り繕ひもならぬ
鼻つまみ野郎と怒鳴つて追ひ出す譯には参らぬ自然此方から退却致
すが法ぢやと思ふたが夜の山道ぢやで獨り行脚は覺束ない例の融通
行脚に致さうと存じて此地に人力車はあるかと尋ねれば無いといふ

さらば深日まで案内の者を雇ひたいがあるかと申せば有る事はある
が今は無いと申す然らば舟はごうぢやと聞けば少々アラシが出たで
覺束ないと申すアラシは些か恐れる此法師は水に浮ばぬ法師故ひよ
つと致して深日を通り過ぎて極樂浄土まで参るやうの事があつては
未だ少々用事を爲残した身體ぢや都合が悪いと存じ何時アラシが
参るぞと云へばコレ此通りアラシが出て参りましたと申す何んの松
の梢に少しばかり濱風が鳴つて居るばかりぢやコレがアラシか山僧
の故郷ではアラシとは暴風雨の事を申すのぢや斯やうな蚊の鳴くや
うなアラシなら速く舟を出しませといふに何としても二人かゝらね
ば出ませぬといふ此鏡のやうな海を漕ぐに赤子でも間に合はう此邊
の船頭はよくくの意氣地なしと見えるさやうな船頭に夜船を漕げ
と申すと坐睡の事と合點してコクリ／＼やる事であらう先づ見合せ
る事と致す然らば此處の驛長に頼んで深日から車を廻して貰ふ事に

して呉れと頼んだが待てご／＼埒明く模様がないさりとて談判不調の敵國に俘虜となるのも心外ぢや、松山の頂上故身體維れ山まると申すものぢや兎に角罷下る事と致さうと停車場まで下りて參つて驛長に相談致して居ると計らずも本山の恩和尚以下肉食妻帯般若湯公許の面々が此處へ魚釣に參つて今終列車で歸山するといふに出會した。コレハコレハと申すもので斯やうな夜陰に行脚も難儀であらう我等の立ち去つた跡に宿を取つては如何と云はれたに依つて去れば各方の立つた跡なれば定めし大風の吹いた跡のやうに静な事で御座らうと早速濃の黒崎館といふに罷り越して先づ一夜の宿には事缺かなん

だ。
海水浴や温泉場といへば雌雄の幸予どもがゴロ／＼致すべき不健康な保養地と定めて居るは二十年も前の考へで御座る今でも到るところに幸予式の温泉場や海水浴場が少くないが夫れは未だ在來の弊

風を改め得ないのぢや、淡の輪のやうな新進地が夫れを真似たらとても流行る事でない、四方に新式の海水浴場が續々出來るに獨り宿場茶屋式を守つて幸予ばかりを御得意にして居るのは不心得千萬ぢや山僧は海邊の景色の好いところは成るべく流行らぬやうにして海山の景色を損にしたいのぢやが俗に入つては俗を説くで斯やうな事も申して見るのぢや。

(十)

さて此の淡の輪といふ所は却々の由緒のある土地と見えて彼處の森は何某の皇子の陵ぢや、此處の小山が誰の墓ぢやなご、申して大分昔の豪傑がゴロ／＼轉がつて居るやうぢやが何せ、垂仁天皇の御代の雄略天皇の御代の竹内宿禰の曾孫の山僧などの生れん前の人ばかりぢやで、因縁は恐いても一向腹に入らず大方忘れて仕舞うた何んでも出征の勅命を蒙つた時に出征は致さうが女を一人伴れて參りたい